

アリア魔る  
リる  
ミま  
ア集  
フの違  
アちの  
イたは  
テ雄の  
ス英な  
ヘが窟

red knight

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは英雄に憧れ、英雄を仲間にし、そして英雄に愛された少年と英雄達の物語  
番外編←

<https://syosetu.org/novel/277301/>

# 目次

プロローグ	1
このシリーズの設定I（基本設定&へ ステイアファミアpart1）	8
ステータス情報（ベル・クラネル）	17
英雄復活	
第1話	25
第2話	38
第3話	57
第4話	70
第5話	86
怪物祭騒乱	
小話part1	146
第7話	123
第6話	105
第9話	180
第10話	193
第11話	206
第12話	220
第13話	239
白兔ト浅利	
第14話	256

第  
1  
8  
話

第  
1  
7  
話

第  
1  
6  
話

第  
1  
5  
話

316 299 285 269

# プロローグ

冒険者の街オラリオ……………

その街には……………

数多くの英雄・好漢・傑物を集め慕われる一人の少年とその少年に付き従う英雄たち  
ファミリア・ミイス  
の眷属の物語である。

今から14年前の出来事……………

「……………私は……………誰に召喚された……………」

その男の傍には白い髪に赤い目をした赤子がいた……………

「この赤子が私を……………」

男は辺りを見回す。

この少年の母親であろう女性の亡骸とその傍に合った無数の死体、そして真っ赤に染

まった壁や床。

その光景をみて男は全てを察する。

「なるほどこの女性は強大な魔力の持ち主で自分の命を引き換えに自分の子を……………」

赤子を拾い上げると

「ならば私が君を守ろう……………この命果てるまで……………それが私が召喚された理由なら……………」

14年後

オラリオの冒険者たちの間で新興勢力が暗黒期終盤のこの町に多くの武勇を残していた。

『古代の禁書と言われる魔導書に巣くう黒龍に匹敵する魔獣をたった15人で討伐した』

『太陽神の眷属100人に対したった8人で完膚なきまでに圧倒した』

『ダンジョン最下層にわずか35名で挑み無事生還した。』

この話からも彼らがただの新興勢力とは訳が違う事が分かるだろう。  
そんな彼等だが……………

### ダンジョン18階層

オラリオのダンジョンにおいて数少ない安全地帯であるこの階層の森林地帯に一組のキャンプが存在した。

「現状はどうだ『鎮魂の魔王』？」

「そうだな……………正直言うとう頭打ちだ。50階層以降は一気に難易度が上がる。正直团长がいらない状況で55階層まで行けたのはある意味成果だと言えるだろう。」

「そうか……………」

「そんなに悲観せずともいいではないか『無限の剣製』よ。」

「そうは言うがな『征服王』、团长不在の我々はある意味オラリオでも異端の存在だからな。」

「それよりも团长代行、帰還するためのプランはどうする？」

「とりあえずはチーム夜天の報告を聞いてから判断しようと思う。」

するとテントに男性が一人入って来る。

「報告だぜ団長代行。どうやら地上の方で何かあったらしい。」

「どういう事だ『心臓破りの槍』？」

「それについては『烈火の将』から聞いてくれや。」

そう言つて中に入って来たのは赤い髪にポニーテールの女騎士だった。

「報告する。今から四日前の話だが……団長が目を覚ました。」

「!!!?」

その一言にテント内にいた者たち全員が驚く。

四日前ヘステイアファミリアの本拠地『聖火の竈』

オラリオでもそれなりの規模の屋敷であるヘステイアファミリアの本拠地である『聖火の竈』には4年前から主神と団長代行、そしてファミリア専属医師と一部の者以外入ることが許されない部屋が存在する。



その部屋で

「……………」

一人の少年が目を覚ましていた。

ガシヤーン!

「ベッベル様!?!」

「……………リリ?」

再びダンジョン18階層

「目を覚ました当初は記憶の混濁が見られたが精神も身体もどこも異常がないようだ。」

「そうか……………」

「今は居残り組と共にリハビリがてらダンジョンの3階層まで潜りながらスキル等に変化がないか確認しているとの事だ。」

「……………付き添いは?」

「案ずるな。かつての……………ヘステイアファミリア最強チームと言われたメンバーの内

3人がベルと一緒にいるんだ。問題はない。」

「そうか……………遠征は中止して帰還する。すでに強制任務は達成しているし今回はこれでいいと思うが」

「私に異論はない。」

「右に同じだ。」

「チーム夜天としてもその考えを支持する。最も主たる『冥王』は鼻からそのつもりだ。」

「分かった。メンバー全員に通達。準備を終え次第地上へ帰還する。では解散。」

団長代行たる青年はテントを出て一人リヴェラの街を一望できる高台へ

「……………そうか……………ベル……………我が召喚主よ。戻って来たか……………君が私に誓った約束は果たされた訳か……………なら次は私が君と交わした約束を果たす番だな……………」

青年は右手を天に掲げる。

「ヘステイアファミアリアが一人、『無限の剣製』が我が主たるベル・クラネルに誓お

う……………わが命果てるその時まで君が英雄への道を進むための道しるべたらんことを……………」

これは英雄に憧れ、英雄を目指し、そして英雄に愛された白兎ほくと、彼を慕い、そして  
彼と共に歩み続ける英雄われわれ達の眷属ファミリーの物語

## このシリーズの設定I（基本設定&ヘステイアファミリアpart1）

このストーリーを思いついた理由

ダンまちをベースにこの作品に他の作品をクロスオーバーさせる作品は多くありますが精々1作品か2作品とクロスオーバーさせるぐらいだったので多々の作品をクロスオーバーさせてみたいと考え私（筆者）が好きな作品やダンまちの世界観に合いそうな作品やキャラクターを登場させて活躍させようと考えたのがきっかけ。

出てくるキャラクターがベルより主人公っぽくなるのをできる限り抑えるためベルを強化しました。

あと原作で死亡した良識あるキャラクターは生存させる方向で書いています。

後出てくるキャラクターをなるべく均等に他のファミリアにも分散させて格差をできる限り無くしてみました。

登場するキャラクターの出てくる作品及びクロスオーバーした作品

以下の通り←

- ・家庭教師ヒットマンREBORN!
- ・魔法少女リリカルなのはシリーズ
- ・Fateシリーズ
- ・文豪ストレイドッグス
- ・テイルズオブシリーズ
- ・魔法使いの嫁
- ・トリコ
- ・コードギアス
- ・ログ・ホライズン
- ・ゲットバツカーズ―奪還屋―
- ・HELLSING
- ・BLACKLAGOON
- ・機動戦士ガンダムシリーズ
- ・ありふれた職業で世界最強
- ・プリンセスコネクト! Re:Divide
- ・アークザラッド

今後が増える予定です

ヘスティアファミリアについて

オラリオ最大派閥の一角。

下界に降りてきたばかりのヘスティアが当時6歳のベル・クラネルと保護者のエミヤ、師匠のユキチ・福沢らと共に立ち上げわずか8年でオラリオ二大派閥だったロキファミリアとフレイヤファミリアを追い抜きオラリオ最強の称号を手にした。

団員のほとんどがベルが見つめてきた面々で皆他のファミリアなら幹部になれるほどの実力者が揃っている。

ダンジョンの最高到達階層は80階層。

入団条件は幹部3名以上の推薦という狭き門であることからかなり厳しい。

ちなみに冒険者成り立てでも幹部の推薦であれば入団はOKである。

結成当初はヘスティアが神友ヘファイストスへの借金を背負つてたり団長のベルの年齢が問題視されたり度々騒動の中心にいベルがいたりして問題児的な扱いをギルドから受けていた。

マフィアオブボンゴレの後継者争いを鎮圧したり、神の名をかたる偽ファミリアであるカプトファミリアを壊滅させたり、オラリオで起きた魔術師昏睡事件『闇の書事件』を解決したり、オラリオの商業を乗っ取るうとしたフィッツジェラルド商会とそれに加担

したアポロンファミリアを戦争遊戯ウォーゲームで叩きのめしたりと数多くの偉業を成し遂げファミリアとしての格がどんどん上がっていき現在オラリオ最強最高のファミリアとなった。

オラリオの外にも支部があり、メレンやメイルストラにも団員がいる。

団長はベル・クラネル、副団長はエミヤとユキチ・福沢。

現ホームの『聖火の窯』は戦争遊戯ウォーゲーム後アポロンから押収した屋敷をゴブニョファミリアとの共同作業で改修したもの。

旧ホームの廃教会はアポロンファミリアの襲撃で破壊されるも戦争遊戯ウォーゲーム後にアポロンから押収した美術品を売った金で再建し現在教会周辺の土地はヘファイストスから買い取り現在ヘステイアファミリアの管轄下にある。

探索系ファミリアであるが喫茶翠屋のスポンサーだったり、ミアハファミリアの製菓研究の出資者だったりと商業関連でも影響力を持っている。

ベル・クラネルについて

幼少期にエミヤに連れられて世界中を旅して多くの英雄たちと絆を紡いできた。

ある日とある街の本屋で奇妙な本を見つけその本を読むと翌日その本は消えベルの眼が右側だけ金色に変わる。

エミヤの診断で古代ベルカ時代の魔導書の一つ『英雄凶鑑』<sup>アルゴブック</sup>であることが判明、ベルはその身にその魔導書の特性である『偉業』を成し遂げた英雄を記憶しその能力を一部行使する力を得る。

旅の過程で剣の師匠であるユキチ・福沢や美食屋のトリコと料理人のコマツたちと出会い、ウミナリでの『ジユエルシード事件』、メイリストラで謎の長剣使いと交流したりと多くの経験を重ねて6歳の頃にオラリオへ。

義母に聞かせてもらった母親が好きだった場所である廃教会にやって来てそこでヘステリアに出会いそのまま彼女の眷属になる。

エレボスによるオラリオ襲撃事件に遭遇し義母のアルフィアらと再会。その際彼女の病気が悪化しベルが英雄凶鑑<sup>アルゴブック</sup>の力で延命に成功。さらにエミヤの治療で病気を治したことよってアルフィアは生存。ザルドもユキチのおかげで生存する。

その後ヘステリアファミリアの団長としてオラリオ史上初最年少団長として名を刻む。

その過程でロキファミリアのアイズに誘拐？されたり、アストレアファミリアの面々に可愛がられたりと色々な事があった。

10歳の頃には史上最速でレベル4にまで到達しヘステリアファミリアも規模が大きくなった。



ある時アストレアファミアリアの遠征に助っ人として同じくレベル4のツナ、アツシ、ナノハ、マシユと共に参加するもルドラファミアリアの襲撃に遭遇しジャガーノートの出現により多くの被害を受ける。その際は英雄図鑑アルゴブックの力を最大限使い、自身の魔法でジャガーノートを倒すことに成功する。

だがその際に魔法を過度に使いすぎたため、ジャガーノートを退けた後すぐに倒れる。

その後4年間眠りについていた。

物語は4年後彼が目覚めたところから始まる……

エミヤについて

15年程前に闇派閥イヅイルスの冒険者に命を狙われたメーテリアが生まれたばかりのベルを守るためになけなしの魔力を使って召喚されたサーヴァント。

召喚された当初はメーテリアの願い通りベルを守るため冒険者たちを血祭りにあげるが魔力を使いすぎたメーテリアは亡くなりまだ赤子のベルだけが取り残され、エミヤは彼女の願いにこたえるべくベルを育てることを決意。

その際当時同居してたアルフィアからは妹の死の原因として嫌われ、ザルドとは料理好きが高じて友人になり、祖父であるゼウスにはただただ呆れていた。

ベルが3歳の時、アルフィアとザルドがエレボスの勧誘に対しベルを危険にさらせないとして別れ、ゼウスと3人で暮らした時にヘラが来襲しゼウスをタコ殴りにしている姿を見て一言……

『ベルの教育には最悪の環境だな……』

これを機にベルの願いだった英雄になりたいという思いに少し戸惑いを見せるも承諾し、まずは旅をしながら鍛えることにする。

その過程で古代ベルカ時代の遺物である『英雄凶鑑』<sup>アルゴブック</sup>をベルが読んで取り込んでしまう事態に見舞われ結果として『英雄凶鑑』<sup>アルゴブック</sup>を突け狙う連中に追われるはめに

ウミナリでの『ジュエルシード事件』では資金稼ぎのため当時ウミナリにあった翠屋のアルバイトシエフとして仕事しながらベルとナノハのサポートをしながら事件を解決へと導く。

メイルストラではアフロディーテに気に入られたベルを取り戻すべくホストに扮してアフロディーテの店に潜入するなど多岐に渡り活躍。

オラリオに着いてベルがヘステリアの眷属になった時、借金持ちの彼女に不安を感じつつも借金返済のため飲食店で働く。

その間にも『エレボス事件』や『闇の書事件』の解決にも尽力し知らず知らずのうちにレベルも7にまで上がっていたためオツタルに目を付けられ決闘をする等いい意味

でも悪い意味でもオラリオ中に名前が知られる。

ジャガーノート事件ではベルを昏睡状態にした原因を作った闇派閥イヴイルスの残党をファミリア総出で殲滅させる。

ベルが眠っていた4年間団長代理としてヘステイアファミリアをけん引。

ヘステイアについて

原作より早く下界に降りてくる。

降りてきた当初は原作通りヘファイストスのところで世話になりぐうたらしてた上に店の武器を壊してしまいヘファイストスの怒りを買って追い出され廃教会でほぼホームレス生活を送ることに。

ベルとエミヤが廃教会を見に来てヘステイアに遭遇し彼女の境遇に自業自得と思うエミヤとは別にベルが共感して眷属になると言ってくれたことに歓喜しそのままベルを初の眷属にする。

その結果ベルの保護者だったエミヤと師匠のユキチ、同行者のトリコとコマツも加わる。

その後エミヤとコマツの尽力もあつてベルが眷属になって2年で借金を返済し終える。

原作同様ベルを溺愛しベルが昏睡状態になった時にはエミヤ達の闇派イヴイルス閥殲滅計画には一抹の不安を覚えるも反対はしていない。

度々団員たちの突飛な行動に対し現実逃避する傾向がある。

## ステータス情報（ベル・クラネル）

ベル・クラネル

肩書：ヘステイアファミリア団長

二つ名：英雄アルゴブツク鑑

年齢：14歳

ステータス←

Lv. 4

力：S

耐久：S

器用：SS

敏捷：SSS

魔力：SS

《発展アビリティ》

幸運：F

瞬神：D

・瞬神

戦闘時における敏捷性ステータスの上昇及び敏捷性ステータスの経験値に+補正

《魔法》

【オープン・ザ・アルゴリズム  
英雄凶鑑顕現】

・物質具現魔法

・英雄凶鑑を召喚する

・詠唱式：顕現せよ英雄凶鑑  
アルゴブツク

【サタナス・ヴェーリオン】

・超短文詠唱音撃魔法

・音を放つ魔法

・詠唱式：福音  
ゴスベル

【聖火神雷】  
ウエスタ：ケラウノス

・段階詠唱式攻撃魔法

・聖なる火を纏いし神の雷を放つ攻撃魔法。

・無詠唱（火雷）：雷を閉じ込めた炎の球を放つ。  
ファイアホルト

・第一詠唱（英雄聖火）：聖なる火よ、我が敵を焼き尽くせ  
アルゴウエスタ

・第二詠唱（憤怒）：天光満つる処に我は在り 黄泉の門開く処に汝在り 出でよ  
インディグネーション

神の雷

・第三詠唱 (神之怒<sup>メキト</sup>): 天光満ち聖火宿りし神の雷よ 幾多数千の怨敵に裁きを与えよ  
その手に火を灯し その雷に触れ 我が敵よ 神の怒りに焼かれろ

《スキル》

【英雄一途<sup>アルゴフレゼ</sup>】

- ・早熟する
- ・英雄に憧れ、英雄を目指す意志が続く限り効果継続
- ・目指す英雄の尺度によって効果向上

【英雄集結<sup>アルゴチエーン</sup>】

- ・英雄を呼び寄せる



- ・英雄たる資格を持ちし者を引き寄せる
- ・その英雄たちの数が多ければ多いほどステータス＋補正

【英雄図鑑】  
アルゴブック

- ・古の英雄たちの力を宿す本を顕現する
- ・出会った英雄たちの記憶から古の英雄をページに加えることができる
- ・本を開き、開いたページの英雄の力を発現することができる
- ・ページ数が大きいほどより強大な英雄の力が発現する。

英雄図鑑について  
アルゴブック

古今東西及びあらゆる次元においてその時に存在した英雄・好漢等世界にその名を刻んだ者たちの記憶を収集・保存し持ち主にその力を与える魔導書型ログストア。

その魔導書の持ち主は正しさ、やさしさ、そして心の強さを備えた者でなければならぬ。

古代ベルカの時代よりも前に存在しその特性を元に夜天の書が生まれたとされている全ての魔導書の原典。

ある時ベルの手に渡りそのままベルを主と認めたと同時にベルの中に入り込みその後冒険者になったことで顕現する能力を得る。

ベルの中に入ってからにはベルの魔法として扱われるようになる。

《英雄<sup>アルゴブツク</sup>図鑑に記載されてる英雄一覧》

※ ( ) 内はそのキャラの原作

1 ページ：リンク (ゼルダの伝説)

2 ページ：草薙京 (キングオブファイターズシリーズ)

3 ページ：両義式 (空の境界)

4 ページ：アーク・エダ・リコルヌ (アークザラッド)

10 ページ：空条承太郎 (ジョジョの奇妙な冒険)

22 ページ：キラ・ヤマト (機動戦士ガンダムSEED)

32 ページ：二狼 (トリコ)

50 ページ：東方不敗 (機動武闘伝Gガンダム)

100ページ：アルファイア（ダンまち）

101ページ：ザルド（ダンまち）

## ベルの装備

### 《武器》

ドラゴニックブレード

### 【龍刃六爪劍】

- ・ベルが冒険者になってから使用している六本のロングナイフ
- ・太古の時代より存在する全ての魔劍の原初とされる靈刀。
- ・四刀二対の兄弟劍、二刀一対の姉妹劍のセット。
- 氷竜：一振りで周りを凍てつかせる冷気を発する。
- 炎竜：一振りで周りを燃やし尽くす炎を発する。
- 風龍：一振りで周囲を巻き込む竜巻を起こす。
- 雷龍：一振りで周囲を轟かさる雷を起こす。
- 光竜：一振りで一瞬で周りを照らす光を発する。
- 闇竜：一振りであらゆるものを飲み込む闇を発する。

シンメトリカルドッキング

・合奏 双竜：四刀二対の兄弟剣、二刀一対の姉妹剣それぞれ二本のロングナイフを合体させた剣。組み合わせは5通り。

超竜：氷竜と炎竜の組み合わせ。一振りであらゆる攻撃を異空間に逃がす超振動波を放つ。

撃龍：風龍と雷龍の組み合わせ。一振りですべてのエネルギーを放つ。

幻竜：氷竜と雷龍の組み合わせ。持つだけで幻を生み出す。

強龍：風龍と炎竜の組み合わせ。他の合奏 双竜に比べ重く一撃の威力が高い。

天竜：光竜と闇竜の組み合わせ。ダイクマター 亜空間物質を生み出し光の乱反射による超爆発スーパーノヴァを引き起こす。

## 《防具》

ピヨン吉・アルティメット  
【兎 鎧・極】

・ヴェルフ・クロツゾ作

・下級冒険者向けの装備だが改修に改修を重ね上級冒険者が着てもおかしくないレベルの防御力と軽量化が施されている。

・胸当て・小手・脛当てに希少金属“アダマンタイト”が使われている。

# 英雄復活

## 第1話

### ギルド会館

会館に一組のパーティーが現れる。

「さあベルくんの復帰後初ダンジョンなの。」

「でもまだ無理できないから5階層までですからね。」

「ベル、体の調子はどう？」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう皆。」

するとギルドの受付嬢の一人がパーティーに寄ってくる。

「おはようございますナノハさん、ツナ君、マシユさん、それと……………ベル君!？」

「お久しぶりですエイナさん。」

ベルがエイナに挨拶する。

「ベル君なの。本当に……………目覚めてくれて本当に良かった!」

エイナがいきなりベルに抱きつく。

「あつあのエイナさん、ちよつと落ち着きましようか？」

「あつあ、ごめんなさい。」

ツナの一言で落ち着きを取り戻したエイナ。

「オツホン！改めてベル君、帰って来てくれてありがとう。」

「いえ。僕の方こそ心配かけてすみませんでした。」

「ところで話は変わるけど……ベル君達はこれからダンジョンに？」

「ベルさんのリハビリも兼ねて3層〜5層付近をと考えてます。」

エイナの質問に答えるマッシュ。

「まあ4人で潜るんだし問題ないとは思いますが……ベル君は大丈夫？」

「僕は大丈夫です。それに冒険者に復帰するからにはやはりダンジョンを体感しておかないといけませんし」

「ベルにはできるだけ負担を掛けないようにするので大丈夫ですよ。」

「そうなの。ベル君一人にさせることは絶対ないの。」

ベルの肩に手を置き笑顔で答えるツナと両手の握り拳にグッと力を入れるように答えるナノハ。

「分かりました。でも無茶はしないで下さいね。」

「「はい！」「」」

そうしてエイナは4人から離れて仕事に戻ろうとする。するとエイナがふと思い出

したように

「そう言えば君たちのファミリアの新人の4人とミアハ様の所のセララちゃんが今朝一緒にパーティー組んでダンジョンに行ったわよ。」

「……………新人って？」

「あーそうかベルさんは知らなかったですね。ウチのファミリアに去年入った新人たちです。」

「たしか『腹黒メガネ』<sup>ブラックメガネ</sup>さんが推薦して入れた子たちで年齢もベルと同じくらいだったはず……………」

「去年の冒険者になったばかりの人達のためにミアハの所のマリエルさんが企画したオラリオの外のキャンプでミアハ様の所のセララちゃんとパーティー組んでビッグボアを仕留めたの。」

「アストレア、ガネーシャ、ロキ、ミアハとタケミカツチ、私達ヘスティアファミリアから引率者を出して良い成果が出たから今年もやろうかってギルドから打診されていますね。」

「あーチーム『リトルドッグス』か……………あの子たち、そのチーム名で呼ばれるのが嫌だからダンジョンで力付けてチーム名を改名するって息巻いてたの。」

「そう言えば俺達も最初は小動物<sup>リトルアニマルズ</sup>の集いつてチーム名を付けられそうになりましたよ

ね。」

「命名したのが『浮雲』アラウデイさんだから私たち文句言えなかつたんですよ……あの人、あの意味暴君ですから……」(ハ、ハ) ハア……

「「そうですね……(なの……)」「(ハ、ハ) ハア……

何かを思い出したのかため息を吐きどつと疲れたような表情をする4人。

「でもエミヤ先輩が妥協案を出してくれたお陰であのチーム名になったんだよね。」

「エミヤ副長様々なの。」

「「それな!」」

そんなこんなで4人はエイナと別れてバベルに向かう。

3時間前、ダンジョン18階層にて

キャンプの荷物をまとめてるハステイアファミリアの面々をよそに団長代行のエミヤは客人の相手をしていた。

「要件とは何だフィン。」



その客人はオラリオで最強の一角に数えられるロキファミアの団長フィン・ディナムだ。

「僕たちも今日ダンジョン遠征から帰るんだが一緒に同行したいと思ってね。」

「……………で、本音は？」

「次の遠征を計画していてその遠征メンバーに君たちのファミアからも人員を借りれないかと思ってね。」

「ふむ……………」

エミヤは考えるそぶりを見せてすぐに

「悪いが断る。」

「……………まだあの一件を怒ってるのかい？」

「当たり前だ。ベル自身はあの件は水に流したが私はいまだに許せん。何より我が主たるベルを侮辱したあの門番たちを未だに採用している時点で私の怒りは収まっていない。」

「それについてはこつちの方で処罰したんだけどね。」

「それでもだ。それにお前たちにはベルを誘拐した前科があるからな。」

「あれはアイズの独断だよ。彼女も反省したからね。」

「あとお前の所の主神が『夜天』<sup>ナハトヴァール</sup>にちよつかいかけたおかげでアイツが拒否反応を起こ

すからな。」

「それについては弁明の仕様がな。でもそれを言うなら君の所の『冥王』だって似たような事してるじゃないか。」

「アイツの思考はある意味あのクソ爺に似てるからな。まあクソ爺に比べたら可愛いもんだがな。」

そう言つてエミヤがポッドに淹れた紅茶をカップに入れてフィンに出す。

「ありがとう。……………相変わらず君の入れる紅茶は美味しいね。」

「おだてても私の考えは変わらんぞ。」

「バレてたか。」

ヘステイアファミリア本拠地<sup>ホム</sup>『聖火の竈』

主神であるヘステイアはソワソワした様子で辺りを行ったり来たりしていた。

「ベル君は大丈夫だろうか……………ツナ君やマシユ君、なのは君がいるから大丈夫だろうけど……………あーそれでも心配だ！」

「少し落ち着きましようかニヤ、ヘステイア様。」

「そうは言うけどにやん太君、ベル君は此間目覚めたばかりだよ。心配じゃないか!」

「だとしても主神である貴方がそうジタバタしてもどうしようもないですニヤ。」

「そうだけど………」(ーωー;) ウーン

紅茶を受け取り飲むヘステイア。茶菓子のマフィンを用意しながらにやん太が喋る。

「それに、念のためアカツキさんに陰から尾行してもらおうよう頼んだではありませんか

ニヤ?」

「……………」

「信じて待つのも主神としての大事な仕事ですニヤ。」

「……………そうだね。信じて待つよ。ボクは神だからね。」

「それでこそ我がファミリアの主神。それと今晚の夕食はハンバーグとポタージュを用

意してますので」

そう言つてキッチンに下がっていくにやん太。

「……………ベル君のスキルつて本当に変わつてるよ。でもエミヤ君やにやん太君を始めオ  
ラリオでも最高峰の料理人が4人も揃つてるし何よりウチの眷属になつた子供たちは  
皆英雄の器を持つ子だし何より戦力的にはフレイヤやロキを上回りゼウスやヘラの  
ファミリアの全盛期に匹敵するほどの戦力だしね。」

そんな独り言をつぶやきながらヘステイアは紅茶を飲む。

### ダンジョン第5階層

ダンジョンの上層でも比較的レベル1の冒険者でもパーティーを組んで安全に探索できる階層である5階層で5人の冒険者パーティーが逃げていた。

……………何にかと言うと……………

ブモオオオオ!

中層である11〜16階層付近を縄張りとするミノタウロスにだ。

「逃げ皆!」

「何でここにミノタウロスが!?!」

「ここは第5階層だろ!?!」

「何で中層のモンスターが上層に!?!」

「とりあえず逃げましょう!」

この5人、装備はギルドの支給品で能力的にもミノタウロスから一生懸命逃げている

ことからレベル1の冒険者たちである。

「トウヤ、その先行き止まり!」

「マジか!?!」

「どうしよう!?!」

「こうなったら応戦するしかない!」

「でも相手はミノタウロスですよ!今の私達じゃ勝てません!」

「それでもやるしかない!ミノリ、指示を頼む!」

「分かった!」

5人はミノタウロスと戦う決意を固める。

ミノタウルスが臨戦態勢をとる。

「五十鈴は私と一緒にトウヤに支援魔法。セララさんとルンデルハウスさんは後方で詠唱を始めてください。トウヤはできるだけ引き付けて。でも近づきすぎたらダメ。」

「二三了解!」

今新人冒険者チームが冒険に挑もうとしている。

同時刻 ダンジョン第5階層の別の場所

「何でここにミノタウロスをが？」

「さあ……でも被害が出る前に倒さないと……」

「そうなの！」

「皆、行くよ！」

ベル達もミノタウロスと遭遇していた。

ブモオオオオオ！

ミノタウロスが突進してくるが

ガキイイイイン！

「皆さん、守りは任せてください！」

マシュが盾でミノタウロスの突進を防ぐ。

「行くよツナ！僕は右から」

「俺は左から行くよ！」

ベルが二本の短剣を構えてミノタウロスの右側から、ツナは額に炎をともしながら両手のグローブから出した炎を推進力にしてミノタウロスの左側に回り込む。

「はあああああ！」

ベルが短剣でミノタウロスの腕を切り裂き

「死ぬ気で殴る！」

ツナがミノタウロスの顔面を殴り倒す。

ミノタウロスが二人の攻撃を受けて後ずさる。

そうして距離を取り突撃態勢をとる。

「来るよ。ナノハ、準備は？」

「大丈夫なの！」

「タイミングは俺が測る。」

そして……………

ブモオオオオ!

一気に盾を構えるマシユに向かって突進するミノタウロス。

「今だ！」

「マシユ！」

「ナノハさん、お願いします！」

「行くよ！全力全壊！」

『Divine Buster.』

そうやってマシユがサイドステップでミノタウロスの直線上から外れると

「ディバインバスタアアアアー!」

先端が三角形の槍のような杖から放たれた矢のような光がミノタウロスを貫いた。  
ガアアアアアア!

胴体に大きな風穴を開けミノタウロスは断末魔の叫びを挙げながら灰になっていく。

「よし!」

「やったの!」

「皆さんお疲れ様です。」

「ふう。」

ベルがその場で座り込む。

「ベルさん大丈夫ですか?」

「うん大丈夫。ありがとうマシユさん。」

「でも何でミノタウロスが5階層にいたんだらう?」

「確かに気になるの。」

するとその場に小柄な女性がシュツと現れた。

「あれ?アカツキさん?」

「何でここに?」

「主神殿とにゃん太殿から陰ながらサポートするよう頼まれた。」



「そうだったんですか？」

「うむ。それでミノタウロスが5階層に現れた件だが、どうやら11階層でロキファミアリアが遠征帰りにミノタウロスの群れに遭遇し蹴散らしたはいいが何匹か上層に逃げたそうだ。」

「そうなんだ………だとしたら残りのミノタウロスは？」

「まずい！まだミノタウロスがいるなら被害者が出る！急いで探そう！」

「二手に分かれて探そう。」

「「了解（心得た）！」」

果たして………

## 第2話

### ダンジョン5階層

ヘステイアファミリアの新人冒険者チーム『リトルドッグス小さなワンコ』はレベル1にとつては絶望的なモンスターであるミノタウルスと対峙していた。

「くっそーコイツ硬てえー!」

「トウヤ離れて! ルデイさん!」

「任された! 喰らえ!」ライトニング『雷撃』

ミノタウルスからトウヤが離れたタイミングで放たれたルンデルハウスの魔法はミノタウルスに命中したが胸板に小さな焦げ跡を付けただけでミノタウルスはピンピンしていた。

「全然効いてない!?!」

「大丈夫。いつも通り相手が攻めあぐねている状況を作り出せばまだ勝機があります。もう一度仕掛けましょう。」

「「了解!」」

5人はもう一度ミノタウロスに攻撃を仕掛ける。

そんな5人の様子を眺めるように見ている二つの影……

「あのガキども、頑張つてんなww」

「……………」

一人はロキファミアリア最速の男ベート・ローガ、もう一人は『劍姫』ことアイズ・ヴァレンシユタインだった。

二人が何故ここにいるのかというと……………

15分前 ダンジョン12階層付近

ロキファミアリアは遠征を終え帰還することになりその帰路の途中で……………

「お前、どうやったら俺の作ったアイテムが壊れんだよクソ狼！」

「うるせいぞ銀髪爆弾魔！ だったるもつといいアイテム作りやがれ！」

ベートとゴブニョファミアリアから助っ人として参加した『嵐の爆弾』ハリケーンボムことG・ゴクデ

ラがとあることで喧嘩を始めてた。

「……………たく。あいつらときたら……………」（ハ、ハ）ハア…

「ははは………」

「(ハ、ハ) ハア…飽きんのあ奴らは………」

ロキファミリア団長にして『勇者』の二つ名を持つ小人フィン・デイナムも『九魔姫』の二つ名を持つエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴも『重傑』の二つ名で知られるドワーフのガレス・ランドロツクも呆れていた。

「あの二人を見てると『轟音の死神』を思い出すよ。たしかあまりに喧嘩っ早い上にフレイヤの魅了すら効かないしさらに問題を起こす上にあのオツタルと互角だから対処しきれないって事で今バベルの特別階の独房にいるんでしたっけ？」

「そうじゃよ。あやつとまともに張り合える人材は主とオツタルを除けばヘスティアファミリアの十二天将をはじめとする高レベル組とガネーシャファミリアの『美しい髪の貴公子』とアストレアファミリアの主力4人に『雷光』ぐらいじゃろう。正直わしは相手にしたくないがな。」

ガレスと話しているのはロキファミリアに所属する冒険者の中でフィン達三幹部と並ぶレベル6で『歩く毒精製工場』の二つ名を持つ実力者ココである。

「あーあ、ベートとゴクつちの奴また喧嘩してるよ。」

「まったく！あのクソ狼にクソ爆弾魔！団長に迷惑かけやがって………」

アマゾネスの双子の姉妹ティオネとティオナが二人の喧嘩を見てそれぞれ違う反応

をする。

そんなこんなで喧嘩が長引きそうになると

「二人とも………極限に止めんか！」ゴチン！

「イテツ！」

二人に拳骨が落とされた。

落したのはロキファミリアの訓練教官も務めるレベル5『晴天の拳』の二つ名を持つリヨウヘイ・S・ナツクルだった。

「何しやがる!？」（#。D。D。）

「てめえ芝生！」（#。D。D。）

「お前らがくだらん事で喧嘩するからだろうが！団体行動するなら喧嘩するな！」

「……………」

真つ当な正論に文句も言えず黙る二人。

「あははは、まあまあいいじゃないですか先輩。ゴクデラもベートもそれだけ仲がいいってことでww」

「仲良くねえよ！」

三人の口論の中に入って来たのはデメテルファミリアからゴクデラと同じく助っ人として遠征に参加した『時雨の剣』レイゾンソードの二つ名を持つ九代目山本時雨蒼燕だ。

ちなみにゴクデラ、リヨウヘイ、山本の三人は同郷だという。

「あの三人のおかげで遠征は途中までスムーズなだけだね……………」

「ゴクデラの作った魔道具を使ってアイズが無茶したり、魔道具をベートが雑に扱ってゴクデラが切れたり、その二人をいさめようとリヨウヘイの拳が飛んで周りにも被害が出たり、剣術の腕が一流の山本にアイズやティオナが挑んだりして結果的に断念せざるを得なかったんじやよな……………」

フィンとガレスが遠征の間メンバーがやらかした事を思い出したため息をつく。

「そう言えばフィン、18階層で遠征中だったヘステイアファミリアの元へ行った際、次の遠征の協力を取り付けられたか？」

「残念ながら断られたよ。これがベルならあつさり了承してくれるけど今はエミヤが团长代行をしているから簡単にはいかないね。あそこは戦力もそうだが指揮系統も

『鎮魂の魔王』と『腹黒メガネ』のオラリオ二大軍師が統率して穴がないからね。」

「ルル・B・ランペルージとシロエか……………あの二人がいるだけでもヘステイアファミリ

アの影響力は高いからな。大胆不敵に味方を手足のように動かす『鎮魂の魔王』と味方の能力を全て把握した上で状況に応じた臨機応変な対応力で戦略を組み立てる『腹黒メガネ』、どっちか一人でもウチにいてくれれば遠征も楽なんだがな。」

「でもそれ以上にあそこには実力者が揃ってる。『夜天』アインス・リインフォーースと

『冥王』<sup>ブルートウ</sup> ハヤテ・ヤガミ率いるチーム夜天や『断罪の用心棒』<sup>ギルティランクス</sup> ユーリ・ローウエルらチーム明星、『美食の鬼』<sup>グルメオーガ</sup> トリコと『灼熱の調理師』<sup>バーナーシェフ</sup> スタージユンのコンビ、そして何より4年前オラリオを席卷した史上最高のチーム……」

「あいつらか。あの頃はまだ若くレベルも最高が4だったが今じゃ一人除いて全員がレベル5になったからな。」

「それもあの事件がなければ今頃は全員レベル6まで言ってたんじゃないかと言われるぐらいだったからな。」

「たしかに。トリコの話聞いてなかったら信じなかったけどあの5人にはそう思えるだけの強い電磁波を感じたよ。」

フィンとリヴェリア、ガレス、ココがヘステイアファミリアについて話していると

「!?何か来る?!」

「どうしたココ?」

ココが何かを感じると洞窟の奥からミノタウロスの群れが現れた。

「ここにきてミノタウロスの群れか。」

「思い出話にふけてる場合じゃないな。」

「全員! 戦闘態勢!」

フィンの掛け声に遠征メンバー全員が反応する。

そして現在 ダンジョン5階層

チーム『小さなワンコ』がミノタウロス相手に善戦していた頃、別の場所では

「デivainバスター!」

ナノハの魔法弾がミノタウロスを貫きミノタウロスは灰になる。

「ふー。あと残りは一匹ね。」

「流石『白い砲撃手』だな。それと『大空を駆る獅子』も相変わらずの実力だな。」

「ありがとうございます。でもアカツキさんも相変わらずのスピードですね。『影 遁』」

の實力は今も健在ですね。」

「お世辞はいい。それよりも团长殿とマシユ殿の援護に向かおう。」

「了解。」

そう言つて3人が歩き出そうとした時、ダンジョンの奥から光の速さで3人に近づく

者が現れた。

「あれ? ナノハさんにツナ君にアカツキさん? 何でここに?」



「アツシ（君）（殿）!?!」

現れたのは白髪にちよこんと虎の耳が見えるベルやツナより少し背が高い青少年だった。

「アツシ殿は遠征メンバーに加わってたのではないのか?」

「エミヤさんが遠征を切り上げて地上に帰還することを決めたからその報告に僕が選ばれたんです。」

「シグナスさんは?」

「ヨサノ先生の判断でエミヤさん達と一緒に帰還するそうです。」

「分かったよ。」

「それでみんなは何でここに?」

「実は……………」

ツナがアツシに説明する。

「なるほど……………それよりベル君の方は大丈夫なの? 目覚めていきなりダンジョンって……………」

「マシユちゃんがついてるから大丈夫なの。」

「そうか……………」

「それじゃ俺達もベルやマシユと合流しよう。」

そう言つて4人はベル達の元へと向かう。

同時刻 ダンジョン5階層

チーム『小さなワンコ』<sup>リトルドッグス</sup>はミノタウロスの驚異的な耐久力とパワーに押されながらも必死で踏ん張っていた。

「おおおおりやあああああ！」

「トウヤ、もう少し踏ん張つて！五十鈴さん、ルデイさんに付与を！」

「了解！」

「『意思を持つ火の塊よ！かの敵を殲滅するまで燃え続けよ！』」

ルンデルハウスが強力な魔法の詠唱を始めようとしていたが

「があああああ！」

「トウヤ！」

前線にいるトウヤがミノタウロスの斧で弾き飛ばされる。

幸い刀で防いだお陰で致命傷にはならなかった。

「大変です！ミノタウロスがこっちに向かってます！」

「セララさん、できる限り魔法でミノタウロスの進行を抑えてください！私も協力します！」

「はい！」

ミノタウロスの進路をセララの自然攻撃魔法とミノリの付与魔法でふさごうとするがミノタウロスは止まらない。

『放て！溶岩弾！オーブ・オブ・ラーヴァ』

ルンデルハウス最大の一撃が放たれた。

直撃を喰らい火に包まれるミノタウロス……………だが

ブウモオオオオオオオオオ！

少し焼き焦げた痕が見られるがミノタウロスが雄叫びで火をかき消した。

「そんな……………僕の一撃が……………ウウ体が……………」

「ルデイ!?!」

「まずい！ルデイさんが精神枯渇マインドダウンになってます！」

さらにミノタウロスが倒れるルンデルハウスを五十鈴の目の前まで迫る。

「ルデイさん！五十鈴！逃げて！」

ミノリが叫ぶもミノタウロスの斧が二人に向かって振り下ろされようとしていた。

「っ!？」

もはやこれまでかと覚悟を決めたかのように目を閉じる二人。

………ところが斧が振り下ろされる気配がない。

恐る恐る目を開けると………

「!？」

「!?!」(;。∩)

白い髪に赤い目の自分たちと同じくらい………少し年上の少年がミノタウロスの斧を双剣で受け止めていた。

ダンジョン10階層

10階層を進んで地上に戻ろうとしている一団がいた。

「エミヤの旦那、強行スケジュールで帰還するとは聞いてたけど………わずか15分で上層まで登るなんて少しハードじゃね？」

「すまないがユーリ、アイツが、ベルが目を覚ましたと聞いて私自身再会した時の第一声を早く聞きたくて興奮が収まらないんだ。」

「旦那がそれでいいなら俺は文句言わねえがな……それにしてもアンタと云い主神様といりりりの嬢ちゃんをはじめとする女性陣といいベルに対して過保護すぎないか？」

先頭を行く二人の男。

一人は黒いシャツに赤いコートを羽織り銀髪に色黒の肌、その佇まいは歴戦の強者を感ぜさせるオーラを放つのはヘステイアファミリア団長代行にして『無限の剣製』の二つ名を持つレベル8の狙撃手<sup>スナイパー</sup>エミヤ。

もう一人は肩に細身の刀を担ぎ長い黒髪にきりつとした表情を見せながらどこか飄々とした雰囲気醸し出す彼は『断罪の用心棒』<sup>ギルティランズ</sup>の二つ名を持つレベル6の強襲者<sup>レイダー</sup>でファミリア内で9人（正確には8人と一匹）体制のチーム『凛々の明星』<sup>ブレイブエスベリア</sup>の実質リーダーを務めるユーリ・ローウエル。

オラリオでも屈指の斥候役でもある二人の実力者が談話しながらもダンジョンを進み遠征メンバーを先導している。

その後ろを進むのは22名の冒険者たち……

「エミヤさん、ベル君が目覚ました事聞いて内心喜んでますよね。」

「まあヘステイアファミリア創設からヘステイアとベルとエミヤが頑張って大手の一角

にまで上り詰めたからな。」

「だよね♪僕もヘステイアファミアのアイドルとしてうれしいよ。」

白いローブを羽織り杖を持ちながら歩くメガネが特徴的な地味な男性、『腹黒メガネ』の異名をとるレベル6の付与魔術師で5人組のチーム『記録の地平線』のリーダーシロエ。

大盾を背中に背負い全身鎧に身を包む気さくな感じの青年、『要塞盾』の二つ名で知られるレベル6の守護騎士でチーム『記録の地平線』の盾役を務めるナオツグ

およそ冒険者とは思えないファンシーな衣装に身を包みまるでアイドルっぽい姿の少女（実は男）、『銀河系美少女』という周りからすればイタイ二つ名を持つレベル5の施療神官でチーム『記録の地平線』のムードメーカーであるテトラ。

「でもまあ、ダンジョンで手に入れた希少食材を使ってベルの快気祝いできるんだし帰還は有りじゃねえか。」

「まあ僕としてはダンジョンにいるより本拠地で調理したりオラリオの外で食材探しの方が楽しいですから……帰還はありがたいですね。」

「俺としてはもう少しダンジョンで探索したかったがな。」

ナオツグよりも背が高く筋骨隆々な体格と青い髪に頬に刻まれた3本傷がトレードマークの大男、『美食の鬼』の異名で知られるレベル7の武闘家のトリコ。

他の男性メンバーに比べると小柄で動きやすい服装に軽い軽装備と小さなリュックを背負った男性、『救世料理人』の二つ名を持つレベル3の補助職兼料理人のコマツ。

トリコより少し背が高く長い髪に頬に火傷の痕がある大男、『灼熱の調理師』の異名を持つレベル7の魔法剣士のスタージユン。

「がははは！小僧、今日の料理は期待してるぞ！」

「俺もだぜ！帰ったら酒盛りだ！」

「あなた方は酒と食事しか興味がないのですか？ベル団長の快気祝いがメインですからね。」

「そうだぞ！我が子ウサギが目を覚ましたのだ！世が直々に愛でてやろうではないか！」

毛皮のマントに朱色の鎧を着ながら豪快な気性を感じさせるトリコやスタージユンと並ぶ大男、『征服王』の異名を持つレベル8の戦車のイスカンダル。

赤い長槍を持ち全身青いタイトのような服に身を包んだ男、『心臓破りの槍』の二つ名を持つレベル6の槍兵のクー・フリーン。

修道士のような服装の上に鎧を着こんだ馬蹄のような髪飾りに金髪が映えるの女性、『城塞の如き聖女』の異名を持つレベル6の聖騎士のジャンヌ・ダルク。

赤い豪華な舞台衣装のようなドレスみたいな服に傲慢な態度が目立つ女性、

『赤き薔薇の麗人』の二つ名で知られるレベル7の剣士のネロ・グラウデイウス。

「本来なら私が斥候役を務めるのだが……」

「別に気にする必要はない。エミヤ副長が自ら斥候を買って出たのだ。問題はないだろう。」

「ルルの言う通りだ。あの男の能力はこのダンジョンに最も適しているからな。」

「ふあああああ。」

ポニーテールに凛々しい表情が目立つ女性騎士、『烈火の将』の二つ名を持つレベル6の剣士で7人組チーム『夜天』のサブリーダーを務めるシグナム。

眉目秀麗な顔立ちに左目を眼帯で覆いながらまるで王のような威厳を感じさせる青年、『鎮魂の魔王』の異名をとるレベル5の召喚士でヘステリアファミリアの参謀でもあるルル・B・ランペルジ。

翡翠色の長い髪に金色の瞳を持つ少女、『鎮魂の魔女』の二つ名を持つレベル4の法術士のC・C。

欠伸をしながら手に持つ手錠を指でクルクル回す少年、『浮雲』の異名をとるレベル7の強襲者のキョウヤ・N・雲雀。

「今度の遠征でいい材料が手に入ったよ。これで新しい魔道具ができるね。」

「お前はもう少し自重しろ。ただでさえ変なモノ作って迷惑かけてるからな。」



「あとお風呂にも入ってください。遠征中とはいえ何日入ってないんですか？」

長杖を持ちまるで羽のような耳を持つ猫人族の女性、『砲撃の狂科学者』の異名をとるレベル4の魔道具製作者兼法術士で3人組チーム『バナナ同盟』の命名者であるパスカル。

ブーメランのような剣を担ぎ金髪に無精髭の傭兵風な男性、『背中マンオペザバックで語る男』の二つ名を持つレベル6の強襲者レイダーのチーム『バナナ同盟』最年長のマリク・シザース。

メガネをかけたどこかの軍人を思い起こさせる服装の青少年、『生真面目シリウスメガネ』の異名をとるレベル4の軽装騎士ソシアルナイトでチーム『バナナ同盟』のリーダーであるヒューバート・オズウエル。

「いや〜副長も若いね。おっさん、尊敬しちゃうね。」

「あの合理主義のエミヤも所詮は人の子ってことね。」

どこか胡散臭い雰囲気醸し出す年長者っぽい男性、『神出鬼没トリックスター』の二つ名を持つレベル5の強襲者レイダーでチーム『凛々ブレイブエスperiaの明星』最年長のレイブン。

所々色気を感じさせる服装にミステリアスな雰囲気ブルーヴァアルキュリアの女性、『蒼月の戦乙女』の異名をとるレベル6の槍兵ランサーでチーム『凛々ブレイブエスperiaの明星』のメンバーであるジユデイス。

「……………副長も嬉しそう。」

「だよ。エミヤのあんなうれしそう表情を見るのは4年ぶりだね。」

「妾あたしとしてはどうやって目覚めたか気になるね。」

後方を歩く眼帯を掛けた少女、『藍色の霧』の異名をとるレベル4の幻術士イリュージョニストのクローム・D・ナギ。

首と腕に包帯を巻きどこか達観して周りを見ている雰囲気を出している狼人族の青年、『人間失格者』の二つ名を持つレベル7の暗殺者アサシンのオサム・D。

大きなカバンを持ちながら歩くエルフの女性、『死を呼ぶ女医』の異名をとるレベル4の森呪遣い兼医師のアキ・ヨサノ。

それと先行して地上へと向かっていた猫人族の少年、『月下獣』の異名をとるレベル5の武闘家モンクのアツシ・ナカジマ。

彼等は今回の遠征メンバーで他にも遠征中の途中経過を伝えるため数日前に地上に戻っていたシグナムを除いたチーム『夜天』のメンバー6名と地上に残ったチーム『凛々の明星』の残りメンバー5名と1匹にチーム『記録の地平線』のメンバー2名とチーム『小さなワンコ』の4名、そしてナノハ、ツナ、マシユ、そしてレベル1の補助職サポーターのリリルカ・アーデと主神ヘスティアの護衛役の4名とベルの治療を担当する医師が1名、そして……

地上<sup>アルゴブツク</sup>とある酒場で

『英雄凶鑑』と呼ばれる団長がいて、彼が加わるだけでヘステイアファミリアはオラリ才最強の称号を手にしてるんだ。」

「「「へえー。」「」」」

酒場の飲んだくれたちに饒舌に語る詩人みたいな男性。

「何話してるんですかジヨニー？」

「おーアスファイ、今オラリオにやって来た行商の方々にこの町の英雄譚を聞かせてたのや。」

男の前に現れた女性、ヘルメスファミリア団長アスファイ・アル・アンドロメダが質問しそれを同じくヘルメスファミリア所属の『青い稲妻』<sup>ブルーサンダー</sup>ことジヨニー・シデンが答える。

「つたく、それよりヘルメス様から伝令でヘステイアファミリアに顔を出してほしいそうですよ。」

「何故俺？」

「貴方が向こうに行っても問題が起きないからですよ。『パイナップル頭』<sup>ヘッド</sup>は向こうの『浮雲』<sup>アラウディ</sup>と仲が悪いですし、『重力の支配者』<sup>グラビティイマスタ</sup>は『人間失格者』<sup>ノレヒューマン</sup>と口げんかになって仕事

にならないから。」

「なるほどね。……………それで俺に何をしてほしいんだい？」

「つい先ほど手に入れた情報ですが……………『英雄図鑑』が……………ベル・クラネルが目覚

ましたそうです。」

「!? 本当か？ だとしたら面白くなりそうだ。だとすればあの伝説のチーム……………」

『英雄の雛鳥』<sup>ヒロイックベイス</sup>が再びオラリオで見られるかもしれないな。」

今オラリオで何かが起ころうとしている。

## 第3話

旧ヘステイアファミリア本拠地跡地 翠屋オラリオ店

「今日もここは繁盛しているな。」

「いつも御鼻肩にさせていただいてありがとうございます。ございます福沢さん。」

「うむ。」

そう言つて紅茶を飲む着流しの人物。

「お？おーい福沢はんやないの？」

「ん？マリエール殿とヘンリエッタ殿か？」

その男性に近づく二人のエルフの女性。

「ご無沙汰しております。福沢さん。」

「これはご丁寧。」

「なあなあ、ウチらもご一緒してもええ？」

「構わない。」

男性の隣の席に座る二人。

「そう言えばこの間、やっとティアケンヒトファミリアからの借金を返済できたそうだ

な。」

「そうや。まあミアハはんのお人好しにも散々手を焼かされたけど何とか借金返せたわ。」

「その節はお世話になりました。貴方を始めヘステイアファミリアの皆さんには色々サポートしていただきありがとうございます。」

すると男が紅茶を飲み干して席を立つ。

「すまないモモコ殿、お勘定とあと彼女たちの分のお題も私持ちで頼む。」

「えーですの?」

「この間、神ミアハがウチのツナヨシに押し売り同然でポジションを無償で渡した分を払ったに過ぎん。遠慮なく受け取ってくれ。」

「そうですね。受け取りましょう。あとミアハ様には商売が何たるかをしっかりと教えなければ」(ΦωΦ) フッフフ…

「ヘンリエッタ……………怖いでアンタ……………」

そんな二人を尻目に男は店の外へ

「……………ベルの奴は上手くやってるかな……………」

この男性、名をユキチ・福沢、現在オラリオ最高レベル9の実力を持つ剣士にして現ヘステイアファミリア最強の男である。

## ダンジョン第5階層

ミノタウロスの斧を受け止める白髪の少年にただただ驚く『リトルドッグス小さなワンコ』の面々。

「君達、大丈夫?」

「……………えっええ大丈夫です……………」

その少年に声を掛けられ驚きつつもミノリが答える。

「よかった。じゃこのミノタウロス、さっさと片付けるね。『アルゴブック顕現せよ。英雄凶鑑』」

少年が呪文を唱えると少年とミノタウロスの間で光が放たれミノタウロスが弾き飛ばされる。

光が収まり出てきたのは一冊の本。

「今日は32ページで行こうか。」

『Page32 Nocking master ZIROU Actual』

本から放たれた言葉と共に本のページが開きそのページにはリーゼントの男の絵が描かれていた。

その絵に描かれた人物のマテリアル体が白髪の少年に憑依する。すると少年の髪型がリーゼントに変化する。

「劣化版『昇狼・ギネスパンチ』」

少年の放った拳から狼の形をした魔力弾がミノタウロスを噛み砕く。

一瞬にしてミノタウロスは灰になった。

『眠りにつけ。英雄凶鑑』

本が閉じて光りに変わり消えると少年の髪型が元に戻る。

「久々に英雄凶鑑使ったけど疲労感はそれほどないかも」

何かを確かめるように喋る少年。

その少年に近づく『小さなワンコ』の5人。

「あのく助けてくれてありがとうございます。ごさいます。」

「本当にありがとうございます。」

「白髪の兄ちゃんつええな。」

「僕からも礼を言う。お陰で助かった。」

「ルデイったら……」

5人がそれぞれ礼をいうと

「僕の方こそ勝手に出てきてごめんね。君達の獲物だったんだよね。あのミノタウロス



「？」

「でも全然歯が立ちませんでしたしあのままだったらトウヤが死んでいたかもしれない。なのであのタイミングで助けていただいたに本当に助かりました。」

「そう言う事なら」

そう言つて互いに礼を交わす少年とミノリ。

その時、

「ベルさ〜ん、ミノタウロスはどうなりましたか!？」

大盾をもった少女がやって来る。

「あれ? 何でダンジョンにいるのマシユ姉!？」

「マシユさんもダンジョンに潜ってたんですね。」

マシユに気づいた『小さなワンコ』<sup>リトルドッグス</sup>の面々。

「あれ? ミノリさん達もいたんですか?」

「マシユさん、今日は用事があるって言ってませんでした?」

「実は急遽パーティー組んでダンジョンに行こうって話になって、それにこちらの………ベルさんの復帰後初ダンジョンでしたので」

マシユの言葉に違和感を感じたミノリ。

「あの? 復帰ってどういう………」

「それは僕がつい四日前に目が覚めたんですよ。」

「「「「?!」」」」(。・。ω。)?

そう言つて少年||ベルが前に出る。

「まずは初めまして。僕はベル・クラネル、一応ヘステイアファミリアの団長をしています。」

「「「「……………えー?!」」」」(; 皿。)

アイズ side

あの小さな冒険者たちがミノタウロス相手に奮闘している。

本当は助けるべきなんだろうけど……………

「アイズ、ギリギリまで手を出すなよ。アイツらは今冒険してるんだ。何処まで行けるか見守ろうぜ。」

ベートさんが釘をさしてくる。

此間のミアハファミリアが企画した新人冒険者指導キャンプにウチのファミリアか

らリヴェリアやガレスと一緒に教官として参加（罰則こみ）した時に特に目を掛けていたらしいから何となく情が移ったのだろうか？

意外なベートさんの一面に驚きつつもあの少年たちの戦いを見る。

個人個人はやはりレベル1らしく私達に比べても弱いところはある。

けど連携した時の動きは間違いなくレベル1とは思えないほど洗練されている。

何せヘス<sup>む</sup>ティア<sup>じ</sup>ファミリア<sup>う</sup>にはチームで戦うノウハウが構築されていて遠征でも最高の成果を残している。

基本高レベル組と中堅レベルの差が分かれてるロキ<sup>私</sup>ファミリア<sup>達</sup>や個々の実力のみで派閥としての力を高めたフレイヤファミリアと違い遠征においては間違いなくヘスティアファミリアの方が大分先を行っている。

ファミリア内の団結力と個々の実力が同居しているヘスティアファミリアだけどそれも全て……………

「ほおう？アイツら中々頑張つてんじゃねえか。」

ベートさんが他人を……………特に自分よりレベルの低い冒険者を褒めることは滅多にしないのに彼らを褒めている。

リヴェリアからこっそり聞いた話によるとキャン<sup>ホワイトバスター</sup>初日に一組の新人パーティーをバカにしたのをヘスティアファミリアの白い砲撃手がたしなめて彼女にコテンパンに

伸されたらしい。

前衛職のベートさんに対し魔術師の彼女にクロスコンバットで熨されたと聞いて正直彼女がそこまで強いとは思ってなかった。

彼女の得意分野は遠距離からの正確な魔術砲撃、正直懐に入り込むまでがかなり難しい相手だけど……

それはともかくあの小さな冒険者たちはミノタウロスの攻撃を上手く捌きながら反撃しているが決め手に欠けるためか段々ミノタウロスに押されてきている。

このままでは本当に危ないだろう。

そして前線で踏ん張っていた男の子がミノタウロスの斧を受け止めようとして弾かれて態勢が崩れたところをすかさずミノタウロスが追撃しようとしていた。

私も思わず飛び出そうとしたが……

「君達、大丈夫？」

白髪の冒険者が二本の短剣でミノタウロスの斧を受け止めた。

彼は……まさか!?

そう思った瞬間、彼が魔導書グリモアみたいな本を取り出し何か霊みたいなモノを取り憑かせ雰囲気が変わると拳から放たれた魔力弾でミノタウロスをあつという間に倒してしまった。

あの本にあのスキル、間違いなく彼<sup>ベル</sup>だ。

四年前のあの事件以来眠っていた彼<sup>ベル</sup>が戻ってきた。

「あいつ、何者だ!? あんな強い奴オラリオにいたか!？」

ベートさんが驚いているけど今の私には関係ない。

早く彼<sup>ベル</sup>と言葉を交わしたい。

## No side

ベルが自分たちのファミリアの団長だという事に驚く『リトルドッグス小さなワンコ』の面々。

「やつぱりそうは見えないですよね。」( ; \_ ; ) A

ベルが少し落ち込む。

「あの〜ベルさん、それは仕方ないかと……………だってここ4年間でエミヤ先輩かユキチさんが団長みたいな感じで扱われてましたしそれ以前にも年齢的に団長とは思われてませんでしたし」

「……………」Σ(？口？ーーー)ガーン

さらに落ち込むベル。

「マシユ姉、追い打ちだつてそれ……………」(—ω—;) ウーン

「Missマシユは容赦ないな……………」(—ω—;) ウーン

「でもあの人が団長だつて私は思えないかも……………」

「たしかにエミヤさんとかが遠征メンバーの指揮を執っていたしね。」

「あのく皆さんも結構言ってますよ。」(—ω—;) ウーン

フオローがフオローになっていない中、ベルに近づく一人の少女が

「ベル!」

ベルに抱きつく。

「あつアイズさん!」

「ベル、目を覚ましたの?何時?それより体は大丈夫?……………」

「あつあのくアイズさん少し落ち着きましたよう。」

するとアイズ目掛けて一発の魔力弾が放たれた。

それをアイズはデスペレートではじき返す。

「べ〜ルく〜ん?何でアイズちゃんと抱き合っているのかな?ミノタウロス退治してたんじやなかったのかな?それよりもアイズちゃんは何でここにいるのかな?かな?」

(黒い笑)



## ダンジョン5階層の別の場所

遠征から帰還中のヘステイアファミリアはそこで同じく遠征帰りのロキファミリアの面々と合流していた。

「すまないねエミヤ。こっちの不手際に巻き込んでしまつて。」

「構わん。上層付近にミノタウロスが逃げたとなるとウチの新人たちを始め他の冒険者にも迷惑がかかるからな。」

「とは言つてもアカツキの報告ですでに2匹仕留めたと聞いたからね。」

フィンの謝罪を受けながら協力することを決めたエミヤと状況整理をするシロエ。

「それで主君、そのくマシユ殿と団長殿がもう一匹を追っているのだが……」

「大丈夫だろ。あの小僧が4年間ただ寝てただけなら目覚めて四日でダンジョン潜るなんて無茶しねえし。」

「そうは言うがクー・フリーン殿、団長殿がまたスキルを使ってあのような事が起きるって事は」



「それは問題ない。」

二人の会話を遮るように断言するのはエミヤ。

「曲がりなりにもヘステイアファミリアの団長はベルだ。4年間寝ていようが今まで培った経験値を生かさなないほど生半可な鍛錬は積んではいない。ベルが英雄を目指すと言ったその日から私はアイツの鍛錬に長い間付き合っている。敵の技量を見誤るような事、ベルにとつては絶対あり得ない事だ。」

その一言に他のヘステイアファミリアのメンバーも納得したように頷く。

「それよりも……まさか劍姫がミノタウロスと追っていたという事は……」  
「僕もアカツキの話を聞いてそこを懸念しているよ。」

「……願わくばベルと鉢合わせしないでくれるとありがたいな。もし鉢合わせていたとしてもそこにナノハが加わるのだけは避けたいな。」  
「ハア……」

「僕も同感だよ……」  
「ハア……」

エミヤとフィンの願いは虚しくその三人が鉢合わせていたことを知らず両陣営は上層へと進む。

## 第4話

ヘステイアファミリア本拠地<sup>ホーム</sup> 『聖火の竈』

屋敷の庭に綺麗な庭園、そこでティータイムを楽しんでいる4組の面々。

「遠征お疲れ様。急に戻って来てもらって悪いねハヤテくん。」

「ええってヘステイア様。ウチかてベル君とエミヤはんには世話になってんねん。これくらいお安い御用や。」

「ありがとう。………やつぱりにやん太君の入れた紅茶は落ち着くね。」

「そうやね。」

ヘステイアと談笑するのはチーム『夜天』のリーダーであるレベル5の魔術師『冥王』<sup>ブルートウ</sup>の異名をとるハヤテ・八神である。

「お褒めに預かり光栄ですニヤ。」

紅茶を飲みながらケーキを切り分けているのはチーム『記録の地平線』<sup>ログ・ホライズン</sup>最年長にしてレベル6の双剣士『大瑠璃蜻蛉』<sup>ラピスフライ</sup>の異名をとるにやん太。

「それはそれとして………彼を呼ぶべきだったか疑問に思うんだけど………」

「それは同感や。」

「ですにや……………」

三人が見つめる先には……………」

「もうリントロウつてば私は一人でできるから大丈夫よ！」

「そうは言ってもだね。エリスちゃんには紅茶はまだ早いから……………」

幼女にお節介を妬く白衣の男性。

「ところで森先生、ここ4日間のベルくんの状態は？」

「そうだね……………結論から言っていると問題ないよ。むしろ昏睡状態になる前よりも魔力の数値が上がっているよ。リタ君やパスカル君が作った魔力測定器で精密に検査したからね。間違いないよ。」

紅茶を一口飲み口をハンカチで拭う男性。

「現状として、『ウエスタ・ケラウノス聖火神雷』の第二段階を使用しなければまた昏睡状態になることは無いと思うよ。前の時は魔力が少ない状態で第三段階を使ってしまったからね。」

「そうなるか今のベルくんなら使える風に聞こえるけど」

「正直に言うか昏睡状態から目覚めても現状レベル4のベル君にはまだ『ウエスタ・ケラウノス聖火神雷』の第三段階を使うのは無理だ。また使えば今度こそ永久に目覚めないかもしれない。医師としてはそれは許可できないね。」

するとヘステイアが一枚の紙を出す。

「これは昨日ステータスを更新した時の写しだよ。ベルくんの数値がすでにランクアップ間近なんだよ。」

ヘステイアの言葉を聞き紙を見る面々。

「これは……ホンマにベル君のステータスなんですか？」

「流石にこれは異常ですよ……」

「4年間昏睡状態だったことが何か影響しているのだろうか……それはそれで興味深いね。」

「だろ？だからこのことはエミヤくん達が帰ってくるまで口外しないようにする。もちろんギルドの方にも根回ししとくよ。そうじゃないとアポロンみたいにまたベルくんを狙う輩が出てくるかもしれないし……」

### ダンジョン5階層

ベルを挟んで対峙するアイズとナノハ。

「ナノハはベルと同じファミリアだから何時でも一緒。でも私は違う。だから今は私の

時間。」

「だったら何もダンジョンじゃなくてもいいんじゃないかな？かな？かな？」

火花が散る展開に当事者のベルも傍観者のマシユや『小さなワンコ』リトルドッグスの面々もだんまりだった。

そんな展開を釘射す人が一人……

「おい!?アイズもナノハもそこまでにしとけよ。マシユもちみつ子たちもあとその白髪野郎もビビってるから。」

ベートが仲裁に入る。

「それによろ、お前たち二人してなんでそんな白髪野郎を気に入ってるんだ？強いのはさっきの戦いで分かったけど見た目は弱そうじゃねえか？」

その一言がいけなかった。

「ああっ!」（#。D。）

一瞬でベートに詰め寄る二人。

「ベートさん、ベルはこう見えてヘステイアファミリアの団長も務めるほど強い。オラリオ中のレベル4が相手になっても余裕で勝てるくらいに」

「ベートさんの目は節穴かな？こう見えてベルはわずか1年でレベル3まで到達したレコードホルダーなんだよ。レベル4にも私達より早く到達したし実力だけならレベル

6に届くぐらい強いんだから。」

「ベートさんにはベルについて教えなければいけない。」

「奇遇だねアイズちゃん。私もそう思ったの。だったら一緒にこの頭の悪い狼さんに全力全壊で叩き込んであげるの。」

今度はベートがターゲットになった。

「俺はそろそろフィン達に合流するわ。」

ベートは逃げ出した。

「遠慮しないでいいよベートさん。私達がベルの軌跡を余すことなく教えてあげる。なの。」

「大丈夫。きっとベートさんも納得するから」

しかし回り込まれた。

「おい!? 離せ!」

「ベル君はね。優しいの。誰にでも手を差し伸べてくれるの。」

「ベルは強くなるために近道しない。常に全力で戦う。決してくじけたりしない。」

「ナノハもアイズさんも止めて!」(\*ノωノ)

ベートの怒号も気にせずナノハとアイズはベルを褒める。

あまりのべた褒めにベルも赤面する。

そして外野は

「とつとりあえずベルさんを連れてここから離れましょう。あの3人ならどんなことがあつても大丈夫でしょう。」

「「「うんうん。」」」

(ベートンさん、すみませんが見捨てます。恨まないで下さいね。)

マシユの一言でベルを連れて撤収することにした『リトルドッグス小さなワンコ』とツナとアツシ。ツナとアツシは心の中でベートンに謝罪した。

その後合流したヘステイアファミリア、ロキファミリアの両陣営の説得によつてベートンは解放された。

地上にて

「なあなああり姉、今日はベルの快気祝いだろ。カレーが食べたいぜ。」

「ヴィータつたら………言っておきますが今日の献立は班長が決めたからカレーとは限りませんよ。」

「でもよ〜。」

「もうヴィータちゃんたら……リリルカさんを困らせてはいけませんよ。」

商店街を歩くのはヘスティアファミリアの専門職サポーターでレベル2のリリルカ・アーデとチーム夜天の突撃隊長であるレベル4のヴィータ、それとチーム夜天の後衛兼専門職のレベル5のシャマル。

「それにしてもあのベルにやつと追いついたのになあ……アイツ本当に寝てたのかよ……」

「昨日帰って来て早々ユキチ様と鍛錬してたベル様に挑んで返り討ちに合ったのに……」

「ヴィータちゃんは負けず嫌いだから……」

そう言っ歩いてると

「あら？リリルカちゃんにヴィータちゃんにシャマルちゃんじゃない。」

現れたのは大柄な料理服を着た男性。

「「ライブベアラ様!？」さん!？」のおっちゃん!？」

ガネーシャファミリアの料理人で元は闇派閥の冒険者だったライブベアラ。

「そう言えば聞いたわよ。ベル君が目覚めたって。後日快気祝いに団長たちと一緒に貴方達のホームにお邪魔させてもらおうわ。」



「楽しみにしています。」

そう言つてライブベアラーと別れた三人は

「そう言えばアストレア様やヘファイストス様、あとミアハ様とタケミカツチ様も明日快気祝いに来るそうよ。」

「なら盛大に祝わないとな。」

「そのためにも今日は食材の買い出しです。」

「そうね。にゃん太さんからも頼まれてますしシヤマル先生頑張っちゃおう。……………でも厨房には入らせてもらえないのよね。シクシク；つ旦、」

（シヤマルが料理した日にはフアミリアが壊滅してしまうからだよ！）

（エミヤ様とにゃん太様、コマツ様が悲鳴を挙げそうですしね……………）

三人は急ぎ足で食材を買いだしていく。

ヘステイアフアミリア本拠地<sup>ホトム</sup> 『聖火の竈』

「ベルくうくん！無事でよかったですよ！」

ダンジョンから帰ってきて早々、ヘスティアに抱きつかれるベル。

「かつ神様、苦しいです……………」

「あくヘスティア様、そろそろ手を放してあげてください。ベルさんが苦しんでいます。」

マシユの一言で手を放すヘスティア。

「ごめんね。ベル君。」

「いえいえ。こちらこそご心配をおかけしてすみません。」

お互い謝る二人。

すると屋敷の扉が開き

「戻ったぞ。それと……………お帰りベル。」

「エミヤさん！君！」

エミヤ達遠征組が帰ってきた。

「おう！待ちかねたか皆の衆！余が帰ってきたぞ！」

「口〇マ皇帝の嬢ちゃん、威張る場合じゃねえだろ。」

威張るネロにツッコむクー・フリーン。

「何を言うか！余こそこのヘスティアファミリア序列10位にして女性陣最強である！

図が高い！」

「つていうか女性陣最強はアインスだろ？まあいいや。おうベル坊。元気になってよ

かったな。」

「ありがとうございます。」

すると他の面々も

「ベルさん、元気になつてよかったですね。今日は時間がないので明日にでも宴会用の料理を作りますんで」

「ありがとうございますコマツさん。」

それぞれにベルの復帰を祝う面々。

それを少し離れてみるエミヤとヘステイア。

「ベルが戻つてやつと動き出したな。俺達の時間が」

「そうだねエミヤくん。ところでエミヤくん、今日の夜少し時間があるかい？話したいことがあるんだ。」

「……………何かあつたか？」

「ちよつとね。」

「……………ベル以外の幹部を集めておく。」

「頼むよ。」

その日の夜、『聖火の竈』応接室

集まったのはヘステイアにエミヤ、シロエとルル、ハヤテとユキチ、ネロ、ユーリと

……

「あのく私も参加してよろしかったんでしようか？」

「それを言うなら私も参加すべきなのであるのか？」

「君達も幹部だからいいんだよ。エステル君はかの帝国の姫君だし、アインスくんはうちの女性陣最強だからね。」

ブレイブヴェスperia

チーム『凛々の明星』のメンバーでオラリオと並ぶ大国である帝国の姫であるエステリーゼ・シデス・ヒュラツセイ（愛称エステル）とチーム『夜天』の副長にしてヘステイアファミリア最強の女アインス・リインフォースも加わる。

「さて本題に入るよ。昨日ベルくんのステータスを4年ぶりに更新したんだけど……とりあえずこれを見てくれ。」

ヘステイアが二枚の羊皮紙を出す。

面々がその二枚を見比べる。

そこに書かれていたのは……

【ベル・クラネル】

(四年前) ↓ (現在)

L v. 4 ↓ L v. 4

力：D ↓ S

耐久：D ↓ S

器用：C ↓ S S

敏捷：B ↓ S S S

魔力：C ↓ S S

《魔法》

オーブン・ザ・アルゴブック

【英雄凶鑑顕現】

・物質具現魔法

・英雄凶鑑を召喚する

・詠唱式：顕現せよ英雄凶鑑  
アルゴブック

【サタナス・ヴェーリオン】

・超短文詠唱音撃魔法

- ・音を放つ魔法
- ・詠唱式：ゴスベル福音

【ウエスタ・ケラウノス聖火神雷】

- ・段階詠唱式攻撃魔法

・聖なる火を纏いし神の雷を放つ攻撃魔法。

・無詠唱（火雷）：ファイアボルト雷を閉じ込めた炎の球を放つ。

・第一詠唱（英雄聖火）：アルゴウエスタ聖なる火よ、我が敵を焼き尽くせ

・第二詠唱（憤怒）：インディグネイション天光満つる処に我は在り 黄泉の門開く処に汝在り 出でよ

神の雷

・第三詠唱（神之怒）：メギト天光満ち聖火宿りし神の雷よ 幾多数千の怨敵に裁きを与えよ

その手に火を灯し その雷に触れ 我が敵よ 神の怒りに焼かれろ

《スキル》

【アルゴフレゼ英雄一途】

- ・早熟する
- ・英雄に憧れ、英雄を目指す意志が続く限り効果継続



するとアインスが口を開く。

「ベルのスキルになった英雄凶鑑<sup>アルゴブック</sup>……英霊の書は私の夜天の書と並ぶ未知の力……寝ていても持ち主の力になっても不思議ではない。」

「私もその意見に賛成だ。元々冒険者としての才能に恵まれてないベルが曲がりなりにも冒険者として戦えているのはスキルの力が大きい。」

エミヤもアインスの意見に同意する。

「他の面々、特に高レベル組と古参組にはこの事を伝えとくべきだろ。」

「その方がいい。無駄に全員で共有するより信用が置ける者たちでこの情報を保持した方が安全だろ。」

「ではベルくんのステータスについては以上。それと明日はベルくんの快気祝いで盛大にパーティーをすることにしたからそのつもりでね。」

「それは構わんが明日は朝一でベルをつれてギルドに行くからパーティーは夕方にしてくれ。」

「何故だいいエミヤくん?」

「ベルが目覚めたことをあの二人に知らせようと思つてな。……あの爺を除けばベルにとって唯一の親族だからな。顔を見せてやらんとな。」

「分かったよ。」



その夜は終わった。

## 第5話

朝 ギルド会館

「それじゃ行こうかベル。」

「ええ。」

ベルとエミヤが足を踏み入れる。

「お待ちしております。ヘスティアファミリーア団長ベル・クラネル氏、副団長エミヤ氏。」

エイナが出迎える。

「ギルド特別監房に行きたいんだが」

「はい。ウラノス様より仰せつかっています。どうぞ。」

「ありがとうございます。エイナさん。」

「ベル君、これも私の仕事だから。それではご案内します。」

エイナに案内されベルとエミヤはギルド会館の地下に進む。

ヘステイアフアミリア本拠地『聖火の竈』

ヘステイアフアミリアの本拠地である『聖火の竈』の門の前に立つ18人の大所帯。

「いや〜久々に班長やコマツちゃん料理が食えるとなるとこりや来なきや損や。」

「ロキ、昨日アレだけ宴会したのに何でベルの快気祝いパーティーに参加するんだい？」  
ロキフアミリアの面々である。

中央のロキを筆頭にフィンやガレス、リヴェリア、アイズ等もいる。

「せやかてドチビがワイらより先にファイたんやタケ、それにアストレアにも声かけてるんやで。ウチらが最初に同盟組んでる中なんや。何か悔しいやないか。ここは参加せな。」

そんな中一人エルフの若い少女が声をかける。

「あのお〜私も参加してよかったですか？」

「いいんだレフィーヤ。お前も幹部候補生としてヘステイアフアミリアの幹部たちと顔繋ぎしておくのもいいと思って連れてきたんだ。それにラウルやアキも一緒だし問題ない。」

リヴェリアに説明されてレフィーヤは納得したのか、小さく頷いた。

「しっかし……これがあの白い砲撃手や虎野郎やマツチ野郎の本拠地かよ。」

「前はアポロンファミリアの本拠地だったが戦争遊戯でベルやナノハ、ツナ、アツシとマシユの5人に鎮魂の魔王と鎮魂の魔女、サポーターのリリルカ・アーデの8人でアポロンファミリアとフィッツジエラルド商会の傭兵たち総勢100名相手に勝ったことで手に入れた戦利品だからな。」

「しかもそれを改築して今のようなおラリオでもっとも様式美あふれる屋敷にしたんじゃない。」

「あと庭の管理をしているのもある意味異形な奴だからな。今ではおラリオ中が認知しているがな。」

ベートの疑問にフィン達三幹部が答える。

すると

「神ロキ及びロキファミリアの皆様お待ちしております。」

目の前に大きな赤い馬のような異形が現れた。

いきなり現れたことに驚いたベートとアマゾネスの双子、レフィーヤが警戒するが

「やあ赤兎馬。出迎えご苦労さんや。」

「相変わらず外見に似合わぬいい声だな。」

「呂布ですが………とりあえず神へステイアの元へ案内いたします………ヒヒーン！」

「「「?!」」」。(。D。)！」

あまりのインパクトにヘステイアファミリアの本拠地ホトに初めて来たであろう4人は困惑する。

「ねえ団長、あの馬は一体?」

「彼は赤兎馬、あれでもれっきとした冒険者だよ。しかもレベル5。」

「そしてこの屋敷の管理人でもあるぞ。」

「いやどう見ても人じゃねえだろ!?!」

テイオネの質問にフィンとガレスがあっさりと答えるのにベートがツツコむ。

「まあ最初はモンスターと勘違いされることも多々あったけど今じゃ街の住人からも好かれている人気者だよ彼。」

(( (いやどう見ても馬だろ) ))

4人の心が一つになった瞬間だった。

「あらロキ、貴方も来てたの?」

「おーファイたん。」

現れたのは赤い髪に眼帯を付けた女性、鍛冶の神でオラリオで一二を争う鍛冶師系ファミリアの一角の主神であるヘファイストス。

その傍をヘファイストスと同じように眼帯を付けたハーフトワーフの女性ヘステイ

アファミリアの団長椿・コルブランドと赤髪に大剣と大きな包みを背負った男性ヴェルフ・クロツゾが固めている。

その少し後ろに橙色の髪に小柄だが団長の椿やヴェルフよりも力強い雰囲気を持つ男性が立っていた。

「珍しいね。『単眼の巨師』<sup>キョクローブス</sup>がこんな場に来るなんて……それと『業絶刀』もいるなんて」

「儂はヴェルフに連れられて来ただけだ。まあ個人的に頼まれとったユキチの刀を納めに来たんだがな。」

「そういうなよ村正の旦那。アンタだつてベルを個人的に気に入ってんだろ。」

「そういうがなヴェルフよ、儂は主の専属契約者とはあくまで友人つてだけだ。それは主も同じだがな。」

彼は千子村正、ヘファイストスファミリア所属のレベル6で鍛冶師<sup>スミス</sup>としては刀だけに限れば団長の椿を上回りヘファイストスに迫る鍛冶スキルを持ち戦闘においても椿と同格に匹敵する實力を持つ。

ちなみにユキチ・福沢やデメテルファミリアの九代目山本時雨蒼燕と専属契約している鍛冶師<sup>スミス</sup>である。

「あーリヴェ姉、やっぱり来てたんやね。」

「ご無沙汰しておりますリヴェリア様。」

「マリエールとヘンリエッタか。」

リヴェリアと挨拶しているミアハファミア所屬のマリエール（以後マリエと呼称）  
本名マリエール・リヨス・アールブ、リヴェリアの妹で同じくエルフの王族である。

そして同じくミアハファミア所屬のヘンリエッタはマリエの従者兼友人でありエルフの貴族である。

「あれ？ミアハは来てへんの？」

「いえ。ナアーザ団長とセララ、ののを連れて私達より先に来ています。」

「ウチらは快気祝いの品の準備で遅れたからミアハはん達には先に行つてもらうてん。」

「ミアハ様とお連れの方は屋敷の方にいます。」

そこに現れたのはメイド服を着た小さな女の子。

「あらく鏡花ちゃん。」

ヘンリエッタが目を輝かせて女の子に近づく。

「今日はベル団長の快気祝い、だからこの服装で接待しろとハヤテが……………」

「ハヤテ（ちゃん）、グツジョブ！」

「ほんまにあの子は……………」（—ω—；）ウーン

「ヘンリエッタの奴……………それにロキといいハヤテといい、独特な訛りのある奴はどう

してこうも変わった趣味を持っているんだ……」(ーωー;) ウーン

「リヴェ姉! それウチもあの二人と同類って事かいな。」

「お前の場合は無自覚な分質が悪い。」

「?」(。・ω・)?

ギルド会館地下10階………辺り

「ロイマンはどうした?」

「フィッツジェラルドと賭けをしてすつからかんになったのをオラリオ中に知られたらしくしばらく謹慎してます。」

「懲りねえなああ豚………」

「あははは」( ; ; ) ^ A

ベルとエミヤはエイナの案内で先を進む。

「こちらです。」

「ありがとう。」



「ありがとうございます。エイナさん。」

一つの部屋にたどり着いた一行。

「ではここで」

「また後でな。」

エイナが去るとエミヤとベルは部屋の中に入る。

「おや？これまた珍しい客だな。」

「お久しぶりです。ザルド叔父さん。」

「元氣そうだなザルド。」

現れたのは顔に無数の傷を持つ大男。

かつて闇派閥に手を貸しオラリオを崩壊させようとした元ゼウスファミリアの冒険者であるザルド。

「おいザルド。飯はまだか？」

すると部屋の奥から黒いドレスを着た女性が現れる。

「あつ！お義母さん。」

「べっベル！」

彼女はザルドと同じく闇派閥に手を貸しオラリオを崩壊させようとした元ヘラファファミリアの冒険者であるアルフィア。

アルファイアは素早くベルに近づき抱きしめる。

「4年前、お前が昏睡状態になったと聞いた時は心臓が止まるかと思ったぞ！」

「いや、しよつちゆう吐血してるじゃんつブヘ！」

ザルドがツツコむと同時にアルファイアがザルドに拳を叩き込んだ。

「……………」(—ω—;) ウーン

「もう心配をかけさせるなベル！」

「はっはい！」

ベルをぎゅーと抱きしめるアルファイア

そんな二人のやりとりの陰で

「大丈夫かザルド……………」

「なんだかんだで付き合えば長いからな……………」

エミヤがザルドをいたわる。

「つたく……………エミヤ、お前がアイツの魔法を代償に病を完治させたせいでアイツ身体能力がバカ強くなったんだぞ。」

「それがベルの望みだったからな。かなり複雑な状況でできる最善を尽くしただけだ。アルファイアの身体能力が上がったのは治療後のリハビリの結果だ。」

「それはそれで最悪じゃねえか!？」

「うるさいぞ！その料理好きども！」

(随分と元氣になられてまあ……………)

再びヘステイアファミリア本拠地『聖火の竈』

「……………」

「どうしたの？それで終わり？」

『聖火の竈』地下3階にある闘技場にてアストレアファミリアの団長アリーゼ、副団長の輝夜、そしてリユー・リオンが膝をつきながら息を整える。

その傍でトンファーを構えながら彼女たちを見下す一人の青年。

「流石だな浮雲<sup>アラウテイ</sup>。レベル5の冒険者3人を相手に余裕とはな。」

「本当に強いですね。」

「はあはあ……………」

「群れてる時点で僕に勝つことなんてできないよ。せめてあの小動物たちみたいに単体で階層主を瞬殺できるようにならないとね。」

「はあ、やはりヘステイアファミリアの高レベル組はぶっ飛んでるな。」

「この方は特にそうですね。」

「ヘステイアファミリア随一の戦闘狂で序列8位の男、キョウヤ・雲雀。群れるのを嫌う貴方が何故冒険者に？」

リユウの質問に対しキョウヤは肩をすくめながら

「この場所には噛み殺したい相手が多いからね……………それにあの小動物たちが獲物になるのを待つならここにるのが一番手っ取り早いと思っただからさ。」

「……………」

アリーゼ達が呆れている頃、闘技場の観客席では……………

「どうナアーザさん？義手の調子は？」

「問題ない。ありがとうリタ。貴方とパスカルがこの義手を無償提供してくれたお陰でミアハ様が無理な借金を背負わず済んだし」

「それならマリエールに感謝しなさいよ。あの人が私達に依頼してくれなかったら本当にマズイ状況だったのよミアハファミリアは。おまけにマリエールがヘンリエッタや小竜たちを引き連れて当時のたロキファミリアから改宗してあなた達のファミリアに加わったおかげで今までと同じように活動できていますよ。」

「そうね。私はあの時のトラウマが原因でダンジョンに潜れないけど小竜君達が探索し

てくれるしマリエやヘンリエッタがファミリアの財務を管理してくれてるし貴方たちのファミリアも協力してくれるしね。」

「そりや団長のベルやエミヤは縮小前の頃から世話になってるしウチらもあなた達が作ったポーションの世話になってるしね。」

ナアーザと世間話をしているのはヘステイアファミリアのレベル4の魔術師リタ・モルディオ。

パスカルと共にヘステイアファミリアの屋敷の設備を設計した技師でもある。

「それにしてもこの闘技場、あのキョウヤ君の攻撃に耐えられるぐらいしつかりした設計なのね。」

「当然よ。私とパスカルの技術の結晶をフィッツジェラルド商会からいただいた感謝料で実現したのよ。まあパスカルは残りの金を使って何か作ってるみたいよ。私の魔石を使った動力も提供したし何か下らない事考えてんじゃないの。」

「それはそれで怖いわね……」（—ω—；）ウーン  
すると

「リタ？ナアーザさんと何の話をしてたんですか？」

「何でもないわよエステル。」

「そうですか。それと闘技場の皆様に軽食をお持ちしたんですが」

「いただくわ。」

一方厨房では

「いやあくすいません。なんかお客様に手伝ってもらっちゃって……………」

「いいですよ。私もお手伝いしたかったんで。」

「私はコマツシエフの仕事を間近で観察したかったんで」

「本当に助かりますニヤ。エミヤ副長は夕方まで戻ってこないんで正直人手が欲しかったところですよ。」

コマツとにやん太、ミアハファミアのセララとのがパーティーの料理の準備をしていた。

この4人、手際がいいのかみるみるうちに料理が出来上がっていく。

ただし料理に使われている食材は……………」

「班長、ヘルハウンド肉のロースト出来上がりますよ。」

「こつちもコカトリスの鳥大根が出来上がりましたニヤ。」

「にやん太さん、食人花の実の皮むき終わりました。」

ダンジョンのモンスターだった。

それを厨房の外から眺めているのはタケミカツチとその眷属たち。

「ダンジョンに巣くうモンスターが食材になるとは思わなかったな……………」

「でもそれを可能にするのはアビリティ『美食屋』<sup>グルメ</sup>を持つている冒険者だけだから……」

「このファミリアにはトリコ殿やスタージュン殿が居りますから。」

「今そのアビリティを持つているのはヘステイアファミリアを含め探索系の上位を占めるところとガネーシャファミリアだけですよね。」

「しかもモンスターを調理できるのはアビリティ『料理人』<sup>シェフ</sup>を持つ冒険者だけ……そう  
いった意味ではコマツやにゃん太がいるヘステイアファミリアが羨ましい。」

「おまけにスタージュン殿はこの二つのアビリティを持つている唯一の冒険者ですから  
ね。」

しみじみとつぶやくタケミカヅチ達。

ギルド会館地下の一室

「それで……ギルドの秘密職員の方はどうだ？」

「まあ恩恵がないから苦戦することは多々あるがそこは経験と生まれ持った力で何とか

対応している。」

エミヤとザルドがたわいもない会話をしていた。

一方ベルは

「そう……でもなベル、私としてはアイツの忘れ形見であるお前には無茶してほしくないと思ってる。」

「心配かけてごめんお義母さん。でも僕は……」

「分かつている。お前が英雄を目指すことに異論はない。だがなベル、お前は今やオラリオで最も強いファミアの団長でありこの街に必要な存在なんだ。そして私にとつてたった一人の肉親なんだ。そのお前がいなくなったら悲しむ人がいるという事を忘れないでくれ。」

「はいお義母さん。」

アルフィアと話すベル。

「そう言えばベル、目覚めてからどうよ。出会いつて奴は？」

「黙れザルド！そんな野暮な話を持ち込むな！」

「あのな〜ベルは4年間寝てたとはいえ今14歳だぜ。彼女ぐらい作ってもおかしくないだろ？」

「あ〜その〜」



「ベルに好意を持つ人間だがウチのファミリアのナノハやりルルカ、ミアハの所のカサンドラ、ガネーシヤのアーデイ、アストレアのリューとロキファミリアのアイズ、分かっているだけで結構いるぞ。」

「エミヤ（さん）!?!」（;。∩。）

エミヤがベルに矢印を向けている人たちを明かした。

その事にベルとザルドは驚愕する。

「ほほう……………では次の出所の時にはしっかりと挨拶しておかないとな……………それと嫁の作法が何たるか教えてやらんと」（黒笑）

「エミヤてめえ!どうしてくれんだよこの状況!?次の出所でアイツ間違もなく戦争起こすぞー!」

「大丈夫だ。基本的に殺し合いにはならんよう手は打つし俺としてもベルの（恋愛）事情には手を出さん。それにベルの嫁は私ら契約者サブアンにとつて第二のマスターだ。相応の人物なら口出ししない。それにベルの嫁の最低条件は私に（料理で）勝つことだ。」

「いやそれ無理ゲーだつて……………」（ーωー;）ウーン

「なら私の条件は私に（物理で）勝つことだな。」（?ー?）ニヤリ

「あわわわ」（;。∩。）ガクガクブルブル

「ほら!?!アルフィアの奴、目の色変えちゃったじゃねえか!?!」

エミヤとアルフィアの小姑つぶりに呆れるザルドだった。

三度へステイアファミリア本拠地『聖火の竈』

庭の一角でテーブルや椅子を置いたり飾り付けをしている面々がいた。

「カロール、その椅子はこつちですよ。」

「分かったよエステル。」

「エステル、このテーブルは？」

「それは屋敷のテラスの方へお願いしますナオツグさん。」

「あいよ。」

エステルの指示でテーブルや椅子を設置しているチーム『凛々の明星』ブレイブウェスベリア 最年少にしてレベル3の魔道具アイテムメーカー製作者のカロール・カペルとナオツグ。

「エルテルさん、クロス持ってきました。」

「ありがとうございますアツシさん。それじゃクロスをテーブルに敷いてください。」

「アツシ君頑張れ〜」



「ねえハヤテ、この花はどこに飾ればいい？」

「フェイトちゃん。それは向こうのテーブルの花瓶に入れてくれてええよ。」

「分かった。」

「ホンマにありがとな。パーティーの飾りつけ手伝ってもらうて。」

「いいの。私達も招待されたから。それにパーティーの主役はベル。なら手伝うのも当然。」

彼女はアストレアファミリアのレベル4で『雷光』<sup>フオトン</sup>の異名をとるフェイト・テスタロッサ。

「4年前、ベルやナノハ達がいなかったら私達アストレアファミリアは全滅していた。あの時の恩は忘れない。それにベルはナノハにとって大事な人だから……それはそれでムカつくけど……」

「相変わらずナノハちゃん命やねフェイトちゃんは……」(……)「A  
そんなこんなでパーティーの準備は進んでいった。」

## 第6話

夕方ヘステイアファミリア本拠地『聖火の竈』

アルフィアとザルドとの面会を終え本拠地に帰ってきたベルとエミヤ。

「ただいま帰りました。」

「帰ったぞ。」

帰りの挨拶をした二人を出迎えたのは

「わう。」

「今日はラピードが出迎えますか。」

「そのようだな。それより赤兎馬はどうした？」

「わう。」

チーム『ブレイブウェスベリア凛々の明星』のマスコット？でありヘステイアファミリアの番犬であるラ

ピードが庭先に顔を向けベルとエミヤも一緒に庭を見ると

「なあなあ、赤兎馬はん、うちに改宗させへんか？」

「何言つてんだロキ！赤兎馬くんは僕の眷属なんだぞ！」

「呂布ですが、私は改宗する気は無いので……………」

へスティアとロキが赤兎馬を取り合っていた。

「あいつら……………何やってんだか……………」

こめかみを抑えるエミヤ。

「すまんなエミヤ。後でロキにはきつく灸をすえておく。」

「こつちもすまんなリヴェリア。へスティアの方は私が何とかしておこう。」

二人の喧嘩を遠巻きで見っていたリヴェリアがエミヤに話しかける。

「それと……………ベルよ。戻って来てくれて嬉しいぞ。」

「ご無沙汰しておりますリヴェリアさん。」

「今日は快気祝いだ。そう謙遜することはない。それとコレは快気祝いの品だ。受け取ってくれ。」

そう言つてリヴェリアは綺麗に梱包された小さな箱を渡す。

「ありがとうございます。」

「中を開けてみてくれ。」

「はい。」

中を開けると小さな翡翠の宝玉がはめ込まれた首飾りが入っていた。

「ほう。これはエルフの魔力の加護が込められているな。宝石はアンタが用意したのか？」

「ああ。寶石は私が用意し首飾りはアスファイが仕上げてくれた特製品だ。アスファイも今日来たかったらしいが生憎用事があって来れないそうだ。」

「そうですか。会ってご迷惑かけた謝罪をしたかったんですが……」

「仕方ないだろう。あのヘルメスの眷属なんだ。大方あの駄神に振り回されているんだろう。それにあのファミリアには『重力グラビティの支配者』と『パイナップル頭ヘッド』、『雷天狗』と問題児が多いからな。」

「それはお前のところが言うことか？ 4年前ベルを昏睡状態に追い込んだ原因を作ったイヴィルス闇派閥の連中を一人残らずファミリア総出で半殺しにして『オラリオ火の七日間事件』を引き起こしたお前たちが……」

ジト目でエミヤを見るリヴェリア。

ベルもエミヤに視線をやる。

エミヤはそつと視線を逸らす。

「……………コロシテハイナイ……………」

「説得力はないぞ。お前とナノハ、トリコが派手に暴れたのもそうだがルルとシロエが奴らを一人残らずあぶり出してオラリオから逃げ出せないように策をめぐらして完全に一網打尽にしたからな。外に逃げ出そうとした奴らもアカツキとアツシ、ツナやユーリ達が仕留めたからな。お陰で一部の関係者からは未だにお前たちは恐れられている

「からな。」

「……………エミヤさん……………」

ベルの目がよりジト目になってエミヤを見つめる。

エミヤはさらに視線を逸らす。

「それよりそろそろパーティーの時間だ。私は厨房に入るからベルはヘステイアたちを連れてテラスに向かえ。主役がいないと始まらないからな。」

(さらつと話題をそらしたな……………)

テラスにて

「えー、では改めましてベル君の4年間に及ぶ昏睡状態から目覚めたことを祝して……………乾杯！」

「「「かんぱーい！」「」」」

ヘステイアの音頭で乾杯する一同。

ちなみに皆が持っている飲み物は6年前にトリコとコマツが養殖して育てた絶滅種



だったビリオンバードの卵のドリンクだ。

「このドリンク上手いな。」

「ホンマに最初に食べた時はろくに上手くない肉だったけどあの時の飢饉からオラリオを救った最高の食材だからな。それにこいつが嬉しい時に産んだ卵はまさに絶品でヘスティアの所で、しかもお祝い事にして食べれへんもんな。やっぱ参加してよかったで。」

「たしかにな。じゃがわしは酒がいいの。」

「酒ならあるぞガレス。」

「おうイスカンドル。」

イスカンドルが酒樽を持ってガレスたちの所へ。

「それ、手前にもくれ。」

樽もよってくる。

「おう樽か。この酒はこの間ソーマの所で出来た新作だ。余に献上した中では最高クラスだ。」

「献上って……5年前にソーマファミアを征服と称して団長のザニスらをたつた一人で叩きのめして完全掌握したんじゃないやなかったっけ？」

「手前もそう聞いたぞ。そのお陰で前より健全になったって聞いている。」

「当たり前だ。最高の酒を造ろうとしてたはずなのにあの神はそこは真逆の道歩んでいた。それは酒に対する冒瀆だ。だから余が介入した。ただそれだけだ。」

「まあなんにせよわしは美味しい酒が飲めれば十分じゃがな。」

そう言いつつ酒をあおるように飲むガレスと椿。

別の席では

「十代目、ベルが復帰したんですから是非とも俺をヘステイアファミリアに改宗させてくださいよ。」

「ゴクデラ君あのね、改宗については俺じゃなくゴブニョさんや向こうの団長の了承を得てからじゃないとダメだからね。」

「だけどあのクソ爺神にクソ団長、俺の魔道具アイテムメーカー製作者の能力を買ってくれるんですがダンジョンで爆音を響かせてダイナマイトを破裂させたら止めてくれって言ってくるんですよ。だから俺探索系に入りたかったんっすよ。」

「仕方ないよ。俺達の入団先決めたのは……………」

ツナとゴクデラが頭の中で思い浮かべたのはボルサリーノを被った赤子……………

『文句があるならねっちよりとお仕置きだぞ……………』

「……………逆らえねえよな（っすね）」

ため息を吐く二人とは対照的に

「まあ俺は楽しいけどな。野菜作りもそうだがデメテルさんとは基本団員の自由を認めてるからツナン所や笹川先輩ん所で鍛錬できるしたまに探索系の助っ人に駆り出されるけどな。」

「山本はいいよなあ……………俺もデメテルファミリアに改宗したいけど……………リボーンの奴が許してくれないし……………それにベルやアツシの女性問題の後処理も俺がやってるし」

「ああ……………」(ーωー;) ウーン

そう言いながら別の席を見る三人。

そこには……………

「アツシ……………茶漬け食べる?」

「アಂತ、茶漬けつてパーティーで食べるものじゃないでしょ!?!ここはドンとケーキでも食べなさいよ!」

「あのを鏡花ちゃんもルーシーさんも何でそんなにガツガツ……………」

アツシが同じファミリア所属のレベル4の泉鏡花と元フィッツジェラルド商会の社員で現豊穡の女主人の店員であるルーシー・M・モンゴメリに挟まれ右往左往していた。

そんな三人の様子を見つつツナ達はもう一方の席を見る。

「白兔君モフモフだあ〜♪」

「アーデイ様、ベル様が困ってます。いい加減離してあげてください！」

「アーデイちゃんとはOHANASHIしないとイケないかな？かな？」

「……………ベルは私の……………」

「……………（誰か助けて……………）」

ベルがガネーシヤファミアリアのアーデイ、リリとナノハ、アイズに囲まれていた。

（さらにそこに）

「……サポーターくん、ナノハくん、アーデイくん、ヴァレン某、僕のベルくんから離れろ！」

ヘステイアも加わりさらに混沌カオスと化していた。

さらにその様子を遠目からベルを睨むように見る二人の……………

「アイズさんに男……………許さない……………ユルサナイ……………ユルサナイ」

「あの駄ウサギ……………ナノハから離れろ……………ハナレロ……………ハナレロ」

眼からハイライトが消えつづやくアイズのセコムレナノハのセコムファイヤーとフエイト。

「ツナさん（君）……………助けて」

「（ベル、アツシさん……………ごめん無理……………）（。——人——）ゴメンネ

ツナはわが身の正気を保つため二人に合掌した。

またまた別の席では

「うんめえ〜！」

「本当だなヴィータ。コマツ、おかわり頼む！」

「相変わらず早いですねトリコさん……………それとヴィータちゃんも」

大男のトリコと幼女のヴィータがたくさんの飯を平らげていた。

一方その隣ではアストレアファミリア所属のレベル7、アルトリア・ペンドラゴンが二人と同じ量のご飯を食べつくしていた。

「アルトリア……………相変わらずの食欲ですね。」

アルトリアに付き添っていたリユーがあまりの食欲っぷりに啞然としていた。

「そう言えば午前中浮雲アラウデイ相手に試合してたそうですが結果はどうでしたか？」

「悔しいことに惨敗です。あの男は強すぎです。その強さゆえにオラリオで独自の自警組織を立ち上げて人知れず横暴な冒険者をシメて回ってるらしいですが……………我々の理念とは相いれませんか。」

「えええ。でも彼のおかげでごろつきみたいな冒険者の数が減りましたしね。」

リユーは苦虫を噛み潰したよう拳を握る。

その様子を見ながらもオムライスを完食するアルトリア

「すみませんがオムライスおかわりです。」

「よくそんな量が入りますねアルトリア。」（—ω—） ウーン

しばらくして、闘技場にて

闘技場で装備を身につけたベルが準備運動をしている。

その傍にはヴェルフが持ってきた小包を開けて中に入ってたロングナイフ6本をベルに見せている。

「どうかな。4年前からお前が目覚めた時のために欠かさず俺が手入れしておいた。」

「ありがとうヴェルフ。……懐かしいな。」

「お前の成長に合わせて柄の部分も調整しておいた。少し慣らして手になじませた方がいいだろう。」

「何から何までありがとうヴェルフ。」

「気にするな。俺は4年前もそしてこれからもお前の専属鍛冶師だからな。それと今日は見せてもらうぜ。お前が英雄に愛される男たる所以をな。」

そう言つてベルに激励した後ヴェルフは観客席へと下がっていく。

「さてと……これよりベルくん復帰記念の模擬試合を行うよ。」

「「「おおおおお！」」」

ヘステアの宣言に観客席に座る面々（主にロキやガネーシヤの所の眷属たちとヘステアファミリアの酒飲み達）が歓声を挙げる。

「ではここからは実況は私『湖の騎士』シヤマル、解説『鎮魂の魔王』ルルさん、特別解説のヘルメスファミリア所属のレベル4『青い稲妻』ジヨニー・シデンの三人でお送りいたします。」

（何で俺がこんな茶番に……………）

「イエーイ！ 皆楽しんでるかーい！」

「まずは今回我が団長ベル・クラネルと模擬戦を行う方々を紹介しま〜す。」

するとスポットライトがベルと闘技場にいる他の人達に当たる。

「ヘステアファミリア屈指の砲撃魔法の使い手、『白い砲撃手』ホワイトバスター ナノハ・高町！」

「行くよレイジングハート。」

『Yes master.』

槍のような杖レイジングハートを手に真剣な眼差しで闘技場の中央へと歩くナノハ。

「超直観と強力な火力を武器に戦う大空の覇者、『大空を駆る獅子』ツナ・D・ジエツト！」

「ナツツ、カンレオ・フォルマ 形態変化！」

肩に乗るライオンが変化したマントを羽織るツナ。

「超高速で動き敵を切り裂く猛虎、『月下獣』アツシ・中島」  
『グルウウウウ』

人型からより獣に近い獣人に変化して周囲を睨むアツシ。

「その盾でいかなる攻撃をはじめ返し万人を守る守護者。『人理を守護する盾』マシユ・キリエライト！」

「怖いですけど頑張ります！」

少し怯えながらも力強く拳を握るマシユ。

「そして本日の主役、我らが団長、数多くの英雄の力を記憶し引き出す力を持つ  
『ヘステイアズラビット』、『アルゴブツク』  
『焔の女神の白兔』、『英雄凶鑑』ベル・クラネル！」

「さてと……………行こうか……………」

ベルの目が真剣なモノに変わる。

「そして審判は『人間失格』オサム・D。それでは始めましょうか？」

すると闘技場の中央で審判服に身を包んだオサムが静かに周りを見渡す。

「なんで私が審判役なのかな？」

「パーティーの手伝いもせず遠征中にたまった書類の処理をサボったからですよ。」

オサムの疑問にシヤマルがいい笑顔（目は笑ってない）で答える。



「じゃあ審判役を無事務めたらデートしてもいい？」

「お断りします。」

一方観客席のロキファミアリア陣営は

「……………私が戦いたかった……………」

「ここはヘステイアファミリアの闘技場だ。自重しろアイズ。」

「そうだね。今回は彼らの実力と4年間眠っていたベルの状態を知りたい機会だから見学させてもらおう。」

「ねえフィン、あの白兔君が4年間寝てたってどういう事？」

テイオナがフィンに質問する。

「4年前、アストレアファミリアの遠征にベル達5人も助っ人として同行してただけ  
 ど25階層付近でアストレアファミリア殲滅を企てた闇派閥イヅイルスの待ち伏せに合ったんだ  
 けどその際闇派閥の仕掛けた罠が厄災ジャガーノートを呼び寄せてしまったんだ。そ  
 の際ベルが自身のスキルである『英雄凶鑑』アルゴブックと最大級の魔法を使ってジャガーノートを  
 退けたんだが……………」

フィンが言いよどむ。

「どうしたのフィン？」

「僕も当時の事は聞いたただけだから詳しいことは分からないんだけど、そのジャガー

ノートを退けた時ベルもかなりの重傷を負ったんだ。後から合流したエミヤ達のおかげで一命はとりとめたがジャガーノートとの戦いのときに使った魔法でかなり精神を消費したみたいでそれが原因で4年間昏睡状態だったんだ。それまで彼は最速でレベル4までたどり着いた最速記録者として有名だっただけにオラリオ内での影響を危惧してギルドの協力も得てベルが昏睡状態になった事を伏せてもらったんだよ。無論同盟を組んでた僕達ロキファミアやガネーシャファミアの幹部たち、ベルと親しかった者は皆事情を知らされた上で真実を口外しないことをヘスティアと約束したんだ。今回君たちに話したのはベルの事を知ってもらうためなんだ。」

「なんで?」

「こらティオナ。団長の話はまだ終わってないわよ。」

「次の遠征には是非ともベルやヘスティアファミアの面々にも参加してもらおうと思ってるね。エミヤには断られたがベルなら無下に断ることはないだろうし、それにベルが寝ていた4年間凍結していた同盟がもう一度始動するんだ。その友好関係を大々的にオラリオで広めないとね。」

フィンの考えに他の団員も闘技場に注目する。

「ところでフィン、この模擬戦どっちが勝つと思う?ウチはマシユたんやと思うねん。」  
「それはお前の好みの話だろロキ。」

「ママは参加させへんの？」

「誰がママだ！ベルの力を確認する大事な模擬戦に無粋なモノを持ち込むなど言っているんだ。」

「なら私はベルに賭けようかしら。」

「なんで貴方まで参加してるんですかアストレア。」

「まあ簡単に言えば少しばかりこういう娯楽に乗るのも悪くないと思ったからよ。あの時私達のファミリアを壊滅の危機から救ってくれたベルには感謝してるし何よりベルの実力はそう簡単に推し量れるものじゃないわ。だからね。」

アストレアの考えにただただ溜息しか出ないリヴェリア。

それが伝染したのか……………

「なら手前はツナに賭けようかの。アイツのグローブには前々から興味があつたんじやが中々見る機会がなかったし」

「なら私はベル君に賭けるね。やっぱりベル君がかっこいいし」

「椿……………アーデイ……………お前たちは……………」（\*・旦、）

「俺はもちろん十代目です！」

「俺もな。ツナがそう簡単に負けるわけねえしな。」

「私はナノハ。ナノハは誰よりも強い。」

「アツシが強い……………誰もアツシのスピードについてこれない。」

(もうどうにでもなれ……………)

椿を筆頭に各々がそれぞれ誰に賭けるか談義を始めた。

もはや収集不可能を思ったのかりヴェリアとガネーシヤファミアリアの団長シャクティ・ヴェルマがこめかみを指で抑える。

一方その様子を見ていたエミヤ達は

「向こうも相変わらずだな。」

「まあそれだけ坊主たちの力を見たいって事じゃね。俺は酒盛りの席にはもってこいのイベントだからいいけどな。」

「分かるとるなケルトの英雄よ。余も同感である。さあ我が子ウサギたちよ！我が闘技場に薔薇の祝福を！」

「まったくお前は……………まあいいか。ではオサム、そろそろ始めてくれ。」

エミヤ達の言葉を聞いてオサムは観念したかのように

「分かったよ。では模擬戦を始めようか。これは模擬戦だからお互い熱くならないようにね。それと制限時間は10分だから時間が経ったら強制的に止めるからそのつもりでね。」

オサムの説明にベル、ツナ、ナノハ、アツシ、マシユの5人が納得するように頷く。

「では……………試合開始！」

オサムの合図と同時にアツシとツナ、ナノハが一気に動く。

「先手必勝！ディバインバスター！」

『Divine Buster.』

「死ぬ気の零地点突破初代エディション！」

「ハアアアアアア！」

ナノハが闘技場の周囲に無数の魔力弾を放ち、ツナが闘技場内の周囲を凍結させ、ア

ツシが半獣人化して高速で動き回るが

「宝具、展開します！ロード・カルデアス人理の礎」

マシユが盾を展開して全て防ぐ。

アツシはすかさずベルの背後に回り込むが

「久しぶりだ。行くよ。」

ベルがロングナイフを二本抜き取る。

「風龍、昇華風陣！」

一本のロングナイフを振ると風が起こりアツシを弾き飛ばす。

「炎竜、流刃若火！」

もう一本のロングナイフを振るとベルの周囲に炎が燃え上がる。

「さあ行くよ皆！」

ベルの目が獯猛に光る。

一方観客席で見ていたエミヤは不敵に微笑む。

「やはりベルには龍刃六爪剣が似合うな。さあここからが本番だな。」

## 第7話

ヘステイアファミリア本拠地『ホーム聖火の窯』闘技場

二本のロングナイフを構えるベルが獰猛な笑みを見せる。

さながら小さなウサギが獲物を狙う肉食獣になったようだ。

そんな中5人の中で最初に動いたのはツナだった。

ツナが一瞬でベルの目の前まで来て炎を纏わせた拳を繰り出す。

しかしベルはそれを背をのけぞるように躲す。

そしてベルはロングナイフを一本持ち替えると

「氷竜、雪月花。」

ロングナイフから放たれた冷気がツナの拳を凍らせていく。

「!?」

「はああああ!」

ベルがそのまま蹴りを放ちツナを遠ざける。

ツナが凍った両拳をクロスさせて防ぐがかなり距離が開いてしまう。

「この蹴り………4年前と変わらない。いや4年前より重さがある。」

「次は僕から行くよツナ。」

ベルが加速しツナに接近する。

ロングナイフ2本で十字に切り裂こうとするが

「させません!」

マシユが間に入り盾でベルの剣撃を受け止める。

そしてそのままマシユが

「カウンター!」

「!？」

盾でそのままタツクルするようにベルに突撃するがベルが足で盾を蹴ってその反動でマシユから離れる。

そこをナノハが見逃さず

「アクセルシュート!」

魔力弾がベルに襲い掛かるが

「闇竜、暗黒球壁!」

黒いロングナイフを振って黒い球体を出し魔力弾を吸収する。

「お返しだ!」

ベルが球体をロングナイフで撃ち返す。



ナノハに向かつていく球体は

「はあああああ！」

アツシが虎の爪となった拳で切り裂いた。

「ふう。やはり4年間ただ寝てただけじゃないね。夢の中で鍛えてたんだね」

「流石ですねベルさん。」

「やっぱりベル君はすごいの！」

「こうなったらこつちも出し惜しみ無しだ！」

ベル以外の4人が再び動く。

「ナツツ、カベルネフォルマ形態変化！」

ツナは凍った拳を炎で溶かすとマントをグローブに変化させるとグローブから炎を出して空を飛ぶと片方の手で浮遊しながらもう片方の手をベルに向ける。

「オペレーションX！」イクス

「了解しましたボス、Xイクス BURNER発射シークエンスを開始します。」

ツナは冷静にただベルという最高の友にして冒険者として頼れる仲間とも、そんな彼に対し最大の一撃で彼が眠っていた4年間に応える意思を固める。

「レイジングハート・エクセリオン、行くよ全力全壊！」

『Yes master.』

ナノハは杖レイジングハートを天に掲げる。

「レイジングハート、エクセリオンモード！」

杖が変化し先端がさらに鋭利になりより大きな形に変化する。

「魔力収集開始！フルチャージ！」

レイジングハートに闘技場内の魔力が集まっていく。

ナノハにとってベルは初めての友達にして大事な仲間、そしてレベルを追い越してもなお追いつけない存在に4年間で積んだ全力をぶつけようとする。

「僕はナノハやツナのような火力は無いけどスピードなら誰にも負けないよ。………月下獣・半人半虎。」

アツシの両手両足が虎のようになる。

そしてその足で地面を踏み切るとまるで光の線のようなスピードで闘技場内を超高速で移動していく。

（もつと………もつと………もつと速く！）

徐々にスピードが上がっていき最早目では追えないほど光速が闘技場内を駆け抜けていく。

アツシにとってベルはオラリオに流れ着いた自分に最初に手を差し伸べてくれた恩人の一人でもいつでもそばで戦ってくれる仲間あしぼうに対し4年間大事にしてきた彼の居場所

を守る力を彼に示そうとする。

『オルテナウス霊基外骨髄』、オールグリーン。』

「白兵戦でも私は皆さんには負けません！」

マシユは自らの装備を変化させる。

盾がパイルバンカーのように背中にスラスタのようなものがつきまると今にも飛び出すかのように出力を上げている。

「アコンブリッシュ・メジャー刻寿測定針、測定開始！ブラックバレル逆説構造体、形成します！デッドカウンダー生命距離弾、砲身に焼き付け！——セツト接続完了。デッドカウンダー生命距離弾、逆説から真説へ。霊子チャンバーに令呪装填！バレルレ

プリカ、フルトランス……」（ヒロイックベイス討ち滅ぼす力……本来の私の力とは真逆の力……でも私はこの力で証明する……私も『英雄の雛』の一員だという事を！）

マシユにとつてベルはマスターであり自分を導いてくれる仲間みちしるべ、彼が4年前に示した英雄としての在り方に応えるためマシユは借り物ではない自身の力を見せようとする。

「なら僕も見せるよ……」アルゴブック顕現せよ英雄図鑑」

ベルが魔法で英雄図鑑を出す。

「あの4人の技を相殺するにはこれしかない……50ページ目。」

『Number 50 Master ASIA TOHOUFUHAI Actua

1』

英雄図鑑のページが開くとベルの髪が伸びて弁髪のように束ねられベルの雰囲気がるまるで歴戦の武術家のようになる。

「行くぞ！流派東方不敗が最終奥義！」

ベルの手から大きな気力弾ができあがる。

（皆強くなってる……………なら僕も見せてあげるよ……………英雄図鑑が見せた英雄たちに鍛えられた僕の力を……………）

ベルが寝てた4年間、かつてパーティーを組んでいた仲間全員が強くなっている事を肌で感じながら英雄図鑑アルゴブックに宿る英雄の力の中でも自身の力が大きく作用する英雄の大技を放とうとする。自らの力を再び仲間メンバーを証明するために……………

観客席のヘステイアファミリア陣営

「アイツら……………全開で大技を放つつもりか!？」

「パスカル殿、闘技場の耐久性に問題はないのか?」

直継がベル達5人が大技を放つことに驚愕し、アカツキは闘技場の耐久力を心配す

る。

「大丈夫だよ。この屋敷をリフォームする時多くのメンバーが闘技場を希望してたからその面々の大技にも耐えられるように設計したからね。それこそトリコの∞釘パンチやナノハのスターライトブレイカー、ツナのXXXBURNERでも耐えきれよ。」

「高火力の面々の名前出されたら大丈夫か……」

「そんなことで納得しないでよ直継。それに闘技場の費用はフィッツジェラルド商会がいくつの中堅ファミリアに渡してた賄賂から捻出したからこの屋敷を建てたけどそのせいでほとんど資金が残らなかつたからね。」

「そうですよ！だからあの頃私達のファミリアにかなり無茶な強制任務が回されたり他のファミリアからの依頼とかも積極的に受けて資金稼ぎしてたんですよ！なのにパスカル様やリタ様が毎回毎回費用の6割を研究費用に持っていくんですからこっちは迷惑してるんですよ！」

ヘステリアファミリアの書類仕事を引き受けているシロエとファミリアの財布を預かっているリリが講義する。

「にやはははは……」( ; ) ^ A

「笑い事じゃないですよパスカルさん。僕もシロエさんと一緒に書類の処理してるんです分かりますが貴方方は研究にお金を懸けすぎなんです。もう少し自重してください。」

さらにヒューバートが小言を言う。

「ええー、いいじゃないヒューバートくん。それにヒューバートくんだってあたしの研究に協力してくれてるじゃん。それこそメカベルのモーシヨンキャプチャーに乗り気だったじゃん。」

「「……………」」

「……………」

パスカル以外の4人の視線がヒューバートに突き刺さる。

「何でばらすんですかパスカルさん！」

「だって本当の事じゃん。」

「まあしようがないんじゃないかな。」

「それは仕方ないと思うぞ。」

「ヒューバート様はパスカル様に弱いですからね。」

「まあ惚れた弱みって奴だな。」

「(／＼)」

4人の追撃に顔を赤くするヒューバート。

同じ頃観客席の他のファミリア陣営

ロキファミリアの面々はベル達の模擬戦を見ていて

「あれがああのウサギ野郎かよ……………」

「す……い！」

「こらテイオナ！落ち着きなさい！」

「私より年下なのにあの実力……………」

「あれがヘスティアファミリアの団長ベル・クラネルだよ。」

「あやつが最初に出てきたときは驚いたのお。何せあの頃はアイズよりも小さい子供じゃったからの。」

「最初私は眼を疑ったよ。だがあのファミリアには当時から最強ともくされる実力者だったエミヤヤトリコ、ユキチ殿も居たのにベルは常に成長し続け4年前昏睡状態になるまでは新たな英雄候補として名を馳せてたからな。」

「ほんつつすよね。俺もベルが小さい時に一緒にパーティ組ませてもらったんつつすけどベルの成長速度は本当に舌を巻くほどでしたつつすからね。」

「私も思った。アイツ本当に同じ冒険者かと疑ったよ。アイツ冒険者になって2年間で

「一気にレベル4まで駆け上がったんだけどな。」

「マジかよ……………」

「「嘘でしょ!?!」」

アキの言葉に驚くベート達。

「本当だよ。……………だからこそあの時門番がやらかした事には本当に頭にきてるんだけどね……………」(#。D。)

「「本当にな……………」」(#。D。)

フィン達のかめかみに怒りの色が浮かびテイオネ達が少し後ずさる。

「ウチもその事聞いたらはらわた煮えくりかえるところだったわ。そのお陰で最強の戦力を手に入れるチャンスを手振ったんだから。」

「それってどういう事?」

「6年程前にベルはエミヤと一緒にオラリオに来て探索系のファミリアに入団しようとしてたんだが当時のベルの年齢からしてほとんどのファミリアから門前払いを喰らったらしくてね。その中には僕達のファミリアもあつたらしくてね。彼を門前払いした門番は後日その事実を知った後クビにしたけどその事が原因でエミヤにはいまだに警戒されてるんだよ。」

「おまけにベルのあるスキルはとでもレアで英雄と呼ばれる者を引き寄せる能力がある



んだ。それでヘステイアファミリアにはユキチ殿やトリコ、ユーリら等英雄と呼ばれるに値する実力者が集まってくるんだ。だからわざわざ6年でヘステイアファミリアは我々ロキファミリアやオツタル達フレイヤファミリアを抑えてオラリオ最強のファミリアになったからな。」

「特にユキチ殿やエミヤ、トリコの3人はヘステイアファミリアの三傑で対抗できる冒険者はオツタルとフレイヤファミリアの『フォー・フォースメン死 四 天』を除けば誰もいないのが現状じゃ。それだけ個々の強さもつば抜けているが何より集団戦闘においては抜群の連携力を持っているのがヘステイアファミリアの特徴でもあるがの。」

フィン達が語るヘステイアファミリア評に他の団員も聞き入る中

「…………ツナもナノハもずるい…………やっぱ私も戦いたかった…………」

「そう言えばアイズが一番ベルとエミヤのコンビと一緒にダンジョンに潜っていたか。そう言えばベル達と関わるきっかけもアイズだったな。」

「たしかベルがオラリオで迷子になったのをアイズが拾ってホームにかくまったのが原因でエミヤが本気で激怒して私達三人を相手に圧倒したからな。まああの時ベルがりなしてくれなかったら間違いないで死んでいただろう。」

「全くじゃ。わしもあの時ほんとに死ぬかと思ったからのお。」

「ウチも思ったわ。ほんとにベルたんには感謝や。」

一方アストレアファミリアの面々は

「やっぱリベル君は凄いな。4年間のブランクを全然感じさせないわね。」

「そうね。だからこそあの時助けてくれたことに感謝しないとね。」

「そうですね。私としては個人的にもベルには感謝してます。」

「そう言えばリユーがあの時最前線にいたもんね。」

するとアルトリアが弁当を食べる手を止める。

「あの時私はアストレアの護衛で遠征に参加してなかったんですが聞いた時はアイリス  
フィールと共に心臓が止まるかと思いましたよ。」

「そうね。私も生きた心地がしなかったわ。本当にあの時ベル達『英雄の雛』がいなかつ  
たら私の眷属達は皆無事に帰ってこなかったわ。そういった意味では本当にベル達に  
は感謝しかないわね。」

「その後ヘスティアファミリア総出で闇派閥の残党の殲滅作戦を決行した時我々は参加  
させてもらえなかったですがあの時アイリスフィールを通じてキリツグが極秘裏に  
闇派閥の神々を一人残らず消していったそうですしね。」

「そう言えばキリツグって今何してるの?」

「私の聞いた話ではギルドの秘密職員として働いているとか……まああくまで噂です  
が」

そう談義するアリーゼ達。

「そう言えば4年前の一件でアイリスフィールは引退しましたが2年前に彼女の娘が我々の下で冒険者になりましたね。」

すると

「アストレア様。どうかしましたか？」

「いいえ、何でもないわよイリヤ。」

アストレアファミアリアのレベル2であるイリヤスフィールはアストレア達の話聞きながら興味深く闘技場を見ていた。

「あれがヘスティアファミアリア団長……………母様やキリツグが言ってた……………」

「イリヤ、どうしたのですか？」

「アルトリア、どうしても気になってるのよ。」

「とうとう？」

「あんな凄い人が4年間も眠ったままだったのにどうして今日覚めたのかなってイリヤの疑問は尽きない。」

その傍では

「あのウサギく、ナノハを傷つけたら私の手で切り刻んで……………」

「あのおーアリーゼ、輝夜、リユウ。フェイトが怒り心頭でどうすればいい？」

フエイトが手すりを握り壊さんぐらいの勢いで怒っているのを同じくアストレア  
ファミリアのレベル3の狼人アルフが困惑しながら団長たちに助けを求めた。

再び闘技場にて

それぞれ大技を繰り出そうとする5人。

「いくぞ皆！X<sup>イクス</sup> B U R N E R<sup>バーナー</sup> A I R<sup>エア</sup>！」

「全力全壊！エクセリオンバスター！」

「はああああああ！」

「ブラックバレル！」

「石破天驚拳！」

繰り出された技は闘技場の中央で炸裂し強烈な爆風となって観客席にも届くほどの  
衝撃を与える。

が  
ただし衝撃は闘技場に設置された結界に阻まれて観客席に直接届くことはなかった

「やれやれ。だから僕が審判に抜擢されたって訳か……異能力『人間失格』！」

審判役のオサムは手をかざすとオサムの方に向かってくる衝撃波が一瞬で消えてしまふ。

それでも

「つーツナ君やナノハちゃんの技はある意味異能だから防げるしアツシ君は飛び道具が無いから防ぐ分には問題ないけどやつぱりベル君の英雄<sup>アルゴブツク</sup>鑑の力やマシユちゃんのパイルバンカーは防ぎようがないんだよね……」

『ファミリア内序列9位なのに泣き言言わないで下さい。』

『君の身体能力は充分常人離れしてるから大丈夫だぞ。』

解説席にいる同じファミリアの二人にツッコまれるオサム。

一方爆風が収まり闘技場が静まり返る中

「光竜、千手百花！」

ベルが白塗りの光るロングナイフをかざしまるで千本の矢を放るるように光弾を放つ。

その一瞬の隙を突かれナノハ、アツシ、マシユに矢が命中する。

「ぐあああー！」

「きやあああー！」

しかしツナだけはまるで予知していたかのようにベルの後ろに回り込む。

「ビッグバンアクセル！」

「雷龍、金剛雷壁！」

ツナの拳をベルは帯電するロングナイフが生み出した雷の壁で防ぐ。

「はああああああ！」

「!？」

「もらった！」

「ふっ。」

「!？」

しかしツナはその壁をまるで浄化するようにぶち破りベルに拳を叩き込んだ……………  
かに見えたが拳が届く寸前でベルがまるで霧のように消える。

「しまった!?! 龍刃六爪劍の合奏 双竜か!?!」  
シンメトリカルドッキング

ミラージュラグーン  
「幻 竜・朧月。」

ベルがツナの背後にしゃがみながら現れると光速で動く多くの斬撃がツナに叩き込まれた。

「うわあああああ！」

ツナが倒れたと同時に闘技場で立っていたのはベル一人だった。

「そこまで！ 模擬戦の勝者はベル・クラネル！」

審判であるオサムの宣言と共に模擬戦はベルの勝利に終わった。

模擬戦後、観客席では

「流石だなベル。やはり夢の中でも鍛錬を怠っていないかったな。」

「十代目、惜しかったっすね。」

「アツシはよく頑張った。」

「ナノハちゃんもホンマにいい戦いっぷりやったで。」

「マシユもオルテナウスをしっかりと使いこなせるようになったな。」

模擬戦を終えた5人にヘスティアファミリアの面々だけでなく他のファミリアの面々の歩み寄り称賛していた。

特に

「ねえねえアルゴノオト君、今度は私と戦つてよ。」

「そういう事なら次は手前と勝負しないか？」

「待てよ。それなら次は私とやろうぜ。」

ティオナと椿、それとヴィータが名乗りを上げてた。  
 なので……………

「こらティオナ、自重しなさい！」

「椿、少し落ちつけよ。」

「もうヴィータつたら無理言うたらあかんよ。」

三人ともそれぞれ保護者おももりに連れていかれる。

「あつはははははは」( ; ; ) ^ A

「あいつらは……………」(—ω—;) ウーン

そんな中……………

「おーい、皆。客が来てるんだが？」

ヘスティアファミリアのレベル5で召喚術士サモナー、チーム『記録の地平線ログ・ホライズン』のシロエの妹

ロエ2がやって来た。

「どうしたんだロエ2？」

「おお兄よ。実はな。ベルの見舞いと言ってフレイヤファミリアの使いが来ているんだが？」

「「「フレイヤファミリア!」」」

「なんでアイツらが?というか誰が来た? 『女神の戦車ヴァナ・フレイヤ』か 『黒妖の魔剣ダインスレイフ』なら丁重にお



「断りしろよ。」

「いやそれがな。」

すると

「いやいや失礼。何分ここに来るからには警戒するに越したことはありませんからね。」

ロエ2の隣に現れた黒い帽子にラテックスの手袋をした黒衣の男が柔らかい口調で話す。

「まさかお前が来るとはな。まさか私達と殺し合いしに来たかと思つたぜ。」

「フフフ。そうならばどうするつもりですか？ 私と一対一で戦いますか？

『無限の剣製』？」

「今日はベルの快気祝いパーティーだ。そういう物騒な事は止そう。」

「ええ。いいですとも。私も無粋な真似はしたくありませんし」

「そう言ってくれるとありがたい。なあ『ドクタージャツカル』」

「ええ。………さてと」

すると男がいつの間にかベルの前に立ち

「ご回復、お祝い申し上げますベル君。」

「ええありがとうございます赤屍さん。」

するとベルの隣にいたアツシが震えていた。

「アツシ君もお元気そうで何よりですね♪」

「え、ええ……………赤屍さんもおかわりなく」

「そう言えば模擬戦をしていたとか……………早く来ていれば私も参加できてたのではと

……………いやあく残念ではありませんよ♪」

「ひい!？」

「アツシ……………まだ赤屍さんがトラウマなの？」

「いい加減克服したらどうですか？」

「どうかアツシ君は何で『黒<sup>ブラック</sup>獣<sup>ビースト</sup>』や赤屍さんみたいばヤバい人に目を付けられるのか

な?..かな?..」

「……………ドクタージャツカル、アツシに何かしたら許さない……………」

「安心してください『夜叉<sup>スノー</sup>白雪<sup>ホワイト</sup>』。彼を本気で殺すならこんな公衆の面前で戦いません

よ。それに私は自分の100%を知らない。それを引き出す可能性がある相手とは然るべき場所ですかるべき時に戦いたいですからね。」

「……………分かった……………」

「……………」( ; ) □ ( ) ( ) ガクガクブルブル

( ( ( 本<sup>本</sup>当<sup>当</sup>に<sup>に</sup>物<sup>物</sup>騒<sup>騒</sup>な<sup>な</sup>人<sup>人</sup>に<sup>に</sup>好<sup>好</sup>か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>な…………… ) ) )

鏡花と赤屍の会話が物騒すぎてアツシは身を震わせ、ベル達4人はアツシに同情し

た。

フレイヤファミリア<sup>ホー</sup>本拠地<sup>ム</sup>戦いの野<sup>フオールクウアンク</sup>

「ねえオツタル、ついに彼が目覚めたわね。」

「……………では」

「それはまだよ。何せ彼の周りには目障りなのが多い。……………忌々しいわ。『贗作者』<sup>フエイカー</sup>め。」

「奴はいずれ自分が……………」

「まあいいわ。でもその時には貴方達にも働いてもらうわね。」

フレイヤとオツタルの後ろで円卓の椅子に座る3人の男たち。

「けっ！俺はボンゴレ最強の座があればいいだけだ。アンタに従う気はねえよ！」

「貴様！フレイヤ様に対し」

「止めろアレン。お前では『憤怒の炎』<sup>カースフレア</sup>に勝てない。」

「ふん！」

そつぽを向くアレン。

「まあまあアレン君も落ち着きなよ。私はフレイヤちゃんが入ったから協力してるだけだしね。」

「はあ（\*、旦那）……………『ドリームチェイサー夢追い人』、貴方のその態度を我が女神は問題視してないからいいんですが少しは敬語というモノを……………」

「止めるよヘディン、カナミはこういう性格だ……………」（\*、旦那）  
「お前も苦労してるなレオナルド……………」

カエルみたいなスーツを着た男レオナルドと一緒にため息を吐くヘディン。

「いいですね。私としてはいずれ果たすべき野望……………世界征服の第一歩に相応しい舞台ですねフレイヤ殿。」

「おおお流石『マッドサイエンティスト狂気の科学者』殿、では俺もその計画に囁かせてもらおう。さすれば世界をフレイヤ様の」

「「「黙れ中二病ども！」」」

ガリバー兄弟にツッコまれるヘグニと白衣を着た男。

「そう言えばドクタージャツカルは？」

「彼には快気祝いでヘステイアファミリアに向いてるわ。まあ彼が私の眷属になったのは過程を楽しみたいって言う理由だけどね。」

「あの男はむしろ今の状態で繋ぎとめるのが得策かと……………」  
「そうね。むしろ今の戦力でヘステイアファミアリアに対抗するには正直心細いわね。あの三傑にアインス、『凛々の明星』、『記録の地平線』……………そして『英雄の雛』がいるならこっちもそれ相応の準備がいるわね。」

女神は嗤う……………己が願いを叶えるために……………

## 小話 part 1

《剣士たちの会合》

模擬戦後のテラスで

「そう言えばユキチよ。これ渡しとく。」

村正がユキチに包みを渡す。

「アンタの刀だ。綺麗に手入れしておいた。」

「ああ、ありがとう。」

「しかしアンタの刀はいつ見ても綺麗な波紋だ。儂の刀であれだけ使いこなしてしかも刃こぼれ一つ無いのはアンタと時雨ぐらいじゃ。」

「お褒めいただき光荣だ。」

そんな二人に近づくのは

「ユキチ殿、明日是非とも手合わせ願いたい。」

「それなら是非私も御指南願いたい。」

シグナムとタケミカツチファミリアのヤマト・命だ。

「まあ明日は暇だし良いだろう。」

「おう。なら儂も付き合うかな。刀の仕上りには満足してるがやはり持ち主が確かめるのが一番だろう。」

「感謝する。」

「ありがとうございます。」

二人が礼を言うのと

「なる俺も参加していいか？」

「恭也殿も参加されるのか？」

「冒険者としてナノハに先を越されたからな。俺も高みを目指さんと妹に申し訳が立たんしな。」

「恭ちゃんとは相変わらずシスコンね。まあ私もナノハに負けてられないしね。」

「恭也殿もミュキ殿も十分強いじゃないですか。それこそ我々のファミリアに士郎殿が指南役として来てくれてその上お二人も私達のファミリアに入ってくださいました。お陰で私達のファミリアはオラリオでもそこそこ力のあるファミリアになったんです。」

「ありがとな。」

「ありがとう。」

恭也・F・高町とミュキ・高町、お互いタケミカツチファミリアのレベル4の剣士で

ナノハの兄と姉である。

ちなみに父親はかつてオラリオ外の有力ファミリアに所属してた経歴を持つ元冒険者で今はオラリオの旧ヘステイアファミリア本拠地<sup>ホトム</sup>だった教会を改修した喫茶翠屋のマスターである。

なお教会を破壊したであろう元アポロンファミリアの男どもはファミリア壊滅後ある日の静寂な夜に一人残らず男<sup>ス</sup>として人生終了<sup>マツ</sup>されたとか……

《ヘステイアファミリアの厨房》

ヘステイアファミリアの本拠地<sup>ホトム</sup>『聖火の窯』にはいくつか重要な場所がある。

その一つが副長であるエミヤと料理長であるコマツ、執事兼副料理長のにゃん太の聖域と言ってもいい場所、厨房である。

この場所、彼ら3人以外の団員も調理する分には問題は無いのだが、ただ一人……この厨房に入ることを禁じられた者がいる。

「あ〜ん♪簡単なモノならいいでしょ!？」



「ダメですよ！にやん太さんからここには入れてはいけないって言われてるんです！」  
 シヤマルが厨房に入ろうとするのをセララが扉の前で防いでいた。

「いいじゃねえか料理ぐらいさせたって」

するとゴクデラがシヤマルに助け舟を出そうとするが

「だからダメですつて!?!以前シヤマルさんの料理でクー・フリーンさんが腹下して三日三晩寝込んだんですよ！それにシヤマルさんの料理はヘステイアファミリアでは第一級危険物質扱いに指定されてるんですよ！」

「!?!」

その時ゴクデラの頭の中で過去の記憶がよみがえった。

♪くいつの事だったでしょ♪思いでしてボイスノックキングやくらん♪ あんな事♪ピアノキのことこんな事♪

あつたでしょ♪

「ギヤアアアアアア！」

「どつどつどうしたんですか!?!」( ; ㇿ )

人は時として忘れられた過去の惨劇(笑)がふとした拍子に蘇ることがある……………

《ダンディーな大人とダメな大人》

宴会はかなり盛り上がっていた。

そんな中、静かにゆったりとテラスの方で景色を眺めながら酒をたしなむ二人の男  
 ……

「いやあくいい夜風ですニヤ。」

「そうだな。こういう日に見る月は最高だな。」

にやんとマリク、ヘステイアファミリアの中でも年長者である二人がテラスの柵に肘を掛けながらグラス片手に並んでいる後姿は絵になるだろう。

そしてそんな背中姿を見て憧れるのは

「班長はやはりクールなお方だな。」

「マリク師匠もかっこいい。」

『小さなワンコ』のトウヤとルデイが遠目から二人を眺めていた。

「あれが大人の男って奴だよ。」

「ユーリ兄は混ざらないの？」

「俺は良いんだよ。あんなダンディーは俺の柄じゃないしな。」

ユーリも話に加わる。

「Mrユーリもあの二人と並んでも十分クールだと思うが？」

「いやあの二人のようなオーバー30じゃないと霞むんだよ。」

「でもさあオーバー30でもあんな大人にはなりたくないよな。」

トウヤが指さす方を見てみると

「おっさんもう駄目……………」Ω\&。チーン

「おいおいレイブンよ。お猪口一杯で酔うなんて弱すぎじやろうが」

「まったくだ。余がせっかく仕入れてきた美酒をたった一杯だけで倒れるとは……………情

けない。」（\*、旦、）

「もうレイブンの奴はほつといて酒盛りの続きといこうかの。」

そのすぐ隣では

「エリスちゃん。ほらシユークリームだよ。」

「もうリンタロウ！私が自分でとるから邪魔しないで！」

イスカンドルとガレスに酔い潰されたレイブンおっさんと幼女に構うオウガイおっさんを見て

「確かにあんなオッサンにはなりたくねえわな。」

「激しく同意。」

《アームレスリング》

とある宴会の席で

「腕相撲なんて中々面白いじゃねえか。」

「私は初めてなの。」

ベートがかつて投げ飛ばされたりベンジをしようとナノハに勝負を仕掛けた……  
が流石に戦闘はフィンが止めたので勝負はアームレスリングとなった。

「では審判は俺がやるぞ。」

「さっさと始めようぜ。」

「よろしくお願いしますな。トリコさん。」

その様子を見ているのは

「ベート、負けたら承知しないわよ!」

「ナノハちゃんケガさせたらダメだよ!」

「あのクソ狼……後で裏庭でシメてやる……」

「アリーゼ! フェイトの目が殺し屋みたいになってるんだけどどうしたらいい!」

ベートにヤジを飛ばすアマゾネスの双子とナノハのセコムであるフェイト、そのフェ

イトの暴走にてんやわんやしているアルフ。

「それじゃ始めるぞ。」

「頑張るの！」

(アイツは魔術師だ。腕力なら俺の方が上……………楽勝だぜ。)

「二人とも力を抜いて……………レディー……………ゴー！」

ドゴオオオオオン！

轟音と共に決着がつく。

(……………おい……………俺は一体……………何を相手にしていた……………)(；。∩。∩)

ベートの目に映ったのはまるで獣のような眼をしたナノハが……………

つまりベートはリベンジするはずが一瞬のうちに返り討ちされたのだ。

「流石ナノハ。」

「アタシもびつくりだよ。」

「何なのあの娘、あんな力を秘めていたの？」

「すごい。じゃ次は私が」

外野が騒然とする中ティオナが次の対戦相手に立候補しようとするが

「いや……………ここは俺が相手をしよう。」

トリコが腕まくりして立候補した。

という訳で……………

アームレスリング第二回戦はナノハ対トリコとなったが

「うわぁー、体格差が凄いの！というかトリコさんの手、岩みたいに硬いの！これ勝てる気しないの！」

「絵面で言えば大人対子供ね。」

「これは流石にトリコが勝つでしょ。」

「ナノハ……………負けても私が敵討ちして……………」

「いや、絶対無理だよフェイト……………」

まあ勝敗予想もない訳だが

「いや、この勝負分からねえぞ……………」

ベートが真剣な表情で勝負の成り行きを見ていた。

「では審判は僕がやるね。」

フィンが審判を買って出た。

「では力を抜いて、レディー……………ゴー！」

「ふうううんぬ！」

ナノハが力を込めるが

「成長したなナノハ。なればこそ、俺も見せよう……………人間の力を……………」

トリコの腕が徐々に膨れ上がり段々ナノハが押されていく。

そして……………

「にやあああああ！」

ドゴオオオオオオン！

「ごちそうさまでした。」

トリコが勝った。

「やっぱりトリコさんは強かったの。」

「でも惜しかったね。もしかしたら勝てるかもしれないと思ったし」

ナノハの健闘を称える面々。

その一方でトリコは

「……………」

「どうだった？4年間鍛え上げた弟子の成長は？」

「ああ。前よりも強くなってるぜ。4年前に接近戦でも負けないようにしてほしいって懇願してきたあの少女が今では立派な高火力砲撃魔法の使い手だからな。」

「私やお前がとことん付き合って鍛え上げたからな。並の相手じゃまず負けないだろうな。」

ベルが昏睡状態になってからの4年間ナノハはトリコとスタージンを師事し砲撃

だけでなく近接格闘戦にも対応できる柔軟さを身につけたのだ。

……しかしお陰で筋力はドワーフ並みに強くなったが……

《魔王違い？》

「うむ。美味だな。」

「C・C、ピザばかり食べるな。ていうか寝ながら食事するな。」

ソファーで横になりながらピザを食べてるC・Cにルルが小言を言う。

「うるさいなルル。お前は私の小姑か？」

「何年お前と一緒に行動していると思ってる。お前のその怠惰な姿勢を何百回も見てるんだ。小言の一つや二つは出てくる。」

「まあまあ、ルル様もC・C様も今日は宴の席ですし」

「……………」(く、く) モグモグ

「たしかにな。すまんなジェレミア。」

「いえ。このジェレミア・ゴッドバルト、我が魔王の為ならば何時でもはせ参じます。」



ルルとC<sup>シューツ</sup>・C<sup>シューツ</sup>の間を取り持っているのはデメテルファミリア所属のレベル4ジエミア・ゴツバルト。

そしてその傍でケーキを食べているのは同じくデメテルファミリア所属のレベル3アーニヤ・アールストレイム。

「それよりもどうですかそのオレンジジュースは。私が栽培したオレンジの果汁100%でできてます。」

「ああ美味しい。お前にこんな才能があるとは思わなかったよ。」

「光栄の極み！」

すると4人に近づく一人のエルフが

「我が魔王よ。我がファミリアが作ったワインです。どうぞお納めください。」

彼女はディオニュソスファミリアの団長であるフィルヴィス・シャリア。

何故か彼女はルルの事を魔王と呼んで忠誠を誓っているのだが

「来たかストーリーカーエルフ。我が主であるルル様に付きまとうのは止めてもらいたいな。」

「何を言うかオレンジ野郎。お前こそ我が魔王の側近面するのは止めてもらおうか。」

「あああん！」

お互いにメンチを切り合う二人。

「お二人とも仲良しさんですね。」

そうほのぼのと語るのは、テメテルファミリア所属のレベル3ケンジ・ミヤザワだ。

「ぷぷぷ、確かにな。」(？m？〴〵)ぷぷぷっ！

「笑うなC・C。」

「ではこうしよう。お前たち、この魔王様に相応しい口上を披露してそれで決めようではないか。」

「おいC・C。それってどうやって勝敗をつけ」

「じゃあ最初はジエレミアからだ。」

「オイ！」(#。D。)

ルルを無視して変な勝負が始まった。

「控えおろう！この方を誰と心得る！ヘスティアファミリアの軍神、『鎮魂の魔王』の二つ名を持つ鬼オルル・B・ランペルージ様なるぞ！」

「それ水戸〇門だろうが！」(#。D。)

次はフィルヴィスの番だ。

「祝え！かの大陸の全ての憎しみを背負いながらも世界に生かされた偉大なる魔王！彼こそ鎮魂歌を奏でる者。その名は『鎮魂の魔王』ルル・B・ランペルージ！まさに降臨の瞬間である！」

「おい！それは違う魔王の口上だろ！」（#。D。）

「ぷっはははははははははは！」（笑）

「……………」（くくく）モグモグ

「へえ〜都会の人ってそんなかつこいいセリフがついているんですね〜。」  
ルルは頭痛を抑えるようにこめかみをぐりぐりする。

### 《着せ替え人形》

パーティーも盛り上がってきた頃、

「ベル、ボクが作ったオルゴールはどうだい？」

「ありがとうカロル。」

「へへ。ベルが好きだった歌をオルゴールにしたのは正解だったね。」

そう言っているとカロルの後ろに

「のおカエルよ。余のためにドレスを着るがよい。」

ネロがドレスを持って現れた。

「嫌だよ！なんでドレスなんて着なきゃいけないのさ!？」

「余興だ！余を楽しませい。」

「そうですよ。カロル。きつと似合いますよ。」

「なんでエステルもいるのさ!？」

そんなこんなであつという間に着せ替えさせられ……

「……………」(／ω＼)

「似合っておるではないか。」

「よくお似合いです。」

「うわあああああん。何でこんなことに!？」(つД(エーン

カロルが泣きながら逃げ出した。

「流石にカロルが可哀そうですよ。」

するとベルの背後にアイズが立ち

「ベルもドレスが似合うよ。」

「え!？」

「ほほう。」

そしてベルも着せ替えられ……

「……………」(／ω＼)

「たしかにウサギも似合っておるの。」

「これは盲点でした。」

「小さい頃は良く着せていた。」

「うわあああああ。何で僕まで!？」（つム） エーン

ベルも泣きながら逃げ出した。

それを見ていたツナが

「二人とも可哀そう……………」

しかし二度あることは三度あるという事で

「そう言えば小動物もドレスが似合いそうだね。」

「ほほう。」

雲雀がぼそりと言ったことを某ロー○皇帝と某帝国姫君が聞き逃すことはなく

「……………」（ム）

「子ライオンも似合っておるな。」

「いいですね。」

「うわあああああ。俺まで何で巻き込まれるの!？」（つム） エーン

ツナも泣きながら逃げ出した。

そんな三人に助け舟が……………」

「大丈夫ですか三人とも。」

「「ツヴァイさん助けて」」

彼女はヘスティアファミリアのレベル4でチーム『夜天』のメンバーの一人であるツヴァイ・リインフォースだ。

「そうですね。お三方、コレも付けるべきです。」

彼女が持っていたのは猫耳とうさ耳カチューシャにカエルの被り物と猫の尻尾と兎の尻尾のアクセサリーだった。

「「……………」」（ω／＼）」

「やっぱりお三方はこの方がお似合いです。」

「「うわあああああん。ウチの女性陣が可笑しいよ!?!」」（つ㇏㇏）エーン

ヘスティアファミリアの女性陣はなかなかタフ（笑）である。

## 《総括》

パーティーが騒がしくなってきた頃、バルコニーではエミヤがワインを飲みながら物

思いに耽っていた。

「こらエミヤ君。パーティーそつちのけで何してるんだい。」

ヘステイアが傍までやって来る。

「エミヤ、貴方が何を考えているかは分かりませんが仮にもファミリアの副団長ですからそれらしい行動を」

そうエミヤに諭すのはジャンヌだ。

「別に仕事を放棄した訳じゃない。少し考え事をしていただけだ。」

「考え事？」

そう言つてエミヤがパーティー会場を見る。

ベルが楽しそうに笑う姿を見て微笑むエミヤ。

「最初はただベルの望むことをやらせてみたい。ただそれだけでオラリオで冒険者になったが……気がつけば多くの仲間に囲まれてその中心にベルがいる。4年前にもう叶わないと思つていた光景をもう一度見れると思わなかつたんでな。」

「たしかにね。でも今日の前に写る光景は現実だよエミヤ君。」

「そうですね。私もこの光景は懐かしいと思えます。」

三人がベルを中心に笑っている団員たちを見てなごんでいる。

「ベル君が昏睡状態になって他のファミリアから団員たちを引き抜く話が出てたけどエ

ミヤ君を始め皆出ていかなかった。ボクは嬉しかったよ。」

「当然だ。オラリオでベルを受け入れた最初の神であるアンタを裏切るなどベルを裏切るのと同義だ。そんな事は出来なかったよ。少なくとも私はね。」

「私もです。彼と会わなければあの教会で御祈りをささげることでもできなかったでしょう。それにアポロンの一件で教会をリフォーームできましたし、私としてはこのファミリアから別のファミリアに改宗することは全然考えられませんでしたしね。」

「ありがとう二人とも。それとベル君たちにも……………」

そう言って再びベル達を見ると

「二うわあああああん。ウチの女性陣が可笑しいよ!」(つ㇗㇗) エーン

「おい!それは違う魔王の口上だろ!」(#。㇗。)

「ぶっはははははははは!」(笑)

「にやあああああ!」

ドゴオオオオオオン!

「ごちそうさまでした。」

「エリスちゃん。ほらシュークリームだよ。」

「もうリンタロウ!私が自分でとるから邪魔しないで!」

「ギヤアアアアアア!」



「どっどどどうしたんですか!？」（；。 ㊦。）

周囲の騒がしさに思わず……………

「いやあく元気があつていいね。」

「そうだなヘステイア。」

「現実逃避しないで早く止めてください主神と副団長。」（\*。 ㊦。）

ヘステイアファミリアは今日も騒がしい一日を終えようとしている……………  
はてさて次はどんな事が起こるだろうか。

## 怪物祭騒乱

### 第8話

ヘステイアファミリア本拠地『聖火の窯』執務室

執務室で書類に目を通してサインしていくエミヤとシロエ、ルル。二人に書類を渡しているヒューバート。そして判を押しているヘステイア。

「うー、書類ばっか見ていると気が滅入るよ。」

「文句を言うなヘステイア。遠征中に溜まっていた書類はここ三日で終わつたし今日届いた書類や手紙は今俺とシロエ、ルルとヒューバートが仕分けしてるから変に難しい案件は省いている。」

「そう願うよ。」

「まあそれより急ぎの案件は主に三つだ。」

そう言つてエミヤは手紙を三つ、ヘステイアに渡す。

「内容は何だい?」

「まず一つ目はロゴグ湖のエリアスからだ。少女を一人、ウチのファミリアへ入団させたいと言つてきた。」

「へえ、あのエリアスが……それで少女って？」

「詳しいことは分からんがどうにもその少女……『夜の愛し仔』らしい。」

「また厄介な……」（—ω—；）ウーン

悩むヘステイア。

「二つ目はビーからだ。何でも……またあの爺さんが脱走したらしいんで見かけたら簧巻きにしてある程度ボコボコにしてオラリオの城壁に逆さづりにつるしておいてほしいそうだ。」

「後半物騒だね。」

「手紙のあて名はビーだが書いたのは十中八九あの女神様ほあきんだろ。あとがきに絶対ベルにはち会う前に殺れと明らかに隠す気なしで書いてあった。おまけにシズルとリノを怪物祭当日に送ると言ってた。多分ベルの様子を見に行くよう指示したんだろう。はあ、あの二人は過激だから困る……」（—ω—；）ウーン

「もういつその事オラリオに戻ってくればいいんじゃないかな？」

「そうなたら間違いなくウチのファミリア乗っ取られるぞ。」

「……そうだね……」（—ω—；）ウーン

こめかみをぐりぐりするヘステイア。

「そして三つ目、これが一番急を要する案件だ。アテナファミリアのクロノがラキア軍

部の動きを教えてください。近々奴らが戦争を仕掛けてくるだろう。まああのアレスの軍勢ではまったく話にならないし、唯一オラリオの冒険者と対抗できる奴らはアレスですら御せねえからな。……もつともミレデイ辺りが出たら間違いなくただじゃすまないだろうな……私達の平常心がな。」

「あー……彼女はウザイからね。あれで煽られたら誰だつて怒るよ。」

「それにアイツは間違いなく世界で三指に入る重力使いだからな。ますます厄介だ。」

今度はエミヤがこめかみをぐりぐりする。

「とりあえずシロエ。いつも通りラキアの進行をシュミレートして対策を考えろ。それもアレスの奴を神界送りにする。一歩手前になるまで完膚なきまでラキアを叩き潰すぞ。」

「了解だよ。面白くなってきたね。」（黒笑）

「俺も手伝おうシロエ。ラキア軍には絶望を叩き込んでやろうじゃないか。」（黒笑）

「私は団員たちの選抜をしてくる。奴らも暇を持て余しているしこの機会に暴れさせてやらんとな。」（黒笑）

（「うわー、悪い顔してるよ……」）

エミヤ達の悪い笑みに引きつるヘステシアとヒューバート。

ダンジョン第1階層

今日もダンジョンで探索していたベル。

今回の同行者は

「今日から团长殿も本格的に中層まで攻めるのだな。」

「私としてはもっと奥に行きたいけどな。」

「今回はベルの要望を通すんやからわがまま言うたらあかんよ。」

「リリとしては中層も十二分に危険なので注意してほしいんですが」

ハヤテとヴィータ、リリルカとヘスティアファミリアのレベル5でチーム『夜天』唯

一の男性メンバー『蒼き狼』ブルーウルフザフィーラだ。

「皆ありがとう。……………ん？」

ベルが第1階層でいくつかある檻の中にいるモンスターに気が付く。

「そう言えばもうそろそろ怪物祭ですね。」

「おう。また出店で美味しいモノ食えるのか。」

「そう言えば翠屋も特別営業するって話とったね。ナノハちゃんも当日手伝いって言う

てたね。私も当日手伝いしに行くしね。」

「そうでしたね。リリは当日コマツ様とにやん太様の手伝いで私達のファミリアも出店をすることになってます。」

「そうか………それなのに僕はその日完全休養だよ。なんかごめんね。」

「いいってベル君。ここの所毎日ダンジョン潜ってるし祭りの日ぐらいヘステイア様と一緒に祭りを楽しまなあかんよ。」

「そうですよ。(………何故リリじゃなくヘステイア様がベル様と付き添うのかが凄く不満ですが………) 祭りを楽しんでくださいいね。」

「なあリリ姉?なんかつぶやかなかったか?」

ガネーシャファミリア本拠地<sup>ホーム</sup>『アイアム・ガネーシャ』

「シャクティ団長、祭り当日の出店許可書はすべて発行で来たぞ。」

「ああありがとうクニキダ。すまん。当日もほとんど警備に出払って事務関連を全てお前に背負わせてしまうが」

「かまわん。その代わり普段事務をしないアーデイやイルタを当日まで事務に廻してくれて助かる。」

「うええええ。全然書類が減らないよ！」（つひ）エーン

「姉者よ。私もモンスター捕獲の方に回りたいのだが……………」

「何を言ってる。お前たちはここ数日の問題行動に対する反省文もまだ出してないんだ。それが終わるまではしばらく事務方だ。」

「そんな〜」Σ（？口？ー）ガーン

「言つとくがシャクティ団長に渡る前に俺が全てチェックするんだ！早く出せ！」

ガネーシャファミリアの事務を一手に引き受ける男ギン・クニキダは怒鳴り散らす。

「まあまあクニキダさん。落ち着きましょう。」

「すまないヒロツさん。オサムから解放されたと思つたら今度はこのファミリアだ……………正直こいつらはどれだけ俺の神経を逆なですれば気が済むんだっていうぐらいどうかしてるんだがな。シャクティ団長に誘われて入団した方がいいがまさかこれほどいい加減なファミリアだったとは……………」（\*、口、）

「いやいや。オサムさんに比べたらまだいい方ですよ。」

「だな。」

（（このファミリアの団員よりオサムの方が酷いってどんだけだよ……………））

「そう言えば、アクタガワの奴はどうした？」

「彼なら今ディアケンヒトファミリアの診療所の定期健診を受けてます。ヒグチも一緒です。」

「なら大丈夫か。あとは捕獲チームが無事に帰ってくるのを待つだけか……まあサニーやタニザキがいるなら問題ないか。」

「私の方からもタチハラとギンを同行させてます。ハシャーナ殿も居る事ですし問題ないでしょう。」

「そうだなヒロツさん。……さてさつさと仕事を終わらせよう。怪物祭期間中の街の警備に前日の神の宴の来賓の確認。やることは山ほどある。」

「そう言いながらクニキダの書類の処理スピードは緩むことはなかった。」

旧ヘステイアファミリア本拠地<sup>ホム</sup> 現翠屋オラリオ店

かつてヘステイアファミリアの本拠地<sup>ホム</sup>だった教会のあった場所は先のアポロンファミリアの襲撃でボロボロに破壊されたのだがヘステイアファミリア総出の残骸撤去作



業とゴブニョファミリアの復旧工事で前より快適な場所となった。

その一角にはかつての本拠地ホトだった教会を再建しそばにはナノハの両親の要望で喫茶店を新たに建築した。

その店『翠屋』は開店して早々オラリオでも人気のお店になった。

ハステイアフファミリアの支援を受けていることもそうだがオラリオ中の女神たちや女性冒険者たちから絶大な支持を受けている。

男性冒険者に人気の店が『豊穡の女主人』なら女性人気一位は『翠屋』である。

そこに一見不釣り合いな冒険者が

「シュークリームを30個。それと季節のフルーツケーキを2ホール頼む。」

「お買い上げありがとうございます。」

フレイヤファミリア団長にしてオラリオ内で最強の一角に数えられる男オツタルだ。

「やあオツタル。今日もフレイヤ様のお使いかい？」

「ああ。ここのシュークリームはフレイヤ様のお気に入りだからな。うちの女性陣も気に入ってるしハステイアフファミリアがメインスポンサーじゃなかったら我々が出資してもいいくらいだからな。」

「御鼻根にしてくださりありがとうございます。」

そう言ってケーキをシュークリームの入ったケースを持って店を出ていくオツタル。

「本当に『猛者』も来るんだ。」

「なんだか意外ね。」

「……………」

「そうなの。オツタルさんはこの店の常連さんなの。」

たまたま翠屋の併設カフェでスイーツを食べに来ていたティオナとティオネ、それとアイズの三人。それと店の手伝いをしているナノハが談笑していた。

「お母さんのシュークリームは絶品だからね。」

「たしかに美味しい。」

「これは本当に美味しいわね。」

「ナノハいいな。こんなスイーツ何時でも食べられるんだもん。羨ましい。」

そう言っていると

「ナノハ。このチーズケーキは何番の席？」

メイド服を着た鏡花がやって来た。

「それは18番のお客さんだよ。」

「ありがとう。」

「へえ、可愛いな。ねえナノハ。祭りが終わったらでいいんだけど私もここの制服着てみたい。」

「何言ってるのよティオナ！」

「だって可愛い服だし私も着てみたい。」

そう言いあっている

「皆さんどうしました？」

同じくメイド服を着ていたマシユがやって来た。

ティオナとティオネはマシユのある部分を見て……

「……………ちくしよー！」

（……………負けた……………）——？——〇

何処を見てこうなったかは推して知るべし……………

ダンジョン10階層

体長約3mのインファントドラゴンを軽々と運んでいる一人の男とその隣を歩く3人組。

「このインファントドラゴンは怪物祭の目玉になりますね。」

「さすがサニーさんですね。こんな大型のモンスター、無傷で捕獲できるのはウチのファミリアじゃサニーさんだけですからね。」

「多分アクタガワくんでも捕まえられるだろうけど彼の場合はやりすぎて倒しちゃう可能性がありますからね。」

「(＊・ω・)(＊—ω—)(＊・ω・)(＊—ω—)ウンウン♪」

「当然！この俺の華麗な技の前にこんなちんけなドラゴンなんて一突きでぐつすりだぜ。」

ガネーシャファミリアの冒険者でレベル6の『ヘアードモンスター長髪の怪物』サニーと同じくレベル3の冒険者『細雪』ジュンイチロー・タニザキ、レベル3のミチゾウ・タチハラとギンである。

「それでこのドラゴンの調教はどうするんですか？」

「ライブベアラーがやるそうさ。あの人ならこのドラゴンぐらい簡単に調理しそうだな。」

「……………調教じゃなくて？」

## 豊穰の女主人

「ベルさん。ご回復おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

ダンジョンからの帰りに同じく仕事帰りだったツナとアツシと一緒に豊穰の女主人にやって来たベル。

「今日はたんと喰いなよ。アンタんとこの料理人に負けないほど上手い料理食わせたあげるからね。」

「ありがとうございますミアさん。」

テーブルに料理が並ぶ。

「今日はいっぱい食べてくださいね。」

「いいから食べなさいよ!」

「精一杯おもてなしするよ。」

ベル達の相手をするのはシル・フローヴァ、ルーシー・モード・モンゴメリ、京子・S・ナツクル、豊穰の女主人内で何故か人気の従業員である。

「あつはい……………」( ; ) ^ ^ A

「ところで何故かここのお客さんたち、僕達を睨んでいるんだけど……………」( ; ) ^ ^ A

「僕達何かしましたか……」( ; ) ^ A

滅茶苦茶睨まれていた。

それはたぶん嫉妬です。

なんてこと言っている

「さあさあ。ベルさん、お飲み物お注ぎしますよ。」

「あの〜シルさん？近いです……」( ; ) ^ A

シルが思いつきりベルの傍まで来て飲み物を注ぐ。

「アンタも食べなさいよ。」

「君はなんでそんなに圧を掛けてくるの？」( ; ) ^ A

ルーシーがアツシの傍で悪態突きつつも大皿の料理を小皿に分けて渡す。

「ツナくん、楽しんでる？」

「うっうん。(京子ちゃんが近い！)」

京子が上目遣いでツナに語り掛ける。

普通ならご褒美と言つてもいいシチュエーションなのだが……

「ねえ？何でベル君がシルちゃんの手配を受けているのかな？かな？」

偶然にも翠屋の仕事が終わりベルと途中で分かれたりり達に合流したナノハがりりとハヤテを連れてやって来た。

「ベル様、少しは遠慮する努力をしてください!」

「そやね。ベル君はもうちよつと女性のお誘いに抵抗する術を身につけるべきやね。なんでエミヤはんはそれを教えへんかったのか理解に苦しむわ。」

「そうなの。どうせ晩ご飯を食べにいくなら翠屋のカフェを利用してほしかったの。」

(黒笑)

そう言うナノハの目は笑っていなかった。

そしてナノハの矛先はツナとアツシに向き

「ツナ君とアツシ君は何でベル君をこんなオオカミさんばかりの料理屋に連れてきたのかな? かな? ここは二人とじっくりOHANASHIする必要があるの。」

「何で僕達だけ!」( ; ; ㇿ )

何とも肌寒い夕食となった。

「あとでベル君はヘスティア様も交えてOHANASHIしようね。」(黒笑)

「あつ。結局僕もなんですわ……………」( ; ; | ^ A

## 第9話

ガネーシャファミアリア本拠地『アイアムガネーシャ』

怪物祭開幕の三日前、神の宴が催されオラリオ中の神が参加している。

その中には……

「いや〜久しぶりに神の宴に参加できたよ。」

「そう言えば貴方、ベルが昏睡状態になってからは神会以外の神の集まりには参加していなかったわね。」

ドレスを着たヘステイアとヘファイストスがシャンパン片手に会話している。

「まあ神の宴に出るよりはウチのコマツくんやにゃん太班長の料理の方が美味しいからあんまり宴に参加したくないんだよね。」

「たしかにあの二人に加えエミヤの料理は一度食べたら他の料理が美味しくなくなるのよね。だから班長やコマツにオラリオ中の料理人からひっきりなしにレシピ伝授の依頼が舞い込んでくるって話はよく聞くわね。」

そう言っていると

「やあヘステイアにヘファイストス。楽しんでますか？」



「アストレアも来ていたんだね。」

「ええ。怪物祭当日は私達も警備に駆り出されてるんで今回はその打ち合わせも兼ねてですが」

「そう言えばこの屋敷の警備にアストレアの眷属たちが居たわね。」

3人が仲睦まじく会話している姿を見て

「ロリ巨乳とゆるふわ女神と眼帯女神、キターコレ！」

「この3ショットだけで今日神の宴に来たかいがあったコレ！」

「そこにロキを加えてみよう。」

「……………胸の格差社会ww」

なんて男神達の笑い話が聞こえてくる。

ちなみにこの会話はばっちり某悪戯神に聞こえてたらしく

「あの野郎ども……………神会の名づけの時には盛大に痛めつけたる……………」(#。D。)

「あらあら、あの人達ったら今日はロキも参加しているのね……………」

「ロキ……………ステイ、ステイ。」

怒りに震えるロキをなだめるディオニュソスとデメテル。

ヘステイアファミリア本拠地<sup>ホー</sup>『聖火の窯』食堂

「今日はトリコが捕獲してコマツシエフが調理してくれたカドモスのローストですよ。」  
「美味しそうですね。」

「早く食べようよ。」

「……………いただきます！……………」

食堂ではみんながコマツが調理したカドモスを食べようとしている。

「流石トリコさんなの。トリコさんのスキル『美食屋<sup>グルメ</sup>』でモンスターを食材にできるから私達のファミリアだけでなくオラリオ中のファミリアの食糧問題を解決できたの。」

「そうやね。だからこんなに美味しい料理が食べられるのはホンマにうれしいわ。」

「だよね。コマツくんもだげどにやん太班長の料理も美味しいよね。」

「なんでいるんですかカナミさん……………」( ; ; ) A

食堂にはなぜかヘステイアファミリアと対立しているファミリアであるフレイヤファミリア所属のレベル6『夢追い人<sup>ドリームチェイサー</sup>』カナミが自分のチームメンバーを連れてやってくる時がある。

「シロくんはいいよね。こんな美味しい料理を毎日食べれるなんて、うちのコツペリア

も料理は得意だけどモンスターを調理できないしね。だから調理できる人の所でご相伴に預かるしかないじゃない。」

「貴方って人は………」（—ω—；）ウーン

「シロエ、諦めろ。カナミはそういう奴だ………」（\*； ㊦、）

「シロつち、この際カナミつちが来るのは当然と思つた方が苦勞せずに済むですニヤ。」

「なんかすまねえな。うちのカナミが………」（。 —人—。）ゴメンネ

「ちよつとケロナルド、それじゃ私が厄介ごと持つてきてるみたいじゃない！」、（、 ㊦

、）ノブンブン

（（自覚をもてよ！））

シロエと直繼、レオナルドは心の中でツッコんだ。

「そう言えばレオナルド、『ブルーブラッド尊き血族』はどうした？」

「エリアスか？ アイツはオツタルと赤屍の旦那と一緒にダンジョンに潜ってるよ。」

「何？ その最強の化け物3人のパーティーは？」（；； ㊦、）

「言つとくがあの三人にカナミと『カースフレア憤怒の炎』、『ボイスデリーバー轟音の死神』が組んだら本当に手が付け

られないからな。」（\*； ㊦、）

## ダンジョン第45階層

群がる岩石のモンスター相手にたった三人のパーティーが派手に暴れまくっていた。

「……………足りんな。」

「やれやれ、こんな相手じゃ遊びにもなりませんね。」

「もう少し下にもぐってみるか？」

フレイヤファミリア団長でレベル7のオツタルと赤屍、レベル6のエリアスⅡハック  
ブレードの蹂躞劇に同行していた『名も無き女神の遣い』ヘルンは思った・・・

(何でこの狂戦士二人と戦闘狂と一緒だにダンジョンに潜っちゃったのかな……………) (――)

――:) ウーン

翌日　ヘステイアファミリア本拠地『聖火の窯』

翌日聖火の窯に二人の冒険者がやって来た。

「いや、久しぶりだねエリアス君。それでその子が？」

「ああ、ボクの弟子になったチセだよ。」

「……………どうも。チセ・羽鳥です……………」

やって来たのはログ湖近くの丘に住むヘステイアファミリーアレベル6の魔法使いにして序列1位『影の茨』エリアス・エインズワースとその彼が最近弟子にした東方から来た少女チセ・羽鳥だ。

「この子が例の『夜の愛し仔』かい。まさかボクのファミリーに入ってくれるなんて感激だね。」

「……………あの、私は貴方のファミリーの一員になってもいいんでしょうか？」

チセがヘステイアに質問してくる。

「いいんだよ。ボクは歓迎するしボクの眷属たちも嬉しいからさ。それにしてもエリアスの弟子か……………」

「神ヘステイア、何か言いたそうだね。」

ヘステイアがチセの肩に手を乗せ

「チセ君、エリアス君になんか変な事されなかった？」

「神ヘステイア、君はボクの事を何だと思ってるんだい？」

「変な事……………」

チセが考え込む。

「チセ、チセ。そこは否定してくれないと」

「風呂に入る時に服を脱がされたりお嫁さんにすると言われるのは変な事でしょうか？」

その時周りの空気が止まった……………

「ふーん。」

ヘステイアがギギギギと首をエリアスに向ける。

「!?」

「ん。」

次の瞬間……………

「女の子に何てことしてるんだい！この骸骨！」

「ふっ！」

ヘステイアがドロップキックをエリアスに食らわせた。

「まあヘステイアの言い分も分かるな。」

二階から降りてきたエミヤ。

「歓迎するぞ。新たな仲間、チセ・羽鳥。私は副団長のエミヤだ。」

「ありがとうございます。……………あのくところで眷属になったら何かすることがあるの

でしようか?」

「基本的には無いな。半月に一回この街に来てステータスの更新するぐらいだ。それ以外は何をしてもいい。人道に反しなければな。」

「……………分かりました。……………あの〜ところでヘステイア様とエリアスはほつといっているのですか?」

チセに言われて二人の方を見たエミヤは

「この素っ頓狂! 女の子の服を剥くなんて非道なことしてただで済むと思ってるのかい!」(#。D)。

「そんなに降らないでくれないかな。酔いそうだ。」

ヘステイアに胸倉をつかまれブン振り回されてるエリアス。

「気にしなくていい。それよりヘステイアに恩恵を刻んでもらう前に私達の団長と仲間を紹介しておこう。とりあえず私はこの後ギルドに顔を出さないといけないから誰に案内を「なら俺がやりましょうか?」っていたのかコウスケ?」

「さつきからいましたよ。俺でよければ案内しますよ。」

「あの〜彼は?」

チセが驚いた表情でいきなり現れた男を見る。

「彼はコウスケ、ウチのファミリアでも屈指の実力者だ。二つ名は『深淵卿』アビスゲート」やめてエ

「ミヤさん!?俺をその名前で呼ばないで!」……………」

「……………変わった方なんですわね……………」

チセのコウスケを見る目が珍獣を見る目になっていた。

「まあ普段は屋敷で引きこもってるが実力だけで言えばウチの中で序列12位の凄腕だ。」

「……………」

チセの目が本当か?という目になった。

「やめて!そんな目で俺を見ないでくれ!」(\*ノωノ)

チセの中でこのフアミリア大丈夫か?という考えがよぎった。

『聖火の窯』闘技場

闘技場ではベルがトウヤ達『リトルドッグス小さなワンコ』と模擬戦をしていた。

「行くよ。顕現せよ英雄アルゴブック図鑑。ページ数は10ページだ。」

『Page 10 StarPlatinum Kujyou Jyoutarou A



『c t u a l』

ベルの頭が帽子が被さりどこからか出てきた学ランを着るベル。

「じゃー始めようか。」

そう言うのとベルの背後に拳闘士のような屈強な戦士が現れた。

「さあ行くぞ。オラオラオラオラオラ！」

ベルの背後の戦士が強烈な拳の連打がトウヤ達を襲う。

トウヤ達は懸命に拳を避ける。

「この連打スゲーー速い！」

「皆、相手の動きをよく見て！」

「こんなの………魔術師の僕に避けろっていうのか!？」

「速すぎです!？」

「これじゃ付与魔法エンチャントが追い付かない!？」

ベルの背後霊?のような戦士の攻撃を一生懸命避けるトウヤ達。

すると

「おーいベルくん、皆。一旦模擬戦止めてこっちに来て。」

コウスケがチセを連れてやって来る。

「あれ?コウスケ兄、2週間前の一件で引きこもってたんじゃないか?」

「あの件では本当に迷惑をかけたよ。でもこの通り元気になったよ。」

「ところでコウスケさん、そちらの女の子は？」

「彼女はチセ・羽鳥。エリアスさんが連れてきたウチの団員候補だよ。ベル君に挨拶しに連れてきたよ。」

「どうも……………ところで貴方が団長さん？私と同じぐらいの年齢……………」

「まあよく言われるよ……………」

ベルが少し落ち込んだ。

「……………あの……………なんかすみません。」（。―人―。）　ゴメンネ

「え〜とチセちゃんだっけ。気にしなくていいよ。あー見えてベル君は強いから。」

「そうだよMsチセ。彼は本当に強いんだ。」

「そうなんですか。」

するとベルが

「とりあえず、チセさんだっけ。ようこそヘステイアファミリアへ。」

ベルが手を出す。

「ありがとうございませすベルさん。でもチセでいいですよ。」

「……………分かったよチセ。ならチセも僕の事はベルと呼んでください。」

「はいベル。」

チセがベルと握手する。

その様子を見ていたのは

「どうやらチセ君はボク達のファミリアに馴染んでくれそうだ。」

「そうだな。それでエリアス、彼女の件だけじゃないだろ。何があつた？」

「そうだね。実は怪物祭モンスターファイリアに例の奴らが何か仕掛けてくる情報が入ってきたんだ。」

「という事は……荒れるな。」

「ああ。だから今回チセの入団もだけどボクも戦力に加わるよ。戦力が多い方がいいだろう。」

「たしかにな。アイツら相手にするなら人員は多い方がいいな。」

「それならボクは今夜ガネーシャに祭当日の警備に加えてもらえるよう頼んでくるよ。」

「頼むヘスティア。俺はルルとシロエを集めて祭当日の警備について会議だ。」

そう言つて彼らは行動に移つた。

オラリオ郊外のどこかの山小屋

「やあ元気だったかいルドラ。」

「問題ない。それより首尾はどうだ………フョードル・D。」

「ああ準備は万端さ。何せエニユオが下準備してくれたお陰で祭りの準備は整ったよ。これで我々の計画は上手く行くはずさ。」

「だが奴らを甘く見るなよ。かつてエレボスはアイツらに………正確にはエミヤとベルの二人に計画を瓦解させられ虎の子の戦力も向こう側に寝返らせてしまう事態に陥り強制送還されたんだからな。俺達もアストレア壊滅計画をベルにぶち壊されただけじゃなくヘステイアファミリア総出でオラリオ中の闇派閥をイザイルス一網打尽にされたんだからな。」

「ああ聞いているよ。だからこそ今がチャンスじゃないか。あのベルが昏睡状態に陥っている今なら簡単さ。」

「だといいがな。」

そう言つて神ルドラが小屋を出ていく。

「やれやれ。あれで神様か………これなら十二分に囷になつてくれるね。………感謝するよ。これで僕達の計画は次の段階に進むよ。」

オラリオに暗雲が立ち込める。

## 第10話

怪物祭当日　ヘステイアファミア本拠地『聖火の窯』

玄関先で普段着を着たベルがヘステイアを待つていた。

「待たせたねベル君。」

「いえいえ。それじゃ神様、行きましようか。」

「そうだね。それじゃ行つてくるよエミヤ君、シロエ君。」

ベルを引き連れて出かけるヘステイア。

「さて、ベルとヘステイアには今日一日楽しんでほしいから問題は俺達で解決するとして……」

そう言つてシロエと医務室に行くエミヤ。

「あの二人をどうにかしないとオラリオが血で染まる危険性があるからな。」

医務室ではアキコの治療を受けて包帯を巻いたザフィーラとクー・フリーンがいた。

「何なんだよあの姉ちゃんたちは!? 本当にレベル4なのか!？」

「あれは間違いなくレベル6級の実力はあつた……」

「すまんな二人とも。あの二人……ばあさんヘラの眷属のシズルとリノは以前ビーの仲間達を

たった二人で叩きのめした筋金入りの最強最悪の申し子達だからな……」(――ω――)  
ウーン

「言い得て妙だねその異名……：ヘラはオラリオ追放後に別の場所で眷属を迎えたって噂は前々から聞いていたけど本当だったんだね。」

「ところでどうすんだよ。あの二人がもしベルに接触しようとしたら」

「とりあえずコウスケに監視をさせている。まあアイツなら見つかることはないだろう。それに何かあれば通信機で知らせる手はずになつてゐるからな。」

そう言つてエミヤが自身の耳につけてイヤホンみたいなモノを指さす。

「パスカルの開発した小型通信機だよ。ダンジョン内では使えないという欠点があるけど今回の件にはまさに最適なアイテムだよ。」

「それにまだ私達のファミリアでしか運用してないからな。」

「たしかにこいつはウチの目玉の一つだからな。売り出すにしろ色々とデータを集める必要があるそう。」

「とりあえずガネーシャんところにも今回警備の手伝いに参加するにあつて今回他のファミリアにもモニターしてもらつて名目で何か貸したんだろ？」

「ああ。それで怪物祭が終わつたら正式にガネーシャファミリアの御用達として取引することになっているんだ。」

「流石だな腹黒メガネ。<sup>ブラックメガネ</sup> 今回の件で通信機の開発費用を回収する目算だな。」

「ええ。パスカルとリタがこれの開発にかなり費用を使い込んだおかげで今月のウチのファミリアの予算が4年前のあの件ぶりに赤字になりましたからね。赤字分を何としても補填しないとこのままじやリリが参りそうですからね。」

「ああ。この間帳簿を見てすごく落ち込んでいたな。」

「なので今回の怪物祭の出店である程度売り上げは期待できますが少なくとも今月一億ヴァリス以上の貯蓄を計上しないと安心できませんからね。」

そう言いつつシロエがある書類を出す。

「今回の警備の見取り図です。エリアスの情報を仮定して奴らの侵入経路を割り出したよ。怪物祭で手薄になる門が一か所あるからそこにルルとマリク、それとシヤマルを配置したから少なくともフォードル・D級<sup>クラス</sup>以外なら2分で制圧できるでしょう。」

「二応バックアップでジュデイスとクロームを控えさせてるから大丈夫だろう。……さてそろそろ本題に入るとしよう。」

そう言つて医務室にいる五人が重たい空気になる。

「……………そうだね。妾<sup>アタシ</sup>としてはこれ以上患者は増やしたくないからね。」

「俺もだ。あんなの相手にできるかっての。」

「私もアレを相手にするならせめてシグナムやヴィータを加えてくれないと骨が折れ

る。」

「なら決まりだね……………」

「そうだな……………」

「……あのブラコンシズルとリノ姉妹がベルにちよつかいを掛ける前にどう止めるか……………」

### オラリオ中央広場

ベルとヘスティアは祭りで賑わう広場を歩いている。

「ベル君、今日は思いつきり楽しもうね。」

「慌てないで下さいよ神様。」

そんな二人をかなり遠くから見ている二人の女性。

「どうしましょうお姉ちゃん!?おにいちゃんベル君がロリ巨乳と仲睦まじく歩いているのは本当に不味

いよ?。」

「あらあら。落ち着いてリノちゃん。あれはおとうとくんベル君のファミリアの主神だから大丈夫

よ。」



「そんな呑気な事言ってる場合じゃないよ!? 例えファミリアの主神でも油断しちゃ駄目だよ!?!あの神様の目、あれは間違いない恋する乙女の目だよ!?!このままじゃベル君が!?!  
おにちゃん  
ベル君が!?!」

「あらあら。リノちゃんつたら♪落ち着くんだゾ☆」

ドツゴオオオオオオオオン!

そう言つてシズルがリノに頭突きをかます。

「ハラヒレホレヒレ……………」

リノが目を回す。

一方のその二人をさらに背後から見張るコウスケは

(やつべー……………できれば関わり合いになりたくねえな。)

二人にすら気づつかれないほど気配を殺して見張っていた。

そんな色んな人達の思惑など気にせずベルとハスティアは祭りを堪能していた。

「ベル君、わたあめが美味しいよ。」

「神様、一人で食べれますから〜」( ; ~ ^ A

翠屋オラリオ支店

祭の影響か、かなり繁盛している翠屋では

「ありがとうございます。」

「ふう〜ようやく一段落ね。」

レジを担当していたナノハとミアハファミアリアから手伝いに参加しているレベル2の冒険者アリサ・バニングスが忙しそうにしていた。

「ナノハちゃん、アリサちゃん。レジ代わるよ。」

「私達が代わりますんで休憩してきてください。」

ナノハ達の元に来たのはタケミカツファミアリアからバイトで参加している命とミアハファミアリアのスズカ・月村だ。

「ありがとうございます。」

「それじゃ後は頼んだよ。」

そう言つて休憩室に入るナノハとアリサ。

休憩室には先客がいた。

「おう。お疲れさん。」

「タケミカツチさん。」

神タケミカツチだ。

彼も翠屋でバイトしている。

「今日は怪物祭だから本当に忙しいな。それにしてもナノハは実家だからいいとしてアリサはミアハの所の出店はいいのか？」

「ナアーザ団長とマリエさんが上手く切り盛りしてるし、ヘンリエッタさんもいるから私達は今回自由にやらせてもらってるのよ。それにセララちゃんもヘステイアファミリアの出店の手伝いをしているし私達以外にも自由に祭りを楽しんでる人たちがいるから問題ないよ。」

「そうか。まあミアハも運がいいよ。マリエやヘンリエッタ、それと鉄平が加わったおかげでかつての中堅ファミリアの頃の活気を取り戻したからな。俺も神友としてホツとしたよ。」

「私もその後入ったから詳しい経緯は知らないけど当時はかなり厳しい状況だったのよね。ナノハ達を追いかけてオラリオに来たけど本当にミアハファミリアでよかったと思ってるわ。」

「アリサちゃんだったら私達のファミリアに入ってもやっていけたと思うの。」

「そうね。でもスズカとも話した事だけどやっぱりナノハ達と一緒にじゃなく違う場所でお互い強くなっていくことが大事だと思ったのよ。まだまだナノハやハヤテには追いつ

付いてないけどいずれは追いつくんだから待つてなさいよ。」

「分かったよアリサちゃん。」

そう話すアリサにナノハはちよっぴりむずがゆい気持ちになったが笑顔で答えた。

「それはそうと……どうなのよナノハ。」

「どうって?」(。・ω・)?

「ベルの事よ。ウミナリで出会って一緒に”ジュエルソルト 宝石種”封印したし、終わった後も一生懸命魔法の訓練を続けて、ベルを追いかける形でオラリオに来たじゃない。告白ぐらいはしたのかなって。」

アリサがいきなりナノハに恋バナを振ってきたのでタケミカツチは二人に気づかれずに休憩室を出ていった。

「べっべっ別にそんな事してないの!?!それにベル君は私にとつては弟みたいな存在でお姉ちゃんとしてベル君を支えるって決めてるの!?!」(\*ノωノ)

「本当に?」(・▽・)ニヤニヤ

ナノハは赤面しつつ必死で弁解するがアリサはにやけながら追撃してくる。

「そう言えばベルって結構モテるよね。ウチの女性陣の中にもベルの事気にしている人がいたわよ。」

「……………」

「それにあの『剣姫』がベルが昏睡してから4年間毎日欠かさずお見舞いに来てるって聞いてたし」

「アイズちゃんとは誰がベルの“お姉ちゃん”かOHANASHIする必要があるの。」  
アイズの話題に触れた途端ナノハの表情に威圧感が増す。

「そう言えばナノハ、そのアイズと何があつたのよ？ 私達がオラリオに来てからよく口喧嘩してたわよね。」

「何でもないの。ただアイズちゃんとは………出会い方が最悪だったの。」  
さらに威圧感を増すナノハにアリサは少し煽りすぎだと後悔していた。

### 闘技場近辺

ベルとハスティアは闘技場の周りを歩いていた。

「そう言えばベル君はモンスター<sup>モンスターファイリア</sup>の調教を見た事なかったよね。」

「そうですね。毎年怪物<sup>モンスターフイリア</sup>祭では色々トラブルに巻き込まれましたからね。」

「オラリオに来て最初の怪物<sup>モンスターフイリア</sup>祭でツナ君達の抗争に巻き込まれたし、その次の年は兜

ファミリアの侵攻を防ぐために戦力総出で遠征したから参加できなかったしね。その次の年はベル君が昏睡状態になったし仕方ないよね。」

そう言いながら闘技場の周りの出店を歩き回るベルとヘスティア。

すると……………

「!？」

「どうしたんだいベル君？」

ベルが急に立ち止まり辺りを見渡す。

ヘスティアがベルに話しかける。

「神様……………少し離れてください。」

ベルがヘスティアを闘技場から遠ざけると

ドツカアアアアアン!

闘技場の壁をぶち破りシルバーバックが現れた。

「なんで調教用のモンスターが!？」

「下がっててくださいい神様。『福音』ゴスペル」

ベルが何かを唱えるとシルバーバックがいきなり体を真つ二つに引き裂かれた。

「とりあえずシルバークバックは仕留めましたが一体なぜ？」

「あゝベル君？」

「エイナさん（アドバイザー君）!?!」

「今闘技場にいる調教用のモンスターが何匹か逃げ出したのよ!」

「なんだって!?!」

「それでエイナさん、逃げたモンスターの数はどれくらいか分かりますか?」

「それが………20匹近くいるみたいなの。」

「分かりました。」

するとベルがポケットから小さなイヤホンを取り出しつけると

「もしもしエミヤ。今闘技場で調教用モンスターが脱走したんだ。僕はこれからそのモンスターを仕留めに行くから急いで住民の避難を。」

「了解した。こつちもモンスター討伐に人員を送る。………無茶するなよ M y m a s t e r。」

「ありがとう。」

するとベルがリュックからナイフを取り出す。

「神様、僕はこれから脱走したモンスターを討伐してきます。神様は避難を」

「何言ってるんだいベル君。ボクは君たちの主神だよ。戦えなくても住民の避難や誘導ぐらいはできるよ。だからボクの事は気にせず暴れておいで。」

「ありがとうございます。では行ってきます。」

そう言つてベルは駆けだす。

オラリオ西側の門の前

門の近くの民家の屋根の上で門を見張るマリクとシャマル。

「敵はまだ来てないようですね。」

「門を通る奴らも皆商人や近くに住む農民と怪しい奴はいないな。」

「そう言えばルルはどうしたんですか？」

「民家近くの地下を調べてるそうだ。」

「地下？バベル周辺はダンジョンですがこの辺は何もないはずでは？」

「何でもこの地下にはダイダロスが作ったとされる秘密の通路があるという噂があるぞうだ。」

「……………まさか!？」

すると門近くの地面が少し盛り上がる。

その瞬間を見逃さなかつた二人は



「どうやらルルは地下の秘密通路を見つけたみたいですね。」

「だな。という事は闇派閥イグイルスの残党の潜入経路は………」

「地下だな（地下ですね）！」

そう言つて二人は臨戦態勢をとる。

## 第11話

ダイダロス通り

ダイダロス通りに逃げ込んだモンスターたちを人知れず魔石に変えるのは……………

「我らは神の代理人。神罰の地上執行者。我らが使命は我が神に逆らう愚者を、その肉の最後の一片までも絶滅すること。A M E N。」

「おうおう。こりや派手におっぱじめやがったな。闇派閥の残党共。」

「……………ステラ、この匂い嫌い。」

「まあこれも我々秘密職員の仕事ですからね。」

ウラノス直属の特殊機関の秘密職員、ギルド直属でありながらその存在は隠匿され一部のギルド職員とごく少ないオラリオの大手ファミリアの幹部しか知らないオラリオ法の執行者たち。

『再生者』の二つ名を持ちオラリオでも最強クラスの実力を誇る冒険者と同等の力を持つ神父アレクサンド・アンデルセン。

『二挺拳銃』の二つ名を持ちかつて闇派閥の一角だったファミリアの雇われ用心棒だった女ガンマンレベッカ・リー。

『プリンセス・ヒュノプス  
眠り姫』の二つ名でかつて闇派閥の切り札と言われた少女ステラ・ルーシェ  
『悪のカリスマ』と呼ばれた暗黒期のオラリオで闇派閥影の計画士と言われた老紳士  
ジェームズ・モリアーティ。

経歴・能力・素性などから多くの危険性をはらみつつもウラノスとの取引で彼の傘下  
で働くことを選んだ者。

さらにアルフィアやザルドなどかつてオラリオに反旗を翻しながらもある一件で恩  
赦を与えられた代わりに職員になった者。

そういつた経歴で秘密職員になった者たちを彼らを知る者はこう呼んだ。

「まあ我々、闇の処刑人<sup>ダークウオーカー</sup>、相手にこんな数では話になりませんね。」

彼等は人知れず今日もオラリオを襲う外敵の脅威を退ける。

## 商店街の一角

商店街に逃げ込んだ調教用のモンスターを見つけては倒していくベル。

ナイフはお世辞にもレベル4が持つ武器としては心細いがベルは魔法を駆使してモ

ンスターを確実に仕留めていった。

「数はそれなりに仕留めたけど……まだ安心できないな。」

するとベルの通信機から連絡が入る。

「ベル君、今大丈夫かい？」

シロエからだ。

「どうしましたかシロエさん？」

「今脱走したモンスターはエミヤさん達が討伐してくれてるんだけどちよつと気になる事があつて連絡したんだ。」

「気になる事？」

シロエ曰く調教用のモンスターが何故脱走したかについてだった。

ベルからの連絡後すぐさま闘技場に駆け付けたシロエ達はモンスター達が入っていた檻を確認しようと闘技場の中へ入る。

檻を見張っていた門番は眠らされていた上にその時の記憶を消されていた。

それだけ稀有な能力を持つ者が闘技場内にいると仮定しシロエはまだ闘技場内に今回の騒動を企てた犯人がいると考えたのだ。

「つまり闘技場内に犯人が紛れ込んでいると……」

「それは僕達が見つけるからベル君は引き続き逃げ出したモンスターの討伐に当たつ

てくれ。」

「分かりました。」

そう言つて通信を切つたベルはすぐさま屋根へと駆け上がり周囲を見渡す。

「まだ少し数が残つてるけど……………ん？あれは……………」

ベルは何かに気づきその場所へと向かう。

その後、ベルがいた場所の一角の地面から植物のようなモンスターがその顔を出す

……………

「ダメだゾ☆ベル君の邪魔をする奴は私が駆逐するんだから。」

笑顔でそのモンスターの頭蓋に剣を突きさすシズル。

一瞬で灰になり魔石になり果てたモンスター。

その魔石を拾つたりノは

「お姉ちゃん、この魔石つて……………」

「あらあら。」

「どうやらこのモンスターは人工的に生み出されたようだな。」

すると二人の前に一人の女性が現れる。

「あれ？マスター、来てたんですか？」

「アタシはお前たちと違つて直にベルを見守るようへラ様に言いつけられてるからな。」

それよりこのモンスターの魔石は人口で作られたモノだな。そう言う実験を行つてい  
イウィルスる闇派閥がいるという噂を耳にしたことがある。でもそいつらは以前ヘステイアフ  
 ミリアに壊滅させられたはずだ。」

「だとするとマスター、その実験を引き継いだ人達がいるつてことですか?」

「あくまで可能性だがな。何はともあれ。私達はベルに気づかれずに行動するだけだ。  
 ……………」

すると女性がシズル達とは反対の方向を見て

「さて、君はベルを見張つてる私達を監視していたみたいだがあえて敵対する気はない  
 みたいだ。なのでここからは私達の監視よりベルを影ながらサポートすべきではない  
 かな? 少なくとも私達はベルをどうこうする気はない。だから監視もここまでにして  
 もらうと助かるよ。」

「マスター、誰に話しかけてるの?」

「まあ君達では見つけるのは難しいかな。何せ彼はあの卿だからね。」

「?」。(。・ω・)?

首をかしげる二人を尻目に女性は二人を連れて路地を歩いていく。

その後ろ姿見て息をひそめてたコウスケがつぶやく。

「あの人……………よく俺の存在に気付いたな……………こりや言う通りにした方が無難かな。」

するとコウスケの通信機がなる。

「コウスケ、任務変更だ。お前は今すぐ西門の方に向かってくれ。ルル達が苦戦している。」

「ルルさんが!?!分かりました!」

そう言つてコウスケはサングラスを取り出しつける。

「では深淵の向こう側へ向かうとしようか………」

弱冠セリフに香ばしさを感じさせながら

ミアハファミアリアの店

ミアハファミアリアが店出した屋台のある通りでもモンスターが現れた。

「群れてるのは嫌いだよ。」

しかしたまたまその近くの木陰で昼寝していた雲雀によつて一匹残らず倒された。

「おいおい雲雀。少しくらい残してくれてもいいじゃねえか?」

ミアハファミアリアの手伝いに来ていた直継が不満を言う。

「なら今から僕と戦うかい。正直こんな雑魚相手に欲求不満なんだよ。」

「止めておこうぜ。今はこの騒ぎを収束させるのが先決だろ?」

「まあいいや。僕は一人で動くから君はこの場所を守るのに専念してたら。」

そう言つて雲雀は一人、オラリオ中に散らばつたモンスターを倒しに行く。

「まあ雲雀が動くなら俺はここを守るのが正しい選択かもな。」

「直継はん、ウチもウチの子たちもおるで。」

マリエが一般市民の誘導を終えて直継に合流した。

マリエの後ろには武装したミアハファミアの面々が揃つていた。

「ナーザはんもすでに高台を陣取つて周囲を見張つとるし準備は万端やで。」

「了解。それじゃここら一带の被害を確認しよう。他の場所で助けがいたらところは救援

に向かうとして今はモンスターに荒らされた場所の瓦礫を撤去しよう。」

そう言つて直継を始めミアハファミアの面々が行動を開始する。

オラリオの西側の城壁の地下



闘技場の調教用のモンスターが逃げ出す30分程前、ルルは空き家の床を調べそして地下通路の出口を見つけたのだ。

「聞こえるかエミヤ。例の地下通路を見つけた。これより搜索する。」

「了解した。ジュデイス、クローム、ルルのバックアップは任せただぞ。」

「任せなさい。」

「……………了解です副長。」

そう言つてルル達は地下通路の中に入っていく。

そして現在……………

「まさか闇派閥の連中、これだけのモンスターを用意していたとは……………」

「数が数だけに私達だけでは手に負えないわね。」

「……………ボスたちが来るまで耐えるしかない……………」

ルル達は地下通路の中にうごめくモンスター達を発見する。

その数はざつと100体はいた。

「これだけのモンスターを操る調教師テイマーを擁する闇派閥イウイルスのファミリア……………ルドラファミリアだな。だとしたらどこかに調教師テイマーがいるな。」

「エミヤ、どうやらオラリオ内に闇派閥イウイルスの冒険者がいるみたい。こっちは私達で防ぐから冒険者の搜索をお願い。」

「分かった。念のためそつちにコウスケを送る。……できるだけ被害は最小限に抑えるよう尽力してくれ。」

「了解よ。」

そう言つてジユデイスが杖を構える。

「ねえクローム、あれだけのモンスタ―を騙せる幻影を作れる?」

「問題ない。でも長時間は無理。」

「十分だ。後は勝利の一手を導き出すだけだ。そのためにはこいつらをここで食い止めるぞ。」

「了解!」

ヘステイアファミリア本拠地『聖火の窯』

通信機から流れる報告を聞いてエミヤは色々選択していく。

一般市民の安全の確保はできるのか?

敵の正体は?

敵をどう鎮圧するか？

否、やるんだ。

少なくとも我がマスターにしてこのファミリアの団長である少年なら自分ができることを全力でやろうとするだろう。

「なら私はベルの信念に付き従うまで………へステイアファミリア全団員に告ぐ！」

エミヤが通信機越しで全員に指示を出す。

「現在闘技場から脱走したモンスターに加え正体不明のモンスターがオラリオ中に出現した。これよりオラリオに住む住民たちの安全確保のためモンスターを全て殲滅する。なお正体不明のモンスターは以降アンノウンと呼称しデータを採取しつつ確実に仕留める。そのため各自ツーマンセル以上で対応しろ。繰り返し。各自ツーマンセル以上で組みアンノウンを殲滅せよ。」

エミヤの号令にその場にいた面々だけでなく通信機越しで聞いていた団員達が領き行動を開始する。

「赤兎馬。出るぞ。攻撃は私はやる。君は私の足になってくれ。」

「心得た。それで団長殿はどうされますか？」

「途中で合流する。合流した後各チームと連携してモンスター達の行動範囲を狭めていき集めたところで一網打尽にする。」

エミヤは赤兎馬に乗りオラリオの街に出る。

「あとは任せるぞユキチ。」

「分かった。安心して行つてこい。」

エミヤ達を送り出した後ユキチが屋敷内のメンバーを見渡し

「私達は各自の状況を収集し情報分析と状況把握に専念するぞ。」

「分かりました。僕はガネーシャファミリアの人達との通信を確認し連携が取れるようにします。」

「アタシはメカベル達を出撃させて遠隔操作でみんなのサポートに回るよ。」

「私は集まったアンノウンの情報を整理して分析するわ。」

ユキチの号令でヒューバート、パスカル、リタがそれぞれ動き出す。

side ベル

僕は屋根伝いに街全体を見渡しながらモンスターを探しながら動いていた。

すると……………

「ベル……………」

アイズさんが現れる。

「アイズさん、どうして」

「さつきギルドの人から聞いてモンスターが逃げたって聞いた。だから私も倒して周っている。」

「なるほど……………ちよつと待つてください。」

そう言つて通信機からの連絡を聞く。

「各自ツーマンセル以上で組みアンノウンを殲滅せよ。」

アンノウン? どうやら逃げ出したモンスター以外にもモンスターが現れたみたいだ。

なら……………」

「アイズさん、どうやら調教用のモンスター以外にも正体不明のモンスターがオラリオに出没しているみたいです。」

「!?!」

「なので僕と一緒に行動しませんか?」

「……………いいの?」

「大丈夫です。こういう場合を想定したマニュアルが僕達のファミリアにはあるので。それに僕達のファミリアとアイズさんのファミリアは同盟を結んでますよね。なら問

題ありませんよ。」

「……………分かった。」

期せずしてアイズさんと一緒に行動することになったけど、そう言えばアイズさんと組むのは僕が8歳ぐらいの時からだ。

なら連携も少しばかり微調整する必要があるけど今はモンスターの殲滅と住民の安全が先決だ。

さあ急ごう。

s i d e  
???

成功だ。

あのエニユオが用意してくれたモンスター達を従わせて俺はこの世界で唯一無二の勇者になるんだ。

今度こそ……………今度こそ俺が主役に……………この物語の主役になるんだ……………

誰にも邪魔はさせない……………アイツにも……………先生にも……………誰にも俺を止める事

はできないんだ！

さあ俺の従魔たちよ………派手に暴れろ！

## 第12話

### 闘技場内

調教用のモンスターが脱走したことを聞いたシロエはクー・フリーンとオサム、アカツキを連れて現場に来ていた。

「どうやら外部の犯行で間違いないみたいだけど………どうやってモンスターを手なづけたか疑問だ。」

「気絶させられた人達の証言を聞く限り記憶の改ざんが行われた形跡があった。だとすると敵はかなりレアな能力を持っているみたいだね。」

「となると、敵さんの狙いは絞り込めるな。」

「そうだね。クー・フリーン、君はガネーシャの護衛についてくれ。敵の狙いの一つはオラリオの警備系統の壊滅だ。だとすれば狙われるのはガネーシャとアストレアの二神だ。」

「了解だ。アストレアの方は？」

「コウスケが救援に向かった。僕達はそのまま闘技場でネズミをあぶり出すよ。」

「了解。」



そう言つて4人は行動を開始する。

ヘステイアファミリアの出店

出店付近に現れたモンスターは………食べられていた。

「(くく) モグモグ、ちよつと塩味が足りねえな。」

「トリコさくん、ソース作ったんでこれかけて食べてみてください。」

「どれどれ………(くく) モグモグおーこれはうめえ！」

「ほんとだうめえ！」

出店の手伝いをしていたトリコがモンスターを全て倒して食材に変えそれをコマツとにやん太が調理したのである。

ちなみに出店の接客をしていたヴィータやシグナム、アインスはお客様の避難誘導をしていた。

「トリコ、ヴィータ、そろそろ食事はその辺にして私達はこの騒動を終わらせるために行動を起こすぞ。」

「分かってるぜシグナム。腹ごなしの運動にはもってこいだしな。」

「おう。それじゃ派手に暴れるとするか。コマツ！にやん太！アインス！あとは任せませ。」

「任された。私はこの場所を守ることに専念します。」

「ボクもできる限り頑張ります！」

「ヴィータつちもシグナムつちもトリコ君も頑張ってくださいニヤ。」

そう言つてトリコたちが動き出す。

「それでどっちに行く？」

「待て待て。……どうやら厄介そうな匂いがあつちからするな。」

「それでは行くとするか。」

出店のユニフォームである、ハヤテが用意したメイド服から素早く騎士服に着替えたシグナムとヴィータ。

トリコも癡猛な笑みを浮かべながら一緒に走っていく。

## 翠屋オラリオ店

翠屋の方にもモンスタ―が現れたがこっちも問題なかった。

「怪物祭だからってモンスタ―のお客さんが来るなんて聞いてへんわ。」

「ナノハの大事な場所を壊そうとする奴は私が切り伏せる。」

「ここが無くなったら桃子さんの美味しいシュークリームやデザートが食べれなくなりますからね。」

「そうよ！ここは私達だけじゃない！オラリオ中の女の子の憩いの場なんだから！」

「皆、ありがとう。」

ナノハを始めフェイトやハヤテ、アリサやスズカたちの活躍で翠屋の方も無事であった。

無論彼女たちだけでなく

「キヨウヤ殿、ミユキ殿。こちらも片付けました。」

「ありがとう命ちゃん。しかしこのモンスタ―は何処から出てきたのかしら？」

「そうだな。それに第二波が来るかもしれないしな。警戒はしておかないとすると

「ナノハちゃん！無事かい!？」

ツナが空から降りてきた。

「私達は問題ないの。それより今どうなっているの?」

「今オラリオ中に謎のモンスターがあちこちに出現してるんだ。エミヤさんの指示でそのモンスター達を駆逐しつつ街の中央広場まで誘導してそこで一網打尽にすることになった。」

「そうなの?なら私も加わるね。」

「私も加わるわ。つとその前にシャマル?ここの人達の治療を頼みます。ツヴァイは私達と一緒に来て。」

「分かったわハヤテちゃん。気を付けてね。」

「了解ですマスター。」

するとフェイトが

「私達も動こう。オラリオを守るアストレアの一員だからね。」

「だったら私達も動くわよ。でしょスズカ。」

「そうね。できることは何でもするよ。」

「それじゃ俺達はこの場所を守るぞミユキ、命。」

「分かったわキョウちゃん。」

「ナノハ殿たち、ご武運を。」

2組に分かれて行動することになったナノハ達。

ナノハ、フェイト、スズカが東側から、ツナ、ハヤテ、ツヴァイ、アリサが西側から中央広場へ向かおうとする。

「それじゃ行動開始なの！」

「「「「了解！」」」」」

オラリオの中央広場

広場ではティオナとティオネ、レフィーヤが植物のようなモンスター相手に苦戦していた。

「あーこんな事なら大双刀<sup>ウルガ</sup>持ってくればよかった！」

「泣き言を言ってもしょうがないわよ！」

ティオナとティオネはお互いあーだこーだ言いながらモンスターと戦っている。

しかしこのモンスターの触手が強靱で武器が無い状態の前線二人はかなり苦戦していた。

「レフィーヤ、詠唱急いで！」

ティオネがレフイーヤに指示を出す……

「!?触手がいきなり!」

触手がレフイーヤ目掛けて襲い掛かる。

「もしかして魔力に反応している!」

ティオネが植物系モンスターの特性を理解するがそれよりも先にモンスターの触手がレフイーヤの腹を貫く。

「かつはあ!」

「レフイーヤ!」

吐血するレフイーヤに再び触手が迫る。

(ダメ……やられる!)

すると

「炎 雷!」  
ファイアボルト

火の玉が触手に直撃しレフイーヤに当たる直前で触手が燃え尽きる。

「……………今のは……………」

すると

「目覚めよ。  
テンペスト」

植物系モンスターが吹き飛ばされた。

「アイズ!？」

アイズの魔法を纏った一撃が植物系モンスターにさく裂したのだ。

「皆大丈夫?」

「アイズ、いいところに来てくれたわね。でも今はレフィーヤが」

ティオネの一言でレフィーヤの方を見たアイズ。

「大丈夫ですか!? 今回復させます。顕現せよ英雄凶鑑!」

ベルが英雄凶鑑を顕現させる。

『Number 4 Healing Brave Arc Eda Licorne Actuai』

ベルの頭に赤いバンダナが巻かれる。

「トータルヒーリング!」

ベルの背後に水の精霊が現れる。

水の精霊から放たれた光がレフィーヤを癒す。

「うそ……………致命傷だと思ったのに……………」

「眠りにつけ英雄凶鑑。これで怪我の方は大丈夫ですね。……………さてと」

ベルが視線を中央広場に向ける。

すると先ほどアイズの一撃で飛ばされたモンスターが怒りを露わにしながら攻撃態

勢を整えていた。

「かなり硬い表皮みたいですね。なら……………」

ベルが手をモンスターに向ける。

「聖なる火よ、我が敵を焼き尽くせ……………」  
『英雄聖火』  
アルゴウエスタ

ベルの手からまるで雷光のように輝く炎が現れモンスターに直撃する。

キエエエエ！

「無駄だよ。その炎は当たった相手が燃え尽きるまで消えることは無い。」

やがて炎が消えるとモンスターは完全に炭となり魔石へと変わっていた。

「うそ……………私達が苦戦したモンスターを数秒で……………」

「アイズの一撃でも砕けなかった表皮を一瞬で燃やしちやつた……………」

「すごい……………」

ベルの魔法の一撃にただただ驚きを隠せない三人。

「これが例のモンスター……………」

「ベル、今どこにいる？」

するとベルの通信機にエミヤから連絡が来る。

「エミヤ、今中央広場です。」

「了解した。こつちももうすぐそちらに着く。」



通信をきると

「中央広場この場所にオラリオ中に散らばったモンスターを集めて一網打尽にします。皆さん協力をお願いしても？」

「もちろんやる。」

「私も！」

「ええいいわよ。」

「助けてもらいましたし協力は惜しみません。」  
すると

「よおベル。主が一番乗りか？」

「来たか兎よ。余が来たなら百人力よ。」

ローマ戦車に乗ってイस्कンダルとネロもやって来た。

くベル君！私のメカベル達も救援に来たよ！>

「ボクハベル・クラネル……ボクハ英雄ニナル」

パスカルのサポートメカ『メカベル』が空から降りてきた。

中央広場に戦力が集まりつつある。

その頃、他の場所では…………

エミヤが赤兎馬の上に乗りながら弓矢でモンスターを射抜いていく。

「I am the bone of my sword。」

エミヤが何かを詠唱すると手から剣が生成されていく。

「偽・螺旋剣！」

テイオナ達が苦戦したモンスターには生み出した剣を矢にして放ち一瞬で倒している。

ちなみに走っている赤兎馬は自身に近づく相手を持っていた槍で貫いたり払ったりして退けていた。

「もうすぐで中央広場です。」

「分かった。」

そう言つてエミヤはその手を緩めずまた剣を生成して矢として放つ。

「エミヤ、敵の本隊を見つけた。」

エミヤの通信機にルルから連絡が入る。

「どうやら敵はモンスターばかりだ。でもこのモンスターの数と状況を考えると敵の

狙いは分かる。」

「狙いとは」

「オラリオの壊滅だ。」

ルルからもたらされた知らせにエミヤが苦虫を噛み潰したように歯を食いしばる。

「幸い今アリーゼ達アストレアの面々も合流して地上への出口を片っ端からふさいでいるがこのままじゃこつちがじり貧になる。」

「安心しろ。すでにコウスケをそつちの救援に回した。足りなければエリアスとジャンヌも送る。」

「了解。」

通信が切れるとエミヤは

「やはりエリアスの情報通り闇派閥イヴイルスの仕業だとして……………敵の居所は……………」

エミヤは思索する。

この状況を好転させる一手を……………

オラリオ西側の地下通路

ルルがエミヤとの通信を終えすぐさま目の前の状況に視線を合わせる。

「もうすぐコウスケがやって来る。そうなればこの状況は好転する。もうひと踏ん張りだ。」

「了解よ。」

「……………了解。」

「ふうー。これで少しは休めそうだ。」

「手抜きはダメですよ。」

ルルの一言で顔つきが明るくなる面々。

「ではこつちも出し惜しみなしだな。」

するとマリクの後ろにモンスターが

「漢なら背中で語れ！」

背中から謎のビームが出てモンスターが魔石ごと貫かれる。

「あいかわらずでたらめな技だな。まあいい。さあ攻めるぞ。」

ルルの号令と共に全員がモンスターに一斉攻撃する。

その頃、地下通路の別の出口では

「皆、出口の外まで退避よ！」

アストレアファミアリアのアリーゼ、輝夜、リユールら7人がモンスターの数に押されて少しづつ後退していき

「アリーゼ、これ以上後退したら………」

「分かっているけどこのままじゃ私達が全滅する危険性が高まる。ここは出口の外でモンスターを迎撃するべきよ。」

「くっ！もどかしいですね………」

出口の外まで下がっていくアリーゼ達。

そして段々モンスター達が黒い壁みたいに地下通路を所狭しと制圧し出口まで近づいていく。

「皆！一斉に攻撃よ！」

アリーゼの号令と共に魔法や弓矢でモンスター達を攻撃するアストレアファミアリアの面々。

前にいるモンスター達が倒れると後ろのモンスターがその屍を超えて現れる。

そのたびに彼女達の攻撃でまたモンスターが倒れる。

時間にしてわずか10分にも満たない中でこのサイクルが何度も繰り返される。

やがて均衡は最悪の形で崩れる。

「もう魔力が………」

「精神枯渇した娘は下がって！リユー、でかいの行ける？」

「いえ、流石に精神が……………」

「アリーゼ!?このままじゃこっちがジリ貧だ！」

「どうすれば……………」

そんなアリーゼの呟きに……………

「どうやら間に合ったみたいだな。」

「「!?!」」

アリーゼ達の目の前に現れたのは

「皆の者、待たせたな。我だ。」

アビスゲート  
深淵卿である。

「参謀殿、我だ。今もう一つの出口に着いた。これより蹂躞する。」

「了解した。では一発派手に頼むよ。」

「心得た。」

そう言つて深淵卿がアビスゲートモンスター達の方へと歩いていく。

「ちよつと貴方！一人では」

リユーが制止しようとするが

「心配ない。」

「我は深淵。」

「「「「我が来たからには」」」」

「「「「「こんな数は鳥合の衆だ。」」」」」」

どうやって増えたのか分からないが段々増殖していく深淵卿。アビスゲート

その増え方にアストレアファミリアの面々は思わず

「「「「キモツ!」」」」

そう叫びたくなるほど奇妙な光景だった。

「「「「「アビスゲート」」」」」ヘステイアファミリア斥候役、コウスケ・E・アビスゲート、参る!」」」」」

深淵卿の蹂躞劇が始まった。

## 闘技場

ガネーシヤはモンスターの脱走騒動にも動じず眷属たちに他のファミリアに応援を請するなど迅速な対応を見せそして闘技場内の混乱は沈静化し始めていた。

「ガネーシヤ様、ヘステイアファミリアのヒューバート殿からの連絡ですであちこち

で起こった騒動もヘステイアファミリア、アストレアファミリアの協力で収まりつつあるそうです。」

「そうか。我々は引き続き闘技場内の安全に務めるぞ。それも我々民衆の盾であるガネーシャファミリアの務めだ。」

「分かりました！」

すると眷属の一人が

「大変です!?!一般客の一人がモンスタアの襲撃で大けがを!?!」

「何!?!急いでディアケンヒトのアミッドを連れてくるんだ!?!それと怪我を負わせたモンスタアを急いで探し出せ！」

ガネーシャの命令を受けて動く眷属たち。

すると先ほど連絡してきた眷属の一人がガネーシャの後ろに周り、手に持ったナイフで

「そこまでだ!」

「!?!」

「ん?なんだ貴様は!?!」

眷属を取り押さえたのはアカツキだ。

「やはりある程度事態が終息した所を狙うと思ってたよ。」



ガネーシャと取り押さえられた眷属の目の前に現れたのはシロエだった。

「さあ正体を見せてもらおうか……：ルドラファミリアの元眷属で新・闇派閥ネオ・イヴイルスのティマー、ユキトシ・清水くん？」

ガネーシャファミリアの証である仮面をはがされ素顔をさらされた男。

「くっ!？」

「さてと、君には色々はいてもらおうよ。今回の騒動は全て君の計画なのか？それとも他に実行者がいるのかどうかについて。」

シロエが黒い笑みを浮かべてた。

「どうして俺の名を………」

「僕達へステイアファミリアを舐めないでよ。僕達のファミリアには君達を追うためにあちこち旅しているメンバーがいるんだ。言っとくけど彼らが調べてくれたお陰でほとんどの構成員の情報は手に入ってるんだ。だから素直に吐いた方が身のためだよ。」

「くっ!？」

「あと他に君が操ったモンスターについてはすでに対策済みだよ。」

その頃、清水が操った闘技場内に残った別のモンスターはオサムとクー・フリーンが処理していた。

「ったく、他にも何体操っていたんだ？」

「たしかにオラリオ中に散らばったモンスターも含めるとかなりの数を操っていることになるよね。だとしたらもったいないね。何でこれほどの能力者が闇派閥イヴァイルスの残党なんかに加担してるか理解に苦しむよ。」

「だな。さてシロエの所に戻るか。今頃真つ黒クロエになってる頃かもな。」  
二人はその場を後にした。

## 第13話

## 中央広場

逃げ出したモンスターだけでなく謎のモンスターも一斉に中央広場に集まってきた。そのモンスター達を追いこんでいるのは

「ディバインバスター！」

「フライングフォーク！」

「偽・螺旋剣！」

ナノハ達が東から、トリコが北から、そしてエミヤと赤兎馬が南からやって来た。

「ベル君、お待たせ。」

「どうやらパーティーには間に合ったみたいだな。」

「さあお楽しみはこれからだぜ。」

中央広場に集結するオラリオでも屈指の冒険者たち。

古代の魔導書と呼ばれる英雄凶鑑アルゴブックをその身に宿すヘステイアファミリア団長ベル・ク  
ラネル、オラリオで最も有名な冒険者の一人『劍姫』アイズ・ヴァレンシュタイン、ヘ  
ステイアファミリア三強の一角で無数の武器を生み出す投影魔術の使い手エミヤ、並外

れた嗅覚と驚異的な筋力を生かした肉弾戦を得意とするヘステイアファミリア三強『<sup>グルメオーガ</sup>美食の鬼』トリコに砲撃魔法の第一人者ナノハにアストレアファミリア随一の剣士であるフェイトと錚々たる面々が集まり迎撃準備を始める。

「これだけのメンバーが揃ったんだ。そう簡単にはしくじらないだろう。では最終確認をする。西側からルル達が進んだ例のモンスター達がここになだれ込んでくる手はずになっている。無論他のルートはチームヴェスperiaやガネーシャファミリアの面々、それとギルドからの助っ人が潰してくれている。我々はここにやって来たモンスター達を一匹残らず倒すことだ。すでにモンスター達の進むルートには一般人は誰一人立ち入れないよう手配している。」

「それと西側の方にはツナ君とハヤテちゃん達が救援に行ってるの。」

「途中でシグナム達もそっちの方に救援に向かったからな。」

「私の方からもコウスケとエリアス、ジャンヌに救援を頼んでおいた。」

エミヤとナノハ、トリコ達が現状を説明。

「エミヤ、このメカベルに乗っていいの？」

「ああ、それは私がパスカルに頼んでベルのサポート用につってもらったメカだからな。」

ベルがメカベルの背に乗りエミヤがベルにメカベルについて説明している。

「アイズ、準備はいい？」

「大丈夫。フェイト、貴方は？」

「問題ないよ。」

アイズとフェイトが互いに武器を確認しながら準備を整える。

「さてとエネルギー充填完了だ。」

「私も十分回復できたよ。」

「はあくテイオナ、この後戦闘だって言うのにトリコと同じ量の食事摂ってるのよ。」

「だってお腹空いてたし。」

「だからって……………」

トリコが中央広場に来る途中に倒したモンスターを自身のアビリティとスキルで食材に変えてそれをトリコと同じ量を平らげたテイオナにただただ呆れるテイオネ。

その時……………

ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！

中央広場に向かってくる複数の足音が聞こえてきた。

「全員戦闘態勢！」

エミヤの号令と共に中央広場にいる全員が構える。

15分前、西側では

「ふっ……こんな鳥合の衆で我が君臨せし街オラリオを蹂躪しようなどは片腹痛いわ。」

深淵卿が圧倒的な数・質・実力で地下通路に屯っていたモンスター達を蹂躪していく。

ただモンスターを倒していくたびに発言に香ばしさが増していくのを、その傍で聞いていたアストレアファミリアの面々は痛々しい表情をしながら離れて見ていた。

「噂には聞いてたけど本当に言ってる事がイタくなる度にキレが良くなっていくわね……」

「これが深淵卿……」

「できれば関わり合いたくないですね……」

そんな彼女たちの眩きを尻目にどんだんモンスターが減っていく

「参謀殿、すでに数は三分の一にまで減らしたぞ。」

「了解した。それじゃこれより例のモンスター達を中央広場まで誘導する。各自準備はっ。」

「こちらチームヴェスperia。こっちは配置完了だ。」

「こちらガネーシャファミリアのハシャーナだ。俺達も準備が整った。何時でもいいぞ。」

「こちらアストレアファミリアのライラだ。私達も問題ない。」

「エミヤだ。迎撃準備はできている。始めてくれパスカル、ルル。」

「OK！オラリオ中に設置したスピーカーをonにするよ。ルル頼むよ。」

「では私ルル・B・ランペルージュが命じる……………オラリオの住民たちよ……………我が命あるまで屋内に退避し決して外に出るな。」

「さあ名もなきモンスタ―達よ、私たちの断末魔を奏でよ。我がそなたたちの声をオーケストラにしてオラリオ中に響かせようではないか。」

N o s i d e

オラリオ中に設置してある街灯にはヘステイアファミリアのパスカル作のスピーカーが内蔵してある。

元々はギルドがエレボス事件での事を踏まえた安全対策としてヘステイアファミリアのパスカル個人に依頼しギルド主導の勧めた一般人避難誘導策がスピーカーによる被害状況の報告と緊急速報の通達だった。

ただしその対価としてヘステイアファミリアには緊急時に何時でも街灯のスピーカーを自由に使用できる権利を得たのである。

そしてそのスピーカーを一括してコントロールできる装置がヘステイアファミリアの本拠地『聖火の窯』の地下にあるオペレーションルームに設置されている。

「OK！オラリオ中に設置したスピーカーをonにするよ。ルル頼むよ。」

パスカルが通信機を装置に繋いでルルに頼む。

「では私ルル・B・ランペルージュが命じる……オラリオの住民たちよ……我が命あるまで屋内に退避し決して外に出るな。」

この放送はオラリオ中に響き一般人は全てまるで人形のようにこの言葉を聞いて屋内へと避難し始める。

「流石『鎮魂の魔王』のスキル『絶対君主権』だな。奴の瞳にギアスが光った瞬間に奴の目を見たり声を聞いた者はその命令を忠実に実行する人形になってしまっただけだな。」

オペレーションルームでパスカルの隣でC・C.がつぶやく。



「このスピーカーの能力をフルに使ってくれるからルルには好感が持てるよ。」

「やってる事は一時的な集団洗脳ですけどね……………オラリオ中を巻き込んだ……………」

パスカルがルルを褒める傍でヒューバートがボソツとつぶやく。

「でもこれで住民の被害は最小限に抑える事ができるね。」

「ですね。僕達はこの被害状況の確認と情報の精査ですね。シロエがない分頑張り

ましょう。」

「そうだね。」

「なら私も尽力するか……………」

C・C<sup>シュー</sup>も動き出す。

### 闘技場内

ガネーシヤの目の前に突き出されるように跪いた清水とその隣に立つシロエ。

「何故だ……………何故俺が用意したモンスター達がこうも簡単に蹂躪されるんだよ！」

清水の叫びに対しシロエが軽く微笑み

「さっき言ったはずだよ。こっちは君達闇派閥イツイルスの動向は逐一報告が入るようになってるって。それに僕達は過去に闇派閥イツイルスの残党には散々な目に合わされたからね。だからこそ僕達はあの惨劇を繰り返さないために常に万全の態勢で臨んでるんだよ。」

「だからと言って何故俺だと特定できた!?!」

「この騒動が起きる直前までは分からなかったよ。でも騒動が起きた後檻を見張ってたガネーシャファミリアの人達の証言と近くに落ちていたこの破片を見つけて君だと特定できたんだ。」

シロエが出したのは黒い水晶の破片だった。

「この黒水晶の欠片は違法魔道具の一つ『パランティアー』、君にこれを持たせた人物はどうやら闇派閥イツイルスの中心人物みたいだね。さしずめ『怪人』フュードル・Dか『霧の反逆者』フロッグ・リベリオン D・スピードのどちらかだろ。」

「!?!」

「どうやら君をガネーシャファミリアに忍び込ませたのはフュードル・Dのようだね。」

シロエは清水のほんのわずかな動揺を見逃さなかった。

「主犯が分かったのなら後は簡単だ。君には今回の襲撃に加担したファミリアとその関係者について全て吐いてもらうよ。」

そう言ってシロエが清水に詰め寄ろうとするが

「やつやめ!?ぐうう!」

いきなり清水が苦しみます。

「どうした?」

「ぐうう!?!ああああああ!?!」

いきなり清水が泡を吹いて倒れる。

「これは一体?」

「主よ、すでに……………」

「ああ。」

清水が何者かに殺された。

(こんなことが出来るのは……………)

オラリオ城壁

「やはり清水かれには荷が重すぎましたか。」

「そうだね。でも彼の能力は興味深かったから色々調べることができてボクは満足だ

よ。」

「そうですか。それは好都合でした。ご協力感謝しますよ『カルタファイルス』。」

「とりあえずモンスター達には刷り込みでオラリオ全体を襲うように暗示をかけておいたけどこの様子だと作戦は失敗だね。」

「そうですね。なのでこの失態は計画の立案者であるルドラ様に全ての罪をかぶつていただく必要がありますね。」

「まあボクには関係ないから後は任せるよフュードル・D。」

### 中央広場

ベル達<sup>が</sup>が向かってくるモンスター達を迎撃している。

それはもう圧倒的に……………

「ファイアボルト炎雷！」

「Xバーナー！」

「レッグナイフ！」

「デイバインバスター！」

全員の攻撃で大半のモンスター達が魔石に変わっていく。

やいらに

「そろそろ頃合いかな。メカベルの機能も使ってみるベル。」

「分かったよエミヤ。顕現せよ英雄<sup>アルゴブツク</sup>凶鑑。」

『Page 22 Super Coordinator Kirayama ato Actual』

ベルの眼に輝きが無くなる。

「CPC 設定完了。ニューラルリンクージ。イオン濃度正常。メタ運動野パラメータ更新。原子炉臨界。パワーフロー正常。全システムオールグリーン。メカベル<sup>ジエノサイドモード</sup>全壊滅形態、システム起動。」

メカベルのバックパックと走行がパージし数多くのミサイルやらビーム兵器が現れる。

「メカベル、<sup>オールウェポン、ファイア</sup>全兵器、発射！」

ベルの掛け声と共にメカベルの全兵器が火を噴く。

ミサイルがモンスターに命中し粉碎。

ビームがモンスターの胴体を貫き破壊。

その攻撃で全てのモンスターに直撃して爆音を上げて大喝采。

「眠りにつけ英雄凶鑑<sup>アルゴブック</sup>。」

ベルがメカベルから降りてくる。

「全モンスター壊滅完了だな。」

「これで問題解決だねエミヤ。」

「ああ。だが問題はまだ残ってる。」

するとエミヤの通信機にルルから通信が

「エミヤ、オラリオの外で闇派閥<sup>イヴイルス</sup>の軍勢と思わしき者たちが集まっている。」

「そうか……でも安心しろ。そっちはギルドのあの三人が動いている。」

「なるほど……了解した。」

ルルからの通信を切りエミヤは全体を見渡すと

「とりあえず、こっちは一段落だな。」

「うん。エミヤ、外の方は？」

「大丈夫だ。そっちはベルも知ってる奴らが片付けてくれる。」

オラリオの城壁の外

ルドラ率いる闇派閥イッイルスの軍勢だが、たつた三人の冒険者の手によって壊滅させられていた。

「ぐうう!!?聞いてないぞ……………何故『静寂』と『暴食』、『魔術師殺し』が生きているんだ……………」

満身創痍のルドラを鎖で縛るのはアルフィアとザルド、そしてコートを来た40代ぐらいの男性。

「俺達の仕事はオラリオに降りかかる厄災を人知れず取り除くこと……………」

「そうだな。俺達はあの時死ぬはずだったからな。これぐらいで罪滅ぼしになるならいくらでもやるだけさ。」

「私はベルともう一度会えたいもう死んでもいいと思っただが、今はこの生活が大事に思えてるからな。この生活を邪魔する奴は全員敵だ。覚悟は良いな。」

「……………もはやこれまでか……………おのれ〜」

「神ルドラ、ギルド特別職員『闇の処刑人』ダークウォーカーの権限により今ここで神界送還を行う。」

そう言ってコートの男がポケットから拳銃を取り出して

「神ルドラ、お前が地上にもたらした功罪を、神界にて永久に問答し続けるがいい。」

「 Bannon! 」

拳銃に撃たれたルドラが光になって消えていく。

「キリツグ、これで終わりだな。」

「ああ、さあ帰ろう。」

「そうだな。」

三人は城門に戻っていく。

騒動終結後、中央広場にて

中央広場にて仮設されたステージでヘステイアファミリアの新人チーム『リトルドッグス小さなワンコ』たちが即興ライブをして観客たちを盛り上げていた。

そのステージの最前列でベルはヘステイアと一緒に『リトルドッグス小さなワンコ』たちのライブを見ていた。

「今日は色々大変だったけど、最後はこんな楽しいイベントを最前列で見れて嬉しいよ。」



「そうですね。僕も楽しいです。」

「来年も楽しい怪物祭になるといいね。」

そんな二人を見て

「この光景が何度も見れるように頑張らないとな。」

「そうだなエミヤ。」

「それでシロエ、敵はやはり……………」

「ああ。フュードル・Dたちイヴァイルス闇派閥最後の大家○○○ファミリアの連中が動き出している。その可能性は高いと思うよ。」

「そうか……………なら一度オラリオの外にいる面々にも召集をかけないとダメかもしれないな。」

「「そうだな（だね）。」」

そう言つて再びベル達の様子を見るエミヤ達。

「ベル君、ヘスティア様、にゃん太班長のお任せ屋台飯貫ってきたの。」

「速く食べようよ。」

ナノハとツナも料理を持って二人と一緒に座る。

「ありがとうツナ、ナノハ。」

「「どういたしまして。」」

「さあ食べようか。」  
モンスターフィリア  
怪物祭の夜は更けていく。

とある路地

ゴクデラとクローム髑髏、山本がある人物と対峙していた。

「それは本当ですか？」

「急だな。」

「……………」

「仕方ねえぞ。あのダメツナが10代目ボンゴレに正式に決まったからな。本来ならもつと早くに就任するはずがああベルが昏睡状態になったせいでもあるしな。」

「……………」でもそれは彼のせいじゃない。それとオラリオに残ると決めたのはボスの意思。」

「そうですね。だから俺達は10代目の決めたことに従ったんすよ。」

「そうだな。ツナにとってベルはある意味恩人だしな。」

「だとしても関係ないぞ。ツナは正式にボンゴレを継ぐ。そしたらこのオラリオとはおさらばになるんだ。アイツだってわかっているはずだ。」

「……………」

「明日俺はツナと話を付ける。お前達も身辺整理はしておけよ。」

ボルサリーノを被った赤子？みたいな少年の言葉が三人の心に響いていた……………

# 白兔ト浅利

## 第14話

side ベル

あれは今から8年前、僕がオラリオに来て間もない頃の話です……………

8年前 オラリオ

エミヤと6歳のベルと一緒に買い物をして街を散策しているとベルが街灯に飾られた旗とそれを飾るガネーシヤファミアの眷属たちに興味を持った。

「エミヤ、あれは何?」

「何だろうな。少し聞いてみるか。」

そう言つてエミヤがガネーシヤファミアの眷属たちが作業しているところに近づ

「この旗をもつと広げて。あれ？ベル君とエミヤさんじゃない。」  
 「アーデイお姉ちゃんこんにちは。」

「やあアーデイ。ところで一体何をしているんだ。」

「ああ、ベル君とエミヤさんは知らなかったね。今日は一週間後に行われる怪物祭モンスターファイリアの準備をしているの。」

「怪物祭？」

それからアーデイがベル達に怪物祭モンスターファイリアについて説明した。

「なるほどな。そういう祭か。なら当日は屋台でも準備して出店でもやればかなり儲けが出るな。」

「これで返せるかな？神様の借金？」

そんな話をしているベルとエミヤの前に……

「はあはあはあ……やつと着いた……」

オレンジ色の髪に女顔の少年がフラフラと歩いてきた。

「もおおりボーンの奴、リンググ争奪戦の会場の場所をヒエログリフで書きやがって……おかげで一週間飲まず食わずでやつとオラリオにたどり着いた……」

パタン！

そして倒れた。

「ねえ大丈夫？」

「こりやかなり衰弱してるな。急いでディアケンヒトの所に」

グウウウウ

「……………」

少年の腹が鳴いた。

ヘステイアファミリア本拠地ホトの廃教会

少年はかなりお腹を空かせていたらしくコマツが作った料理がどんどん少年の胃袋に消えていった。

「ガツガツガツガツ」

「すごい食べっぷりだな。」

「お兄さん凄い。」

「あのくとりあえずお風呂も準備したんで食べ終わったら入ってくださいね。」

「ありがとうございます！」

そして少年が風呂から上がると

「改めまして、助けてくれてありがとうございます。俺はツナつて言います。」

「よろしくツナさん。僕ベルつて言います。」

「ところでツナだっけ？何でオラリオに来たんだ？」

「あゝ……………友達と旅行がてらオラリオに行ってみようかって話になっていざ旅してみたら色々あつて仲間ともはぐれてしまいました……………」

「なるほど……………その仲間の居場所に心当たりは？」

「ないです。」

この時エミヤとユキチ、コマツは思った。

(何だろう……………このままにしておくとフラグが立ちそうな予感がする……………)( )

「だったらツナさん、しばらくここに住んでいいよ。」

「「「え?」」」

ベルの提案にあっけにとられるエミヤ達とツナ。

「だつてツナさん達は仲間の友達とオラリオに旅行しに来たんだよね。だったら拠点となる場所があつた方がいいと思うんだ。」

「いやでも、迷惑じゃないかな?」

「僕は迷惑だなんて思わないし事情を話せば神様もきつと許可してくれると思うよ。」

（ヘステイアの事だからきつと許可するだろうな……あいつはベルに甘い所があるしな……）

エミヤはバイト中でいないヘステイアの事を考えてベルの提案をあつさりと思決すると思つた。

そして案の定……

「まあベル君が良いつて言うならボクは反対しないよ。」

帰つてきたヘステイアは本当にあつさりとツナの滞在を許したのだった。

その日の夜

夜寝静まったオラリオの街を巡回するガネーシャファミアリアの眷属たち。

「今日も異常ないですねハシャーナ。」

「そうだな。でも警戒は怠るなよアーデイ。」

ガネーシャファミアリアのレベル4ハシャーナ・ドルリアとレベル3のアーデイ・ヴェルマが巡回している。



ガネーシャファミアリアでは怪物祭が近づくにつれて街の警備も一貫して嚴重に行っているのである。

「ここ最近夜中に辻斬りに合っている冒険者が多数出てるしな。この事件の事も含めて警備をしっかりとしないとな。」

「そうですね。」

そう話していると……

ギヤアアアアアア!

裏路地の辺りから誰かの叫びが聞こえてきた。

「いっ！一体何が!?!」

「急ぐぞー!」

ハシャーナとアーデイが走り出す。

その頃路地裏では……

「うお、おい！これがオラリオの冒険者かよ!」

銀色の挑発に剣を持ったガラの悪そうな男が切り殺したであろう冒険者を足蹴にして大声で叫んでいた。

するとそこへ

「おいお前！そこで何している!」

ハシャーナとアーディが駆けつける。

「どうやらさつききの奴より手ごたえのありそうな奴らが来たみたいだな。」

銀髪の男が剣を二人に向ける。

「まずは男、テメエからだ！」

男がハシャーナに向かって剣を振る。

ハシャーナはとつきに持っていた盾で防ごうとするが

「甘いぜ！アタック・ディ・スクアロー 鮫 衝 撃！」

強烈な一撃が盾を構えるハシャーナを吹き飛ばす。

「ぐあ!? (衝撃で手に力が……)」

「ハシャーナ!？」

「うお、おい女！お前は強いのか!？」

男はアーディに狙いを定める。

すると

「こんな夜更けに辻斬りとは………穏やかじゃないな。」

「誰だア!？」

月明かりがさし男の前に現れたのは着流しを来た銀髪の男性。

「久しいなスクアロー。息災か？」

「けっ!? 誰かと思えば……生きてやがったのかクソ野郎!」

「あいにく私はそう簡単に殺されるような軟な鍛え方はしていない。」

「け!? 流石『銀狼』だな。」

「その二つ名は捨てた。今は『福翁』の二つ名を持つしがない零細ファミリアの幹部だ。」

「ほおう、てめえが冒険者とは……なら恩恵を刻んで身につけた力がどんなもんか

……俺が確かめてやるぜ!」

スクアアローが『福翁』に切りかかるが

「相変わらず一直線か……」

『福翁』も刀を持ってスクアアローの剣を受け止める。

「チッ!? 俺の一撃すら軽々受け止めるかよ! 全然衰えてねえじゃねえか!? なあユキチ

!」

「お前こそ、義手に色々仕込んでいるみたいだな。昔のように一辺倒ではなさそうだ。」

そう言ってお互い得物を構えるも

ピイイイイ!

笛の音が近づいてくる。

「あの音はガネーシャファミリアの……」

「チッ! これからって時によオ! まあいいや、楽しみが増えたつてもんだ!」

「何しに来た……………」

「てめえには関係ねえ！今日の所は（勝負は）預けたぜ！」

そう言つてスクアアロが剣を納めてその場を足早に去る。

スクアアロが去つた後アアデイがハシャーナの元へ

「ハシャーナ、大丈夫？」

「ああ。とりあえず大丈夫だ。それにしてもさつき奴は一体？」

「ユキチさん、貴方あの男と知り合ひなのですか？」

するとユキチが刀をしまうと

「昔の知人だ。今はどこかの裏組織の幹部をやっていると風の噂で聞いたことがある。」

「そうですか……………」

「悪いがユキチ、例の辻斬りについて知ってる事全て話してもらどうぞ。」

「構わん。だが私が知っているのは10年前のアイツであつて今のアイツではないぞ。」

そう言つてユキチはハシャーナ達について行く。

## 翌朝 廃教会

目を覚ましたツナは教会の食堂でテーブルに座り

「おはようツナ。昨日はよく眠れたか?」

「ええ、おかげさまで。」

「朝食はもうできているから食べるといい。」

「ありがとうございます。」

そう言つてエミヤから朝食を貰うツナ。

「ところで一つ聞きたい。」

「何でしょう?」

「君の指にはめた指輪……それは『ボンゴレリング』だな。」

「!? なつ何故それを……」

「君があゝの異能者たちの組織の人間だとして……何故オラリオに來た。少なくともオラリオと“マファイア”の間には“沈黙の掟”による不可侵協定が結ばれていたはずだ。君のような少年がそれを知っているとは思えないが……」

「それは……」

「もう一つ。君は“マファイア”の人間だとして所属と役職は何だ? その不可侵協定をを無視してオラリオに來ることができる資格を持つのはボンゴレのトップだけだ。」

「……………」

「ツナ、君は『ボンゴレ』のトップ、ボスだな。」

エミヤの一言に沈黙するツナ。

「……………」

「答えたくないか。だが君を匿った時点で私達ヘステイアファミリアは『監視』されている。現に昨夜もこの廃教会の周りを『ヴィンディチェ』が囲んでいたからな。」

「……………」

「とりあえずウラノスの使いが説得して引いてもらったが次は上手くいかないかもしれない。」

「……………」

「マフィアのトップ、しかも『ボンゴレ』のトップを匿ったとすれば私達もマフィアに狙われかねない。ベルやヘステイアに危害を加える危険性がある以上君を匿うならそれ相応の理由を述べてほしい。」

「……………」

食堂に沈黙が走る。

「私達はあの暗黒期の終末……………エレボスの襲撃に関わった事がある。その過程でウラノスと取引して表には出せない依頼フェストを受けている。無論ベルやヘステイアは知らんが

な。」

「……………」

「その依頼の中には君達の同業者と関わった一件もある。だから私に嘘はつけないと思ってくれ。」

「……………ボスじゃない……………」

ツナが小さくつぶやく。

「俺はボスじゃないです。次期ボス候補です。」

「どういうことだ？」

エミヤの質問に対しツナは周りを見渡して

「この話はエミヤさんと俺だけの秘密にしてもらっていいですか？」

「それは話の内容にもよる。」

「そうじゃなきゃ離せません。それに俺の直感が貴方に全て話すべきだと語り掛けている。」

「……………ボンゴレの超直感か、ならここでは不味いな。場所を変えて話を聞こう。」

そう言つてエミヤとツナは食堂を出ていく。

それと入れ違いで

「あれ？エミヤとツナは何処？」

ベルがやって来た。



## 第15話

## 廃教会裏の路地

エミヤはツナを連れて路地に来ていた。

「改めまして、ボンゴレファミリーボス10代目候補のツナ・S・ジエツトつて言います。」

「それでその10代目候補が何故オラリオに来たんだ？」

「それはですね……………」

ツナから語られる内容……………それはオラリオ中を震撼させる内容だった。

## ツナ語り

今から1年前、俺はごく普通の商人の息子だったんです。

だけどある日、俺の親父が家庭教師を雇ったんですがその家庭教師が……………赤ん坊で

した。

「ちよつと待て！話が見えん！何故赤ん坊が家庭教師なんだ？」

エミヤさんの疑問はごもつともです。

俺も最初はそう思いました。

けどこの赤ん坊、妙に大人っぽいつていうかハードボイルドつていうかそんなオーラを醸し出してまして……

とにかくその赤ん坊……めちやくちヤスパルタなんですよ!?

もう死にかける事何千回、酷い目に合わされること何万回、そしてマフィアのボスになれと強要されること何億回と言われる毎日を過ごしまして……

「…………ツナ、お前不幸の星の下で生まれたとか言われたことないか？」

その言葉、年に700回言われました。

「一日2回のペース!」（；。D。）

そんなこんなで俺の生活はその家庭教師が来てから一変しました。

でも悪いことばかりじゃなかったですよ。

友達もできました。

仲間もできました。

守るべきものもできました。

「……………そうか……………」

そんなこんなで色々過ごしていたある日、俺達の住んでる街をある集団が襲撃してきてんです。

彼等の目的は俺と俺の仲間達の抹殺でした。

「!?!」

奴らの名前はヴァリアー……………ボンゴレ九代目ボス直属の暗殺部隊でそのリーダーはX<sup>ザ</sup>a<sup>ン</sup>n<sup>ザ</sup>x<sup>ス</sup>u<sup>ス</sup>s、ボンゴレ九代目ボスの息子で俺と同じボス候補です。

そのX<sup>ザ</sup>a<sup>ン</sup>n<sup>ザ</sup>x<sup>ス</sup>u<sup>ス</sup>sはボンゴレファミリーのボスの座を狙って俺達を襲ってきたんです。

その際その家庭教師の機転でリング争奪戦という形でボスの座を争う事になったんですが……………

「何かあったな。」

はい。争奪戦は3試合終わって俺達の1勝2敗でかなり厳しい状況なんです。

しかも第2試合と第3試合が原因で俺達の街に被害が出たんで場所を変えるってことになって……………変更場所がオラリオになったんです。

「……………」

それで俺達、オラリオに向かったんですけどその道中でアイツらの妨害にあって離れ

離れになってしまいました。

なので仲間達が今どこで何しているのか分かんないんです。

だから………

「仲間達を見つける際にオラリオで拠点となる場所が必要と………まあベルやヘステイアが許した以上私の独断で追いつけ出すわけにもいかないしな。そういう事ならばらくは居てもいい。」

「ありがとうございます！」

「だがその前に私達を囲んでいる奴らを片付けなきゃいけないがな。」  
!?

再び廃教会裏の路地

エミヤとツナを囲むように黒服の男たちが武器を持って構えていた。

「へえ、こんなぼろい教会に逃げ込んだんだ。うしし。」

「そんな事より、ボスが来る前に早い所奴を始末してしまおう。」

その黒服たちの中から明らかに格上と思しき二人が前に出てくる。

「ツナ、奴らがそうか？」

「ええ。ヴァリアーの幹部、ベルフェゴール、レヴィ・ア・タンです。」

「ほう、色欲の悪魔に海の怪物か……大層な名前を持っているな。」

エミヤが冷静に分析する。

（どちらか一人なら私でも対処できるが二人相手だとツナの戦闘力次第だが少々きついな。）

すると

「エミヤ、ツナ兄ちゃん、何処？」

ベルが近づいてきた。

「ベル!? 来たら駄目だ!」

エミヤが制止しようとするが

「何だあのガキは? うしし。まずは見せしめに殺してやるか?」

そう言つてベルに向けてベルフェゴールがナイフをベルに向けて投げる。

ナイフがベルに迫ろうとしていた。

「ベル!」

すると……

バシユツ!

ナイフを掴む炎を灯した手にベルを抱きしめる額に暖かい炎を灯したツナ。

「お前ら………こんな子供まで手を掛ける気か………」

ツナの瞳がベルフェゴールとレヴィを捉えた。

ツナがベルを少し離れたところで降ろすと

「エミヤさん、ここは俺が「いや、君はベルの傍にいてくれ。」!?」

エミヤが手でツナを制する。

「へえーアಂತが相手するのかい? ポンゴレの関係者でもないのに俺達と一戦交える気か?」

「愚かな。お前がオラリオの冒険者だとしても我々ヴァリアーの実力を持ってすればこの街の全冒険者を全て抹殺することなど容易い事。」

するとエミヤがフツと笑い

「それは冒険者相手に実戦を重ねた経験があるみたいだな。」

「当然だ。ここ数日オラリオの実態を把握すべくあちこちで冒険者に闇討ちしているのは我々ヴァリアーだ。」

「何故だ?」

「簡単な事だ。我々のボス、X<sub>ザ</sub>an<sub>ン</sub>X<sub>ザ</sub>us<sub>ス</sub>様がボンゴレのボスになった暁には無用の長

物であるオラリオとの不可侵協定など破棄してここを制圧するつもりだ。」  
 「うしし。面白くなりそうだけ。」

「……………殺し屋か……………なら手加減は無用だな。」

するとエミヤの目が虚無のように深い闇の底のような目になる。

「やれ！」

レヴィの号令でヴァリアーの戦闘員たちがエミヤに襲いかかるが  
 「I am the bone of my sword.」

エミヤが二振りの剣を投影する。

その剣を使って戦闘員たちの攻撃を受け流し、

「お前たちは本当の冒険者を知らないようだな。」

エミヤの剣漸が戦闘員たちの攻撃をさばき、そして彼らに襲いかかる。

「ぐわあああ！」

「ギヤアアア！」

一人は右手を切り裂かれ、もう一人は耳を削ぎ落され、さらにはほとんどの戦闘員たちが一瞬にして戦闘不能に追い込まれた。

「いっつ!?! 一体!?!」

「どうやらお前たちが相手にした冒険者のほとんどは第二級以下、なら第一級の冒険者

相手に戦ったことはなさそうだな。この様子ならお前たちの考えは一瞬で瓦解するだろうな。何故なら私に簡単にやられるほどの兵隊では話にならないからだ。それにお前達幹部では私や『猛者』、アストレアファミリアやガネーシャファミリアの幹部たちの足元に及ばないな。」

「なんだと!?!」

「レヴィ、落ちつけよ。アイツは他の冒険者と違う。どちらかというところとアイツは俺達と同じ殺し屋……それもかなりの手練れだ。」

「今ここで手を引くなら私はお前たちを殺さない。だがこれ以上戦うというなら命を捨てる覚悟を持って臨むことだ。」

その様子を遠くで見ているツナは思わず

「……………凄い……………」

「エミヤは強いよ。なんとたって今オラリオで最上位のレベル6の冒険者だから。」  
「!?!」

ベルの一言を聞いてツナは驚愕する。

(なんとなくエミヤさんに話せば何とかなるって思ったけど……………これはさすがに予想外だな……………)

ツナは改めて自身の超直観にただただありがたいと思うのであった。



その日の夜、廃教会にて

夕食を終えベルが風呂に入っていた頃、エミヤはヘスティアとユキチ、トリコとコマツ、ジャンヌを交えてツナについて話していた。

「それで今朝ツナくんを襲撃してきたそのバリアーだか何だかを君が撃退したと」

「正確にはヴァリアーだ。それで奴らはボンゴレのボスの座を手に入れた後オラリオを襲撃すると言っていた。」

「で、奴らの戦力は？」

「戦闘員はレベル3以上なら問題ないレベルだ。幹部も私やユキチ、トリコが出れば簡単に倒せるレベルだ。」

「それじゃ何が問題なんですか？」

「ボンゴレを倒す事は奴らマフィアの掟オメルタの掟オメルタに引つかかる可能性があるからだ。何せボンゴレの保有するボンゴレリングは世界を構成する『トゥリニセツテ』の一角を担う品物だ。昔爺セウズさんから聞いたことがあるんだがもしボンゴレを返り討ちにしてリン

グを紛失するような事態になればエレボス事件よりも最悪な事態が起こると予想するからだ。」

「それってどういう事?」

「ヘスティア、『チエツカーフェイス』という言葉聞いたことがあるか?」

「たしか……!?待って!?もし君の予見することが現実に起こったとしてそれでその『チエツカーフェイス』が出てきたとしたら……」

「黒竜が出てくるよりも最悪な事態になるだろう。それもオラリオが地図から消えることになるだろうな。」

「!?!?!」( ; ; ㇿ )

エミヤの一言にヘスティアとコマツ、トリコが驚く。

「つまりそれだけの異常事態って事か?」

「そう言うことになる。これはオラリオ全体の存亡にかかわる事だ。しかもその事態を把握しているのは私達だけだという事だ。」

「他のファミアリアに協力を仰ぐのは?」

「ジャンヌ、私達は実力こそ第一級冒険者と変わらないが実際零細ファミアリアの私達の進言をオラリオの主要ファミアリアが聞くとは思えん。それにギルドはエレボス事件の後始末で手が離せない状況だ。となると私達だけで対応するしかない。そこでだ。」

するとエミヤが手紙を3つテーブルの上に置く。

「ジャンヌ、今夜急いでオラリオを出てメイルストラに向かつてくれ。」

「メイルストラ?」

「そこに昔旅で知り合った凄腕の実力者が4人いる。そいつらに当てた手紙だ。ジャンヌ、君ならアイツらを説得できるだろう。まあ一人ごねるだろうがその時はベルの名前を出せ。そうすれば何とかなるはずだ。」

「そうか。でもなぜ手紙が三つ?」

「一人はメイルストラにいる道中で捕まえられるはずだ。そのための道具も渡す。そいつを捕まえる事が出来ればメイルストラからオラリオまで往復で二日で済むはずだ。」

「分かった。」

「それでエミヤよ。私達はどうするんだ?」

ユキチの質問に対し

「今ツナが仲間達を急いで探している。昼間に検問していたガネーシャファミアの面々に聞き出したところツナの仲間と思わしき連中がオラリオに入っていたことが分かった。ツナにそいつらを集めてここに連れてくるよう頼んだ。」

「どういふことだ?」

「ヴァリアーの連中と対峙して分かったんだが私達なら問題ない相手だがツナ達の実力

を考えると明らかに差がある。それはどちらかという経験値という面だ。それが勝敗に左右する可能性がある。だからオラリオでのリング争奪戦が始まる前にツナと仲間達を鍛え上げる必要があると考えた。その家庭教師が何を考えているか分からんがこっちはオラリオの今後がかかっている。何としてもツナ達に勝ってもらう必要がある。だから私達で奴らを鍛える。」

その言葉に目を見開いたユキチはゆっくりと腰を上げて

「その意見に賛同しよう。ヴァリアーの中に昔馴染みがあったのでな。奴を相手にする者が誰であれアイツを相手にするならそれ相応の覚悟が必要だろう。」

それを聞いてトリコも

「俺も良いぜ。本当は俺達でやれば問題ないんだろうけどそれじゃ根本的な解決にはならねえってことだろ？」

「ああ。だから私とトリコ、ユキチの三人で徹底的に鍛え上げる。期間は短いがやるしかないだろう。」

「了解した。」

そしてエミヤはコマツとヘスティアに目配せ

「ヘスティアとコマツは彼等に衣食住を提供するためにホームをできる限り整理しておいてくれ。無論手が空いたら私も手を貸す。」

「分かったよエミヤくん。」

「僕も精一杯サポートします。」

するとベルが風呂から上がってきた。

「あれ？皆どうしたの？」

「ベル、明日ツナが仲間連れてここに来るらしい。だからベルにも一働きしてもらおうぞ。」

「ちよつとエミヤくん、ベルくんは何をさせる気？」

「ベルにもツナ達の特訓に一役買ってもらおう。何せベルには完全無欠の『英雄凶鑑』<sup>アルゴブック</sup>があるからな。」

「特訓！やった！」

ベルが大はしやぎしている。

「……………」(—ω—;) ウーン

「大丈夫か？」

「( (\*・ω・) ( \*—ω—) ( \*・ω・) ( \*—ω—) ウンウン」

エミヤの提案に喜びをあらわにするベルに頭を抱えるヘステイア、ちよつと不安なユキチと彼等に賛同する三人。

オラリオ郊外の宿屋

「ドカスがあー！」

一人の男が荒れていた。

「……………」

「うしし。荒れてるねボス。」

「……………」 Ω \ と 。 ) チーン

フードを被った赤子らしき人物が沈黙している中、ベルフェゴールが笑いながらナイフでジャグリングしレヴィは何故かケツに注射針を刺された状態で倒れていた。

「それでボス。どうするの？その廃教会にいる連中を倒すのは一筋縄じゃないんじゃない？」

「……………」暗殺は辞めだ。争奪戦で奴らを一人残らず殺すぞ。」

「うしし。そう来なくちや♪」

するとホテルの扉が乱雑に開けられ

「づお おい！買ってきたぞオラリオで一番高い酒！」

「遅かったねスクアアロ。」

「あいな！この神酒ソウマって酒、オラリオでもほとんど出回ってないんだぞ！それを飲みた  
いって無茶にもほどがあるだろうが！」

「それは災難だったね♪うしし。」

「笑ってんじゃねえぞベルフェゴール！」

翌朝廃教会にて

廃教会の外にエミヤとベル、ヘスティア達が今か今かと待ち続けている。

「ん？来たみたいですよ。」

コマツが廃教会に近づくと一団に気づく。

「どうやら一晩で見つけられたようだな。」

一団の先頭に立つツナに話しかけるエミヤ。

「なんとか見つけられました。」

その一団を見渡すエミヤ。

「おい、何ガンつけてんだよ色黒野郎！」

「ははは。こんな場所で世話になってるのかツナ。」

「zzz。」

「おおお！極限に燃えてきたぞ！これは合宿っぽいではないか！」

明らかに一癖も二癖もありそうな面々に思わず大丈夫かって思うヘステイアとコマツ。

「こいつはスゲー奴らと知り合ったなツナ。そのエミヤって言う奴もそうだが着流しの男もデカイ男も明らかに実力者じゃねえか。」

するとツナの肩に乗ったボルサリーノに黒スーツを来た赤ん坊が地面に降りる。

「なるほど……赤ん坊の家庭教師って珍しいと思つてたが実際会つて納得した。」

エミヤが赤ん坊の目の前に立つ。

「“アルコバレーノ”に会うのは初めてだ。私はエミヤ、このヘステイアファミリアの副団長を務めている。」

「そういうお前は“世界に縛られた男”か？ちやおつす。俺はリボンだ。」

これがのちにオラリオの歴史上最強と呼ばれることになる『ヘステイアファミリア』と世界有数の白のマフィア『ボンゴレファミリア』が繋がりを持った瞬間である。



## 第16話

## 廃教会裏の路地

「それじゃ自己紹介も済んだところでそろそろ特訓を始めようか。」

初会合から自己紹介を済ませたベル達へステイアファミアとツナ達の面々はエミヤの一言で本題に入る。

「それで誰がツナ達を鍛えるんだ？」

「その前に聞きたいことがある。次の試合は誰が出るんだ？」

「俺だぜ。」

エミヤの質問に対し答えたのは

「君は確か山本武だったか……………なら」

「私が相手だな。」

山本武の相手はユキチだ。

「君は剣を使うと聞いたが」

「ああ。これだぜ。」

山本が持っていた竹刀を見せる。

「なるほど……………」時雨蒼燕流か。」

「!？」

「ならこの場所では分が悪いな。ついてくるがいい。」

ユキチは山本を連れて何処かへ。

「ツナは最終戦だったな。ならベル、ツナの相手をしてくれ。」

「わかったよエミヤ。」

「ちよっ!?ちよつと待ってエミヤさん!？」

するとツナが慌てて止める。

「どうかしたか？」

「だってベルって6歳ですよ。幼児が俺の特訓相手なんて」

「ツナ、お前の家庭教師は赤子じゃなかったか？」

「それはそうですけど……………」

「それとベルはこれでもレベル1の冒険者で少なくとも今の君と同レベルの実力と考えるもらっつていい。」

「いや、それでも……………」

「何グダグダ言っただダメツナ。向こうが指名したんだからさっさとやれ。」

渋るツナにリボーンが小言弾をツナに撃ち込んだ。

「……………分かったよ。それじゃやろうかベル。」

「うん。」

ツナは覚悟を決めベルと路地のガラクタの乱雑する場所へと向かう。

「さてトリコ、お前はそこのリヨウヘイの相手をしてやってくれ。」

「分かったぜ。じゃありヨウヘイ、あつちでやろうか?」

「おう! 極限に燃えてきた! 頼むぞトリコ!」

トリコとリヨウヘイはベル達とは反対側の空き地に向かう。

「それじゃ残るは」

「俺だな。」

「ん? 何か勘違いしてないか?」

「ああん? どういうことだ?」

「私が相手にするのはゴクデラ、君だけじゃない。そのランボも含めた二人だ。」

「ああ!?! 舐めてんのか!?! この俺を、10代目の右腕である俺がなんでこの馬鹿牛と組んでやらねえと行けねえんだ!」

「簡単な話だ。現状あの3人は少なからずとも個人としての改善の余地がある。だがお前とそこのランボは個人の實力の前に圧倒的に足りてない所がある。それを今から教

えてやる。実戦形式でな。」

エミヤが双剣を構える。

「舐めやがって！おい馬鹿牛！起きろ！」

そう言つてゴクデラがランボに拳骨を落として起こす。

「ふぎや!？」

「さつさとあのクソ色黒倒して10代目の応援に行くぞ！」

するとエミヤが軽く笑いながら

「どうやら冒険者を侮っているみたいだな。なら一度知ってもらおうとしよう。圧倒的な実力差というモノをな。」

### 路地の東側

対峙する武とユキチ。

ユキチが刀を構える。

「さて特訓を始める前に一つ言っておくことがある。」

「何だ？」

するとユキチが武の持つ竹刀を指し

「以前私が刀を交えて勝てなかつた相手が4人いる。」

「……………」

ユキチの話に山本は静かに耳を傾ける。

『飛天』比古清十郎、『桜蘭』沖田総司、『敗者』佐々木小次郎、そして……………『篠雨』山本時雨秋雨こと山本剛。」

「!?」

「どうやら山本剛は君の親縁みたいだな。」

「ああ親父だ。」

「なるほど……………では時雨蒼燕流も彼から教わつたのか？」

「ああ。」

「では君の覚悟のほどがどれくらいか……………まずは小手調べといこうか。」

そう言つて一瞬で武の懐まで飛び込むユキチ。

キイイイン！

「!?」

一瞬驚くも武も時雨金時でユキチの斬撃を防ぐ。

「ほう。反応速度は中々……でも気を抜くとその首が飛ぶかもしれんぞ。」

「すぐさま一撃目を放つユキチに対し防戦一方の武。」

（この人……めちやくちや強い!?こんな相手に親父は勝ったのか!?)

「言っておくが勝てなかった。負けたではない。私が戦っていた時代で剣士の戦いは負け。死だ。」

「!?」

「ゆえにその4人とは未だに決着がついていない。」

「そう言つてユキチが距離を取る。」

「そして君が相手するであろうスクアーロは私が現役晩年の時に現れた最も才能ある剣士だ。その剣士を相手に勝つつもりなら奴を超える気迫をもつて挑むべきだ。君にその覚悟はあるのか?」

「その事……親父にも言われたぜ。だけど俺は決めたんだ。自分がやらなければいけない戦いは……『遊び』じゃねって。」

「……そうか。では小手調べは終わりだ。ここからは全力で行く。もちろん殺しはしない。だが死ぬ気で立ち向かわないと怪我では済まないぞ。」

「上等!」

「今度は武がユキチに斬りかかる。」

「ふふ。久しぶりに鍛えがいのある男が現れたものだ。」  
ユキチはどこか嬉しそうに笑っていた。

### 路地の西側

ベルと対峙するツナ。

「じゃあ行くよツナさん。顕現せよ英雄アルゴブック凶鑑。」

ベルの右目が光り、その光が本の形になってベルの頭上に現れる。

「あの本は……………」

「気を付けろツナ。あれは魔術の類だぞ。」

リボーンリボーンの忠告を聞いてツナが身構える。

『Number 2 The folklore of fierce flames  
Kyo Kusanagi Actual』

本のページが開きそこに書かれたバンドナを巻いた男性の絵が炎を纏ってベルの中に入っていく。

『「見せてやる！草薙の拳を！」』

ベルの中に憑依した人物がベルとシンクロして話す。

「これは一体……………」

「これがヘステイアファミアリア団長ベル・クラネルの能力だ。」

そう言つてエミヤが近づいてきた。

「おうエミヤ。ゴクデラとランボはどうした？」

「あの二人なら早々に眠つてもらつた。正直一番手のかかる手合いだ。」

「ほう。あの二人を一瞬で倒したのか。やっぱりアンタは強いな。ボンゴレの仲間になる気はないか？」

「悪いが私のマスターはベルだ。そういうのを探したければ他を当つてくれ。」

「それは残念だ。」

エミヤとリボーンが話している中、ベルは

『「それじゃ行くぜ！」』

ツナに向かって攻撃を仕掛ける。

ベルの右手が炎を纏い薙ぎ払うように炎をツナにぶつける。

それをツナは死ぬ気の炎を纏った両手で防ぐ。

「くうう！これは死ぬ気の炎とは違う。別の何か……………」



『「燃えたる？」』

ベルが火の灯った人差し指を口許に近づけてフツと息を拭いて消す。

(ベル……………君は一体何者なんだ……………)

ツナはベルの能力に疑問を持つ。

『「それじゃもういつちよ行くぜ！」』

ツナの葛藤に気を取られることなくベルが再びツナに向かっていく。

「今はベルの能力を気にしている場合じゃない」死ぬ気で受けて立つ！」

### 路地の南側

リヨウヘイはトリコと特訓していた。

「はあはあはあ……………」

「どうした？もうへばったか？」

仰向けに倒れてる傷だらけのリヨウヘイと仁王立ちしながらほぼ無傷のトリコ。

「はあはあ……………極限に俺は感動している。こんな男がこんな場所にいたとは……………だ

からこそここで倒れているわけにはいかんだ。もう一度頼むトリコ。」

そう言つて起き上がるリヨウヘイ。

「それじゃ行くぜ。10連釘ハンチ！」

「マキシムキャン極限太陽！」

二人の拳が交差する。

### 廃教会

エミヤ相手にたった10秒で瞬殺されたゴクデラとランボは廃教会の中で……………

「……………つたく！あの色黒、一体何者だよ!?!」

ゴクデラは廃教会の中で目を覚ますと悪態をつきながらコマツが作った朝食を食べていた。

「仕方ありませんよ。あのエミヤさん相手に勝てる冒険者なんてここオラリオでも少数ですしそれに貴方はまだオラリオに来たばかりで冒険者がどういふモノか分からないですし」

「だからって何もできずに倒されるなんて……十代目の右腕としてなんて情けないことを……………」

ゴクデラはかなり悔しがっている。

「でもまあこの連中が強いつて事は分かる。あの色黒もそうだが芝生の相手をしてるあの犬男も山本の相手をしてる白髪野郎も俺達よりもましてやヴァリアアの連中よりも強い。」

素直に認めたのかゴクデラがエミヤ達を褒めるとコマツも嬉しそうに

「ありがとうございます。」

「ベツ別に褒めた訳じゃねえし……………というか上手いなこの飯。」

「それは良かったです。」

「それより解せねえのは十代目の相手があのガキだつて事だ。あのガキは一体」

「ベル君は僕達へステイアファミリアの団長ですよ。」

「……………」

コマツの一言にだんまりになるゴクデラ。そして

「うそだろ!?あのガキがか!?!」

「ええ。それにベル君が僕達を引き合わせたと言つても過言じゃないですし」

「そうなのか?」

「それにあのツナ君が君達の中心であるように僕達へステイアファミリアにとつての中心はベル君なんです。」

「そうか……………」

コマツの言葉に何かを感じたのかゴクデラは静かになる。

「ところであの馬鹿牛は？」

「ランボ君ならまだ寝てるよ。」

コマツが指さしたところを見ると

「Z z z z……………」

鼻提灯を浮かべて眠るランボにイラつと来たのか……………

「あの馬鹿牛……………呑気に寝やがって……………」(#。D。)

「あのくゴクデラさん、ダイナマイトはしまつてく下さいね。ここ壊されたら僕達が寝るところ無くなってしまいますから……………」(；。|。A

オラリオ郊外の荒野

ジャンヌはエミヤに言われた通り昨晚オラリオを出てマイルストラに向かっていた。その途中でエミヤから渡されたフリップを持ってヒッチハイクポーズで立っていた。「本当にこんなんで捕まるんでしようか？」

ちなみにフリップには『マイルストラまで乗せて』と書かれていた。すると……………

ヴオオン！

いきなり目の前に風景に場違いなド派手なスポーツカーが現れた。

「へえい彼女♪ヒッチハイカーとはしゃれてるね♪乗ってくかい♪」

現れたのはサングラスをかけた男。

「貴方が『速さ<sup>ラディカル・グッドスピード</sup>を極めし男』ストレイト・クーガーさんですね。」

「ほう。俺の名前を知ってるとは……………お嬢さん、アンタは何もんだい？」

「私はジャンヌ・ダルク、エミヤから頼まれて貴方に助っ人を頼みに来ました。」

「へえ。あのエミヤからね。ならさっさと乗りな。そこで話を聞け。」

とりあえず車に乗るジャンヌ。

そして……………

ギューイイイイイーン！

急発進する車。

「うわっ！ちよつと!？」

「なあお嬢さん、この世の理はすなわち速さだと思いませんか、物事を速くなしとげればそのぶん時間が有効に使えます！遅いことなら誰でも出来る！20年かければバカでも傑作小説が書ける！有能なのは月刊漫画家より週刊漫画家、週刊よりも日刊です！

つまり速さこそ有能なのが文化の基本法則！そして俺の持論でさ——ア！」

「ちよつと話聞いてます!?!それと少しスピード落してください!?!これじゃ話せるものも話せませんよ!?!」( ; ㇿ )

この後マイルストラに着くまで話しできずクーガーのあまりの運転に車酔いするこ  
とになったジャンヌであった。

## 第17話

某日深夜

オラリオ郊外のとある壊滅したファミリアの館跡で対峙するのは……………

「これよりリング争奪戦第4試合を行います。」

跡地に設置された会場の中央にいるのは

「よく逃げなかつたな！褒めてやるぜ！」

ヴァリアー側はスクアード。

「逃げねえよ。」

ツナ側は山本武。

「……………」

「それでは始めてください。」

今雨の守護者を決める戦いが始まる。

前日

ベルに連れられてツナはオラリオの街を歩いていく。

「ここが八百屋さんでよくエミヤが野菜を仕入れてくるんだ。この野菜が美味しいんだ。」

「なあベル、明日は山本の試合なのに俺達はこんなところでのんびりしていいの?」

ツナの質問に対し

「大丈夫。ツナは十分強いよ。それに山本さんやリョウヘイさんも今日は体を休めてるよ。」

「だけどゴクデラ君とランボは何故今日も特訓させられてるのかな?」

「多分今朝エミヤが作ったサラダをランボが嫌がってそれをゴクデラさんに押し付けてテーブルごと料理をひっくり返したことが原因だと思う。」

「そう言えばエミヤだけじゃなくトリコも怒ってたよね。」

「うん。食べ物も粗末にするなって言うのが僕達のファミリアで生き残る術なんだってユキチ師匠せんせいが言ってた。」

(ゴクデラ君、ランボ……………愁傷様……………)

ツナは心の中で二人の命運を祈った。



「ところでツナ。気になったんだけど他の二人の守護者って誰？」  
ベルの質問に少し困った表情をするツナ。

「あー……………『霧』の守護者はリボンが最近選んだって聞いているけど誰だか分からないんだ。あと『雲』の守護者だけど……………正直ベル君に会わせるのはちよつと気が引けるんだよな。(だってあの人……………ベル君の力を知ったら絶対仕掛けてくるだろうし……………)」

「どうして?」

ベルが首をかしげる。

「どうしてって言われても……………」(ーωー;) ウーン

「僕もどうしてか知りたいな。何でなんだい小動物?」

「!」

なぜかベルとツナの後ろに学ランを来た少年がいた。

「ひっひっ雲雀さん!」

「やあ小動物。ところでその小さな兎は誰だい?」

雲雀がベルを見る。

「はじめまして。ベル・クラネルって言います。」

「……………」

「あの〜雲雀さん？」

「ねえ小動物、この兎……………君いつの間にも弟できたの？」

「へ？」

「違います！この子は今下宿しているとこの子です！」

「そうなの？」

そう言いながらベルをジロジロ見る雲雀。

すると

「まあいいや。君には何か得体の知れない何かを感じたけどそれを知るのはまた今度に  
するね。」

「は……………はあ……………」

「?」(。・ω・) ?

「ところで小動物。さつきから君達を付けてる奴らは誰なんだい？」

「!？」

雲雀の一言を聞いて辺りを見回すベルとツナ。

するとそこには

「ようやく見つけたぞ兎。」

20人くらいの冒険者たちだった。

「あのくベル君？彼らと知り合い？」

「ううん。知らないよ。」

「しらばつくれるな！てめえのせいで俺達はこのエミヤとかいう野郎にボコボコにされたんだぞー！」

「しかもお陰で俺達のファミリアは解散させられたんだ！」

「おめえをナミモリの裏組織に売っぱらって資金を稼ぐつもりだったのによ！」

「どうやら男たちは人攫いだったようだ。」

その事を聞いて

「ねえ君達……ちよつと聞きづてならない事言ってたね。何ナミモリの風紀乱してるの？」

（あ！不味い……）

雲雀の口調に怒りが出てる事に気づいたツナ。

「あん？なんだてめえは？ひっこんでぶはっ！」

雲雀の前にいた男が雲雀のトンファアの餌食になった。

「ナミモリに手を出してただで済むと思ってるの？まあいいや。君達は今ここで噛み殺すから。」

そう言って冒険者たちに向かっていく雲雀。

「このガキ！冒険者でもないくせにがはっ！」

「ボヘッ！」

「ギャー！」

トンファーで容赦なく相手を粉碎していく雲雀に周りの住人だけでなく流石のツナも引いていた。

「あのツナ、見えないんだけど？」

「ベルは見ちゃだめだよ。」

とりあえずベルの情操教育上見せたらダメだと思ったツナはベルの目を塞いでいた。

メイルストラ

何とか到着したジャンヌはエミヤに指示された場所へと向かう。

「( )か……………」

そこは少しさびれたような歌劇場だった。

「( )に例の三人が……………」

「ああ。ここにいろぜ。アイツらは一癖も二癖もある連中だからな。まあ入れれば分かるよ。」

クーガーに促され歌劇場に入っていくジャンヌ。

そこには

ピロロン！

ステージの上で琵琶を弾く男性とバーカウンターで酒を飲む大男とその隣で日本酒らしきモノを飲む老人。

そして……

「さあ奏者よ、我がステージに薔薇の祝福を！」

いきなりステージに現れた赤いドレスを着た女性が叫ぶ。

男性の弾く琵琶の音に合わせて女性が踊り出す。

「あのくすみません。私オラリオから来たヘステリアファミアリアのジャンヌ・ダルクと  
言います。」

「ん？おいローマ皇帝よ。客だぞ。」

「うるさいな征服王よ。今余は演目をこなすのに忙しいのだ。」

赤ドレスの女性と大男が口論しだす。

「どうせ客は来ないんだろう？ だったらその麗しい女性の話ぐらいいは聞いてやっても

いいんじゃないか？

それこそ王としての務めであろう？」

「ふん。主に言われんでもわかっておるわ。それでジャンヌとやらようこそ我が歌劇場へ。余こそ華麗なるメイルストラの華、ネロ・クラウディウスなるぞ。」

赤ドレスの女性がステージから降りてジャンヌの元へ。

「はい。我がファミリアの副団長からの手紙を持ってきたので」

「ほう。どれどれ」

ジャンヌから手紙を受け取り読むネロ。

「ほう。主はエミヤの使いで来たのか？」

「はい。それともうお二方探しております。一人はイスカンドル。」

「お嬢さん、余に何か用か？」

大男が返事する。

「貴方がイスカンドル。」

「おうよ。」

「こやつは我が歌劇場に入り浸っているただのごろつきであるぞ。」

「そういう言い方はないだろうローマ皇帝よ。」

「本当の事ではないか。以前はアレス率いるラキア数千の軍勢をわずか百人で退けた歴

戦の名君と言われた男も今じゃすっかり飲んだくれではないか。」

「ふん。お前こそメイルストラ最古の歌劇場のプリマドンナにしてメイルストラ最強の女皇帝と言われてたくせに今ではボロ歌劇場のオーナーではないか。」

「よさんかお二方。その嬢ちゃんが困つとるではないか。」

そう言つてネロとイスカンドルの口論を止めたのは着流しを来た老人。

「それで嬢ちゃん、あともう一人探してる人物がおるんじやろ?」

「はい。佐々木小次郎という人物です。」

すると老人が

「ははははは、なるほどのう。ちやうど皆揃つておるの。」

そう言つて老人が立ち上がると隣に立てかけていた刀を持ち

「儂が佐々木小次郎じゃ。」

その言葉を聞き驚くジャンヌ。

「え?! 貴方が!？」

「おう。それで嬢ちゃん。エミヤが儂らに何を頼みに来たんじや?」

ジャンヌは全員に全てを話す。

「なるほどのう。なら儂はオラリオに行くとするかのう。」

「ふむ。面白いな。では余も暴れるとするか。」

「いいね。俺のエンジンがピンピン来てるね。」

小次郎、イスカンドル、クーガーの3人はオラリオに行くことを了承した。

「余は行かんぞ。何故ボンゴレなんぞに力を貸さねばならんのだ。」

ネロが拒む。

「第一、余はプリーモとは竹馬の友だったがそのプリーモを排斥したボンゴレには縁も義理も無いんだからな。」

「あのくそう言えばですね。ベルが何でもオラリオ排斥派のX<sup>ザ</sup>a<sup>ン</sup>n<sup>ザ</sup>x<sup>ザ</sup>u<sup>ス</sup>に狙われてまして……………」

「なああにいいい！」

ネロの怒号が歌劇場に響く。

「何という事だ!? 我が兎がああヴアリアーなる不良集団の食い物にされようとは……………絶対に許さん！」

(エミヤ……………本当にこれでよかつたんでしようか? ベルが狙われているという嘘を教えて彼女は動きましたけど……………バレたらとんでもないことになるのでは……………)

内心ヒヤヒヤしているジャンヌ。

「こうしちゃおれん! すぐにオラリオに出向く準備をせねば。おい巫<sup>フヨウ</sup>譚、支度するぞ。」

ピロロン♪



琵琶を奏でるのを止め男が立ち上がる。

「あの〜彼は？」

「アイツは浪巫謡ロウ・フヨウ、以前ベル達と一緒に旅していた楽師だ。こいつも凄腕だ。」

「こやつも連れていくぞ。」

「そうですか………とここでクーガーの車では運転手のクーガーを除けば二人しか乗れないのでは？」

するとイスカンドルが

「それは大丈夫だ。余が運んでやる。」

「何かあるんですか？」

「余の馬車は最速だ。クーガーの品の無い箱如きに負けるはずがない。」

「おう！イスカンドルのオツサン、言ってくれるね。俺の速さにアンタの馬車がついてくれるのか？」

二人が言い合いをする中

「あー嬢ちゃん、一つ確認したいんじやがここ来る時にクーガーの車に乗ったんじやろ？」

「ええ………アレに乗るのはもうこりごりです………」(ーωー;) ウーン

「………儂もじやよ………」

「余も乗りたくない……………」

「……………」ポロローン♪

ジャンヌ、小次郎、ネロ、そして浪巫謡がだんまりになり……………」

「「最初はグー！」」

じゃんけんで乗り物を決める4人。

さてジャンヌの懸念……………」ベルがX<sup>ザ</sup>a<sup>ン</sup>n<sup>ザ</sup>x<sup>ス</sup>u<sup>ス</sup>sに狙われているという嘘だが……………」

オラリオのメインストリートと歓楽街の狭間

「ツナ……………」何処にいろの……………」

ベルが独りぼっちになっていた。

原因は雲雀の粛清に巻き込まれツナがならず者集団の巻き添えを喰らってフツ飛ばされ、それを追う形でベルが追いかけたんだが知らず知らずのうちに迷ってしまったのだ。

「うーん、どうしようっ？」

すると……………

「おい……………」

ベルの後ろに立つ顔に無数の傷跡を持つ男……………

「あ？ごめんなさい。邪魔でしたね。」

ベルが謝つてその場を離れようとする

「……………待て……………てめえ……………報告に合ったドカス共を匿つてる奴らのガキだな。」

「……………」

ひやりと緊張感が走る中

「顕現せよ英雄アルゴブック凶鑑。」

『Number 36 King of the magic mirror Kyouz

i Kagami Actual』

ベルの周りに鏡の破片が飛び散るように広がり

「『さあ、観察させてもらうよ。』」

鏡が光りだすとその光からベルの分身が無数に出てくる。

「小賢しいガキだ。」

男が鏡を取り出してベルの分身を一体残らず撃ち抜いていく。

「カスがあ、さあ残すはガキ、テメエだけ……………」

分身を全て撃ち抜いてあとはベル本人を倒そうとした男だったが目の前には誰もいなかった。

「……………あのカスがあああ……………どうやらあのガキも始末しないとイケないなああ！」

明らかにこめかみに怒りの文字が浮かび上がっていた男。

「ボス……………あの子供、間違いなくラキアの懸賞に掛けられた『英雄凶鑑アルゴブツクを持つ少年』じゃないか。」

男のすぐそばにローブを着た赤ん坊が現れて

「どういうことだ？」

「あの少年の右目が金色だった。手配書の特徴と一致するし何よりさっきの詠唱式で英雄凶鑑アルゴブツクって言ってたじゃないか。だとすると」

「そうか……………ちようどいいラキアの連中にはクーデターに協力してくれてたからな。アイツらへの土産にガキを捕まえるのも一興だな。」

「だね。ついでに懸賞金もいただいてがっぽりと儲けさせてもらうか。」

ベルは男ザンザスに目を付けられた。

## 後日深夜

雨のリング争奪戦開始前に

「えーX<sup>ザ</sup>anx<sup>ザ</sup>us様から要求が追加されました。リング争奪戦が終わりX<sup>ザ</sup>anx<sup>ザ</sup>us様たちヴァリアー側が勝利した場合、景品としてベル・クラネルを差し出すこと。」

「!!?」「;;」( ; 丱 )

いきなりの出来事にツナ達が驚く。

「!!「なあ何?!」」

「ふえ?」

観客として見に来ていたエミヤ達も驚く。

ベルは何もわからずきよんとしていた。

「てめえらふざけんな!」

ゴクデラの怒号を皮切りにツナ側からブーイングが起こる。

「第一そつちの要求が通るなんておかしいじゃねえか!」

「!!「そうだ! そうだ!」」

「だつたらこういうのはどうじゃん? アンタらが勝つたらウチのマーモンがガメてたへそくりー億ヴァリスを贈呈するって形にするのはどうよ?」

ベルフエゴールが意外な提案をしてきた。

「なっ!? おい何勝手に!？」

「いいじゃねえか。」

「異議なし。」

「大体でめえが提案したんだろうが! てめえが代償を払えや!」

こうしてリング争奪戦にさらなる懸賞が追加され戦いの規模が大きくなった。

### エミヤ側

「どうやらアイツらは俺達を怒らせたみたいだな。」

「そうみたいだな。」

「うむ。奴らを生かしては置けんな。」

エミヤ、トリコ、ユキチの三人の怒気が大きくなり

「「この落とし前きつちりとしてやらねばな!」」 (# 。 ▽ )

「「……………」」 ( ( ; ▽ ) ) ガクガクブルブル

「?」。(。・ω・) ?

あまりの怒気に怯えるヘステイアとコマツ。

そしてベルは何もわからずただその様子を見ていた。

## 第18話

某廃屋敷にて

試合前に一悶着(?) あつたものとりあえず『雨のリング争奪戦』は始まつた。

「ヴオウイ! てめえみたいな野球バカの平和ボケ野郎が相手かよ!」

「ははは、悪かつたな平和ボケで……でも、舐めてたら痛い目を見るぜ。」

退治する山本とスクアア口。

その様子を遠目から見ているツナ達。

「なあユキチ、お前は山本に何を教えたんだ?」

リボーンがユキチに質問する。

「何も教えてない。」

「なっ!」

ツナとゴクデラが驚くが

「私はただ斬りかかったただけだ。それを武が一生懸命受け止めた。ただそれだけだ。」

「ほほう。」

リボーンが関心を示す。



「あの武という少年、素質だけを見れば間違いなく私達側の人間だ。それだけ彼の才能は突出している。」

「やっぱり理解してたか……流石かの有名な『銀狼』だな。」

「その二つ名は捨てた。今の私はヘステイアファミリア武術指南役『福翁』だ。」

「そうか……できればツナの仲間フレンドとしてスカウトしたかったがな。」

「お前の傲慢さは十分理解してるよ。」

「……………（この二人、知り合いか何かか？）」

「無駄話もそのくらいにして試合が始まるぞ。」

リボンとユキチの会話についていけないツナとゴクデラ、そしてエミヤが試合が始まると促す。

## 闘技場

試合開始の合図がなったが山本もスクアードもその場から動かない。

まるでお互いどう攻めるか考えあぐねているようだ。

「腕試しだ！」

いきなりスクアアロが仕掛けてきた。

しかし山本はスクアアロの斬撃を持っていた刀で受け止める。

「へえー、やるじゃねえか小僧！」

「特訓してくれた教官がかなり鬼だったからな。」

そう言つて客席にいるユキチを見る山本。

それにつられてスクアアロも客席を見る。

「ほう……『銀狼』か。なるほどな……だつたらお前に勝つて俺が最強の剣士だと証明してやるぜ！」

ふたたび斬りかかるスクアアロ。

「時雨蒼燕流・二の型、逆巻く雨。」

山本が水をまき上げて姿を隠す。

スクアアロの剣が空を切る。

そして

「時雨蒼燕流・五の型、五月雨。」

中斬りを繰り出す山本。

それを躲すスクアアロ。

だが山本はそのまま持ち手を変えて再び斬りかかる。

「ちいー!」キーン!

スクアーロが一瞬剣で山本の刀をギリギリで受け止める。

「その剣技……………時雨蒼燕流か。」

「どうしてそれを?」

「なるほどな。時雨蒼燕流と『銀狼』の技の融合って訳か。……………だがな!時雨蒼燕流な  
んぞ俺の相手じゃねえんだ!」

スクアーロが三度斬りかかる。

「何度やっても同じだぜ。」

再び山本が水をまき上げて姿を隠そうとする。

スクアーロが剣が空を切り、その背後から山本が斬りかかる。

「同じ手は何度も喰わねえよ!」

スクアーロが剣を持った義手で山本の刀を受け止めると剣を持ち替えて山本の額を  
切り付ける。

「っ!」

「山本!」

客席にいたツナ達が叫ぶ。

「これで俺の勝ちだぜえ！」

するとユキチが

「勝ちを確信するにはまだ早いぞ。」

「何言つてやがる!?!お前の教え子であるこのガキを殺したんだ!次はお前だぜ『銀狼』!てめえを殺して俺は名実ともに世界最強の剣豪の仲間入りだぜ!」

するとユキチはフツと笑い

「3つ、誤りがある。一つ、武は私の弟子ではない。一つ、今の私は『銀狼』ではない。

一つ、武はまだ生きているぞ。」

「なあに!」

ユキチに言われて山本の方をみるスクア一口。

すると山本はアハハと笑いながらびんびんしていた。

「いや、危なかった。ユキチさんの特訓してなかったら額が切れてたな。」

「てめえ!?!アレを躲しただと!?!」

## 観客席

「なあユキチ。奴にどんな特訓をしたんだ？」

エミヤがユキチに質問する。

「さつきも言ったはずだ。私はただ武に斬りかかりそれを躲す。ただそれだけだ。」

「…………お前の剣は確か居合いの類だったな。という事は山本は反射神経がかなり高まった状態で今戦っているのか？」

「そうだ。今回の相手…………スクアーロは勝つためなら己の体すら犠牲にする執念の持ち主だ。そんな相手に生半可な動きでは逆に致命傷になるのがオチだ。だったら…………」

「お前の瞬速の居合いと剣術を回避したり防いだりして動体視力と反応速度を極限まで高めた訳か。」

「それだけではない。私がかつて戦った奴の父親との決闘をその場で体感させた。それがあいつだけの時雨蒼燕流を生み出すきっかけになった。」

「……………なるほどな。」

「[[[[[?]]]]」

「[[((X)3(X))]]」

ユキチの言葉を聞いて何故か納得したりボーン、エミヤ、トリコの三人。

ツナ達やヘスティア、コマツは首をかしげる。  
ベルとランボは眠くなつたのかウトウトしていた。

### 再び闘技場

山本が再び刀を構える。

「スクアーロ、アンタは時雨蒼燕流と戦つたことがあるんだよな。でも俺が親父から受け継いだ時雨蒼燕流は無敵だ。」

「なら証明してみせな！」

スクアーロが仕掛ける。

「見せてやるぜ。俺の時雨蒼燕流をな。」

山本が構えた姿はまるで打席に立つバッターのようなフォームだった。

「そんな丸わかりな構えで何をやるつもりだア！そんなのは通用しねえんだよ！」

スクアーロはそんなことを気にしないかのように突進してくるが

「ふん！」

山本が水をまき上げまるで鏡のように山本を映し出す。

「そんな小細工が効くかア！」

パツシュ

スクアアローが山本がまき上げた水を弾いて突進してきたがそこに山本はいなかった。  
「なっ!!?どこに消えやがった!!?」

すると真上から山本が現れ、スクアアローに面打ちを決める。

「がアツ!!」

「時雨蒼燕流丸の型・うつし雨。」

スクアアローが倒れる。

「てってめえ……みねうちとはどういうことだ……」

「俺は殺し屋じゃなえんだ。」

そう言ってスクアアローが沈んだのを確認した審判員が

「雨の守護者戦、勝者：山本武。」

山本の勝利を宣言した。

観客席

「やった！山本が勝った！」

「うむ。極限によくやった！」

「よっしゃ！これで二勝二敗。タイに持ち込んだぜ！」

ツナ達が喜びをあらわにする。

しかし……

「スクアール……」

XANNUSがゆっくりと立ち上がり

「失敗した者には死あるのみ。」

そう言つて手を挙げると

バシャーン！

試合会場である廃墟から一挙に水があふれ出てきた。

「これは一体!？」

ツナ達が驚く中、水と共に黒い背びれの水生生物が試合会場に入ってきた。

「その鮫に喰われて死ぬ。」

XANNUSがスクアールに対して死刑を宣告した。



「ヴァリアアの掟は絶対……………」

「XANXUS！」

ツナが激昂する。

「お前仲間を……………」

「仲間？違うな。俺の守護者は皆俺の部下だ。」

XANXUSの冷たい発言にツナだけでなくゴクデラ達も怒り心頭だ。

「落ち着け。ここで怒りをぶつけられればそれだけ奴らの思うつぼだ。」

そんなツナ達を窘めたのはエミヤだった。

「てめえは……………」

「私はエミヤ、ヘスティアファミリア副団長。お前が戦利品として身柄を要求したベルの保護者でもある。」

「ほう？で、俺達とやり合うって言うのか？」

「いや？私達はあくまでオブザーバーだ。この試合事態に介入する気はない。そう試合中はな。」

エミヤが意味深な発言をする。

## 闘技場

スクアアローがXANXUSの処刑宣言を受け入れその場に座り込んだが「何やってんだスクアアロー!?!早く逃げるぞ!」

山本がスクアアローを立たせようとするが

「余計なことするなア!」

スクアアローが山本を突き飛ばす。

「スクアアロー!?!」

「敗者に情けをかけんじゃねエ!そんな軟な考えで俺に勝ったってんならやつぱりお前はガキだア!そんなんじゃこの先勝てねえのが目に浮かぶぜエ!」

「そんな事気にしてんじゃねえよ!俺は例え何と言われようとアンタを助ける!それがツナの仲間としての矜持だ!」

しかし水かさが増し鮫が一頭山本たちの方へ向かってくる。

「ちつくしよー!諦めねえぞ!」

山本が刀を構える。

「来るなら来い!」

「ふむ。いい心がけだ。戦う男の覚悟を感じたぞ。」

「!?」

ふと背後から声がする。

するとそこには観客席にいたユキチが立っていた。

「てめえ!?! 銀狼!?!」

「ユキチさん!?!」

「よく言った武。後は私に任せろ。」

そう言つて山本たちを通り過ぎて鯨が迫ってくる方へ歩く。

「こんな方法で制裁とは……………ヴァリアーも趣味が悪い。」

刀を鞘から抜く。

「試合は終わった。……………だから我々は遠慮なく介入させてもらおう。」

刀を振り抜く。

すると鯨は真つ二つに斬られその衝撃で水も真つ二つに割れた。

「!?!」

「……………」

そして他の鯨たちを一瞥して

「失せろ!」

ユキチの一睨みで鮫たちは死の恐怖をかんじたのか一目散に出てきたところに戻っていった。

しかしそれでも水は増え続けている。

水流が迫ってくる。

「さてこれで邪魔者は消えた。出番だベル。」

「うん。」

「!?!」

するとユキチの背中から声が聞こえた。

ユキチの羽織の中から出てきたのはベルだ。

「ベル、頼むぞ。」

「うん。顕現せよ英雄アルゴブック凶鑑。」

ベルが詠唱したら本が出てきて

『Number 18 Tyrant of the Ocean POSEIDON  
Actual』

本のページが開かれるとそこに三又トライデントの槍を持った美青年の姿があらわになる。

『余が支配するは七つの海、侮るなよ雑魚が!』

美青年が三又トライデントの槍を迫ってくる水流に向けると水流がまるで巻き戻っていくかのよ

うに勢いが止まっていく。

「嘘だろ……………」

「マジかよ……………」

「出会った人物の記憶を読み取り英雄凶鑑アルゴブックと呼ばれる本に記録、そしてその記録した人物の力を行使する。それがベルの持つ魔導書『英雄凶鑑アルゴブック』の力だ。……………さて」

「ガハッ!？」

するとユキチが刀の柄でスクアーロのみぞおちに一撃を入れ気絶させる。

その様子を見たXANXUSザンクスが闘技場まで降りてきた。

「てめえ、何のつもりだ?」

「このままお前たちの下に奴を帰しても碌な事にならないからな。こいつの身柄は我々へステイアファミリアが預かる。」

「何だと……………」

「言っておくが強硬手段に出ようとは考えるな。お前の部下たちはすでにエミヤとトリコが睨んでるからな。」

そう言つてスクアーロを担ぎベルの手をつないだユキチは

「お前が過去のオラリオとボンゴレの関係を絶つて全てを壊そうとしているのは分かっている。だが……………オラリオはベルと私達の大事な場所だ。……………手を出すならそれ相

応の犠牲は覚悟することだな。」

XANNXUSが囁いた後ユキチはそのまま闘技場を後にする。

「貴様、俺をなめてんじゃねーぞ！」

XANNXUSが拳銃を取り出しユキチに銃口を向けようとすると

「お前こそ我々を……ヘスティアファミリアを舐めるな。」

XANNXUSの頬を何かが掠る。

「!？」

一本の矢だった。

放ったのは観客席にいるエミヤだった。

「ボス!？」

「おっと動くな！俺は無益な殺生は嫌いなんだ。」

トリコがレヴィとベルフェゴールの背後に立つ。

「!？」

エミヤが今度はマーモンの方に弓を向けた。

「下手に幻術を仕掛けると容赦なくお前の眉間に矢を見舞うことになるぞ。」

「……………」

XANNXUS達の動きが停まる。

「言っておくが今のは威嚇だ。リング争奪戦中に我々を相手にするなら容赦はしない。ヴァリアーごと……」

ユキチ、エミヤ、トリコの声が重なる。

「「ボンゴレを潰す！」」

これがヘスティアファミリアとヴァリアー、そしてボンゴレファミリーとの三者間抗争の幕開けだった。